

新堂遺跡Ⅶ

—大型商業施設建設に伴う発掘調査報告書—

2023年3月

奈良県橿原市役所

序

ここに、新堂遺跡の発掘調査報告書を『橿原市埋蔵文化財調査報告 第19冊 新堂遺跡Ⅶ』として刊行します。本書は、奈良県橿原市新堂町に所在する新堂遺跡において橿原市教育委員会が令和2年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。この発掘調査は、大型商業施設の建設に伴って実施した調査で、令和元年度に刊行した『新堂遺跡Ⅳ』で報告を行った発掘調査と同一の事業に基づいています。

橿原市西部では、京奈和自動車道の建設に伴う発掘調査により、縄文時代から中世にかけて、相次いで新たな遺跡が発見されています。新堂遺跡もその一つで、渡来系遺物を含む古墳時代中期の注目すべき遺物が多数発見される等、多くの新知見が得られています。中でも渡来系遺物は、国内外の研究者やメディアから度々注目される等、その重要性が広く知られています。

本書で報告を行う橿教委2020-2次調査では、古墳時代中期の河道から多数の遺物が出土しました。その中には、古墳時代中期初頭に遡る初期須恵器等の貴重な資料が含まれています。また、河の中で発見された大規模なしがらみ遺構は、河の流れを制御するための構造物で、水辺で暮らす人々の努力と工夫の証です。これらの成果をはじめとして、当地域の歴史を考える上で重要な成果を数多く得ることができました。

最後になりましたが、現地の発掘調査並びに本書の刊行にあたってご協力いただいた関係諸氏ならび諸機関に厚く御礼申し上げますと共に、本書が多くのの方々を活用され、遺跡の重要性を周知する機縁となることを願います。

令和5年3月30日

橿原市長 亀田 忠彦

例 言

- 1 本書は、奈良県橿原市新堂町に所在する新堂（しんどう）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書で報告を行う発掘調査は、イオンモール株式会社および株式会社大和流通経済研究所より大型店舗建設に伴って提出された埋蔵文化財発掘届出書に基づき、奈良県文化財保存課の指導のもと橿原市教育委員会が実施した。遺物整理・報告作業は橿原市役所・橿原市教育委員会が行っている。
- 3 発掘調査及び整理・報告作業にかかる費用については、イオンモール株式会社および株式会社大和流通経済研究所が負担された。記して感謝申し上げたい。
- 4 現地調査期間は令和2（2020）年6月1日～令和2（2020）年12月7日である。
- 5 遺物整理・報告書作成期間は令和3（2021）年度～令和4（2022）年度である。橿原市では令和3年度まで埋蔵文化財行政を教育委員会文化財課が担当しており、令和4年度からは同担当部署が市長部局へと移管となり魅力創造部文化財保存活用課が担当している。
- 6 現地調査時の体制は、橿原市教育委員会 文化財課長 竹田正則、課長補佐 露口真広・松井一晃、統括調整員 平岩欣太・横関明世、主査 石坂泰士、技術員 上井佐妃である。現地調査は石坂・上井が担当した。

遺物整理時の体制は、令和3年度が文化財課長 竹田正則、課長補佐 露口真広・松井一晃、統括調整員 平岩欣太・横関明世、主査 石坂泰士・杉山真由美、技師 上井佐妃、令和4年度が文化財保存活用課長 露口真広、課長補佐 松井一晃・平岩欣太、保存計画係長 石坂泰士、技師 上井佐妃である。整理作業は石坂・上井が主に担当した。
- 7 発掘調査及び整理作業を実施するにあたって、地元各位をはじめ、奈良県文化財保存課、奈良県立橿原考古学研究所より多大な御協力を得た。記して感謝申し上げたい。
- 8 出土遺物をはじめ調査記録は、橿原市役所文化財保存活用課で保管している。
- 9 本書所収の写真は、現場調査写真のうち地上写真を橿原市教育委員会（当時）調査担当者が、航空写真は安西工業株式会社が撮影を行った。遺物写真は株式会社地域文化財研究所が撮影を行った。
- 10 本書の執筆および編集作業は石坂・上井が担当した。文責は全編、石坂である。

凡 例

- 1 本書で示す方位は座標北を使用した。座標値は世界測地系（平面直角座標第Ⅵ系）に基づく。
- 2 写真図版に掲載している遺物の縮尺率は任意である。
- 3 遺構・遺物の図面縮尺は各図に示している。
- 4 土層名における色調は『新版標準土色帖 24 版』（小山正忠・竹原秀雄 編著、日本色研事業株式会社 発行）を使用した。
- 5 遺構断面図の標高値はメートル表記である。小数点以下の記述が無い場合、小数点下の値は 0 である。標高値は東京湾平均海面（T.P.）からの値である。
- 6 遺物実測図の番号は、本書全体の通し番号で示している。図版の遺物番号もこれと一致している。なお、遺物番号 1～29 が調査区 3 区出土、30 以降が調査区 4 区出土の遺物である。
- 7 土器の実測図については、須恵器を断面黒塗りで、その他の土器は断面を白抜きで、それぞれ表現している。
- 8 掲載している土器の拓本図は、特に注釈の無い限りは外面の拓本である。

目次

序	i
例言	iii
凡例	iv
目次	v
挿図目次	vi
第1章 調査の経過	
第1節 調査と整理・報告に係る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3章 調査の成果	
第1節 調査の方法	12
第2節 3区 基本層序と遺構面	13
第3節 3区 遺構	17
第4節 3区 出土遺物	22
第5節 4区 基本層序と遺構面	27
第6節 4区 遺構	34
第7節 4区 出土遺物	46
第4章 総括	
第1節 調査成果のまとめ	73
第2節 古墳時代河道のしがらみ遺構	76
報告書抄録	78
図版	

挿 図 目 次

図 1	調査地位位置図	7
図 2	調査地周辺遺跡地図 (S = 1/12,500)	9
図 3	調査地周辺の地形と発掘調査地点 (S = 1/2,500)	10
図 4	3区 調査区北壁土層断面図 (S = 1/50)	14
図 5	3区 調査区西壁土層断面図 (S = 1/50)	15
図 6	3区 調査区南壁土層断面図 (S = 1/50)	16
図 7	3区 完掘平面図 (S = 1/200)	18
図 8	3区 上層遺構平面図 (S = 1/200)	19
図 9	3区 下層遺構平面図 (S = 1/200)	20
図 10	3区 遺構断面図 (S = 1/40)	21
図 11	3区 耕作溝群出土遺物 (S = 1/4)	22
図 12	3区 3101SD 出土遺物 (S = 1/4)	23
図 13	3区 3105SD 出土遺物 (S = 1/4)	25
図 14	3区 3103SD 出土遺物 (S = 1/4)	25
図 15	3区 表探遺物 (S = 1/2)	26
図 16	4区 調査区東壁土層断面図① (S = 1/50)	28
図 17	4区 調査区東壁土層断面図② (S = 1/50)	29
図 18	4区 調査区南壁土層断面図 (S = 1/50)	30
図 19	4区 調査区西壁土層断面図① (S = 1/50)	31
図 20	4区 調査区西壁土層断面図② (S = 1/50)	32
図 21	4区 調査区北壁土層断面図 (S = 1/50)	33
図 22	4区 上層遺構平面図 (S = 1/400)	35
図 23	4区 上層遺構平面・断面図 (S = 1/50)	36
図 24	4区 下層遺構平面図 (S = 1/400)	38
図 25	4区 調査区南東部 下層遺構平面図 (S = 1/150)	39
図 26	4区 4301SD しがらみ遺構 平面・立面図 (S = 1/40)	40
図 27	4区 下層遺構断面図① (S = 1/40)	42
図 28	4区 下層遺構断面図② (S = 1/50)	43
図 29	4区 下層遺構断面図③ (S = 1/40、1/80)	44
図 30	4区 耕作溝出土遺物 (S = 1/4、1/2)	46
図 31	4区 4301SD 1層出土遺物① (S = 1/4)	48
図 32	4区 4301SD 1層出土遺物② (S = 1/4)	50
図 33	4区 4301SD 1層底面蛇行流路出土遺物① (S = 1/4)	52
図 34	4区 4301SD 1層底面蛇行流路出土遺物② (S = 1/4)	54
図 35	4区 4301SD 1層底面蛇行流路出土遺物③ (S = 1/4)	55
図 36	4区 4301SD 2層出土遺物① (S = 1/4)	56
図 37	4区 4301SD 2層出土遺物② (S = 1/4)	58
図 38	4区 4301SD 2層出土遺物③ (S = 1/4)	59
図 39	4区 4301SD 2層出土遺物④ (S = 1/4)	61

図 40	4区	4301SD	2層出土遺物 ⑤ (S = 1/4、1/2)	62
図 41	4区	4301SD	2層出土遺物 ⑥ (S = 1/4、1/2)	63
図 42	4区	4301SD	3層出土遺物 ① (S = 1/4)	64
図 43	4区	4301SD	3層出土遺物 ② (S = 1/4)	66
図 44	4区	4301SD	3層出土遺物 ③ (S = 1/4、1/2)	68
図 45	4区	4301SD	3層出土遺物 ④ (S = 1/4、1/2)	69
図 46	4区	4301SD	しがらみ遺構周辺出土遺物 (S = 1/4)	70
図 47	4区	4301SD	一括出土遺物 (S = 1/4、1/2)	71
図 48	4区	古墳時代	SD 出土遺物 (S = 1/4)	72
図 49	新堂遺跡 (福教委 2015-4・2016-1・2016-2・2020-2 次) 発掘調査地位置図			74
図 50	2～4区	古墳時代	遺構平面図 (S=1/1,000)	75
図 51	しがらみ遺構の構築方法と構造			77

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査と整理・報告に係る経緯

本書は、大型店舗の建設に伴って実施した新堂遺跡の発掘調査報告書である。

本書および『新堂遺跡Ⅳ』で報告する一連の調査は、大型店舗棟を含む大規模開発計画実施に伴って、平成 25（2013）年 9 月 17 日付でイオンモール株式会社より提出された「遺跡有無確認踏査願」および平成 27（2015）年 11 月 5 日付で株式会社大和流通経済研究所より提出された「埋蔵文化財発掘届出書」に基づいて実施された調査である。この当初の開発計画に沿って平成 27（2015）年度～平成 28（2016）年度に発掘調査（調査区名 1 区および 2 区。榑教委 2015-4・2016-1 次調査および榑教委 2016-2 次調査）を実施し、その成果をまとめた発掘調査報告書『榑原市埋蔵文化財調査報告第 16 冊 新堂遺跡Ⅳ』を令和 2 年 3 月に刊行した。ここに至るまでの調査と整理・報告の経緯については同報告書に掲載しているので、そちらを参照されたい。

1 区・2 区の発掘調査後、開発事業計画に変更があり、令和元（2019）年 5 月 8 日付で「埋蔵文化財発掘届出書の内容一部変更願」が提出された。変更後の計画において新たに事業対象地となった敷地北端部を対象として、令和元（2019）年 6 月 4 日～14 日に榑原市教育委員会が試掘調査を実施し、古墳時代中期を中心とする時期の遺構・遺物が存在することを確認した（図 3）。変更後の開発計画と既往の調査成果をもとに、事業主と榑原市教育委員会とで協議を重ね、令和 2（2020）年度に新たに 2 地点で発掘調査を実施し、その後に整理・報告を行うこととなった。いずれの地点も記録保存調査となる。この発掘調査が本書で報告を行う調査である。

調査区の名称は、先に実施した上記の 1 区・2 区を引き継ぎ、3 区および 4 区とすることとした。3 区の位置は 2 区の北西に隣接する地点である。4 区は 3 区から現況の東西道路を挟んで北側、令和元年に試掘調査を行った地点である（図 3）。調査地は新堂遺跡の北端部に位置する。調査面積は 3 区：625 m²、4 区：3,500 m²、合計面積 4,125 m²である。現地調査期間は令和 2（2020）年 6 月 1 日～12 月 7 日、3 区と 4 区の調査を並行して実施している。

榑原市教育委員会では、調査年度を西暦で表し、その年度内に行われた発掘調査名称を年度一調査次数の形で示している。本書で報告を行う 3 区・4 区の発掘調査に対しては、一括して榑教委 2020-2 次調査という番号を付与している。各種の調査記録や出土遺物には、この番号を記して整理・保管している。

発掘調査終了後の令和 3（2021）年度から令和 4（2022）年度までの 2 ヶ年を掛けて、整理作業および報告書刊行作業を榑原市教育委員会（令和 3 年度）・榑原市役所魅力創造部文化財保存活用課（令和 4 年度）で行っている。整理作業および報告書刊行にかかる費用は事業主が負担している。

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は令和2(2020)年6月1日から令和2(2020)年12月7日までの期間実施した。3区と4区の調査を並行して進めた。調査の日々の記録は、以下の調査日誌抄録に掲げた。

令和2(2020)年6月1日(月)

調査開始。調査区名は南を3区、北を4区とする。4区の表土(現況の水田耕作土)除去と周辺整備作業。表土中から、須恵器・土師器の出土あり。

6月2日(火)

4区、南から重機で遺構面まで掘り下げ。調査区壁面沿いに人力で排水溝を掘削。表土上面から約0.5～0.6mの深度が遺構面。調査区南東部には、2区河道の延長部分と思しき砂層が広がる。これより西は褐色粘質土の良好な遺構ベース層。

6月3日(水)

4区、重機掘削。調査区東辺沿いに排水溝掘削。調査区東辺で試掘トレンチ2区・3区の埋戻し跡を検出。埋戻し地点は調査区壁面が軟弱なため、コンパネ養生を行う。

6月4日(木)

4区、重機掘削。試掘トレンチ2・3区埋戻し土を除去。現在の遺構検出面-0.15m程度で底。遺構面は全体に南から北へと緩やかに低くなる。

6月5日(金)

4区、重機掘削。約4割終了。

6月8日(月)

重機掘削。

6月9日(火)

4区、重機掘削。調査区西辺沿い、排水溝掘削。調査区南西部で、斜行溝、土坑の存在を確認。

6月10日(水)

4区、重機掘削。昼前から降雨。雨対策を施して昼で作業終了。

6月11日(木)

雨天のため、現場作業無し。

6月12日(金)

4区、重機掘削。雨水対策の周辺整備作業。

6月15日(月)

4区、重機掘削。河道及びその北側にある溝には古墳時代の土器が含まれる。

6月16日(火)

4区、重機掘削終了。

6月17日(水)

4区、排水溝掘削。3区、重機掘削開始。現況水田面から0.6～0.9mの深度で遺構面。遺構ベース層は4区と同様の灰褐色土。3区南～東側には砂層が広がる。古墳時代河道およびそれに接続する溝か。

6月18日(木)

3区、重機掘削。調査区内での重機作業終了。重機は調査区周辺の排土処理作業へ。調査区壁

面整形、排水溝掘削。調査区全体に南北の耕作溝。3・4区ともに降雨対策作業。

6月19日(金)

雨天のため、調査無し。昨夕～今朝、非常に強い雨、以後も断続的に降り続く。現場保守作業を実施。

6月22日(月)

3区、排水溝掘削。調査区壁面整形。河道・溝が存在する調査区東辺・南辺沿いは湧水が多い。午後、西側から人力で上層遺構(耕作溝群)の検出作業開始。4区、測量メッシュ杭打設。

6月23日(火)

3区、上層遺構(中世以降の耕作溝群)検出写真撮影。3区、4区測量メッシュ杭打設。

6月24日(水)

ベルコン搬入・設置作業。4区南東部、上層遺構検出写真撮影に向けての清掃開始。4区の上層遺構検出作業は調査区全体を概ね四分分割して撮影を進める。

6月25日(木)

4区南東部、上層遺構検出写真撮影。昼前後に強い雨が降る。

6月26日(金)

3区、耕作溝の掘り下げ開始。

6月29日(月)

3区、耕作溝の掘り下げ。

6月30日(火)

雨天のため、現場作業無し。

7月1日(水)

4区南西部、上層遺構検出写真撮影に向けての清掃作業。約8割終了。

7月2日(木)

4区南西部、上層遺構検出写真に向けての清掃、昼前に写真撮影。3区、耕作溝の掘り下げ。

7月3日(金)

3区、耕作溝の掘り下げ。

7月6日(月)

雨天のため、調査無し。雨水処理作業のみ実施。一日中強い雨が降り続く。

7月7日(火)

早朝まで降り続いた強い雨により、4区北辺の調査区壁面が一部崩れる。復旧作業及び排水溝の追加掘削。午後3時半頃から強い雨、作業終了。

7月8日(水)

昨夜遅く～朝にかけて、非常に強い風雨が続く。4区北半に雨水が溜まる。排水作業を実施。

7月9日(木)

梅雨前線の停滞により、西日本を中心にして連日、強い雨が降り続く。4区北東部、壁面が雨

- 天の影響により崩落、コンパネ・土囊で対処。排水溝の追加掘削作業。
- 7月10日(金)
3区、耕作溝の掘り下げ。排水溝の追加掘削。
- 7月13日(月)
敷地北隣の水路の詰まりにより、敷地北西部が一部浸水、排水作業実施。4区、南西隅から耕作溝の掘り下げ開始。
- 7月14日(火)
雨天のため、現場作業無し。
- 7月15日(水)
4区、耕作溝の掘り下げ。12世紀後半頃の瓦器塊出土あり。
- 7月16日(木)
久しぶりの晴天。4区、耕作溝の掘り下げ。石包丁1点出土。上層遺構配置図作成。
- 7月17日(金)
午前9時過ぎまで雨。4区、耕作溝の掘り下げ。下層の河道上に位置する耕作溝中からは土器(古墳時代)が多く出土する。
- 7月20日(月)
4区、南東部の耕作溝の掘り下げ。下層に河道、溝が存在。古墳時代土器を含む。
- 7月21日(火)
4区、耕作溝の掘り下げ。上層遺構4001SK、4002SKの調査開始。どちらも東西耕作溝より古く、南北耕作溝より新しい。南北1.5~2m、東西3~4m、長方形の土坑。以後、4区の遺構番号は4001から順に付与。頭の4は、4区を示す。3区は3001からとなる。
- 7月22日(水)
4区、上層遺構の調査。4001SKは深さ約0.8mの土坑。出土遺物は、下層の河道に由来すると考えられる土器片が少数。粘土取り目的等の穴か。人為的に埋め戻されている。
- 7月27日(月)
降雨続きの四連休明け、現場に問題は無し。4区、耕作溝の掘り下げ。
- 7月28日(火)
4区北半、上層遺構検出写真撮影に向けての清掃。降雨に備え、清掃終了地点から写真撮影を進める。4001SK完掘。
- 7月29日(水)
4区北西部、上層遺構検出写真撮影。
- 7月30日(木)
4区北東部、上層遺構検出写真撮影。
- 7月31日(金)
4区北半全体、上層遺構検出写真撮影。ベルコン設置作業。
- 8月3日(月)
4区南東部、耕作溝の掘削。土曜日(8/1)の雨で調査区南西隅壁面が崩れた為、復旧作業。
- 8月4日(火)
4区、耕作溝の掘り下げ。
- 8月5日(水)
4区、耕作溝の掘り下げ。4002SKの調査。
- 8月6日(木)
4区、耕作溝の掘り下げ。4002SKの調査。4001SKと同様の遺構である。
- 8月7日(金)
4区、耕作溝掘り下げ。4002SKの記録作業。
- 8月11日(火)
4区、耕作溝の掘り下げ。4002SK完掘。中世の土師皿片を含む。
- 8月12日(水)
4区、耕作溝の掘り下げ。
- 8月13日(木)
4区、耕作溝の掘り下げ。
- 8月14日(金)
4区、北東部の耕作溝完掘。
- 8月17日(月)
4区、耕作溝の掘り下げ。気温37℃越えの猛暑。
- 8月18日(火)
4区、耕作溝の掘り下げ。来週前半予定の全体写真撮影に向けての周辺整備作業。
- 8月19日(水)
4区、耕作溝の掘り下げ。ほぼ終了。調査区北東部に耕作溝より古い遺構は現時点で無し。今後も検討を続ける。3区、南半耕作溝の掘り下げ。
- 8月20日(木)
4区、耕作溝完掘。上層遺構完掘写真に向けて清掃作業。3区、耕作溝掘り下げ。
- 8月21日(金)
4区、写真撮影に向けての清掃。3区、耕作溝掘り下げ。調査区南辺付近で、5世紀末~6世紀前半の須恵器・坏身出土。下層の溝由来か。
- 8月23日(日)
日曜であるが、作業員人数確保の都合により、調査を実施。替りに8/26(水)を作業休みとする。4区、古墳時代遺構面検出写真撮影に向けての清掃作業。同遺構の番号を4301から付与。
- 8月24日(月)
3・4区、上層遺構(中世以降)完掘・下層遺構(古墳時代か)検出写真撮影。撮影にはスカイマスタ(高所作業車)も使用。
- 8月25日(火)
3区・4区写真撮影後の養生作業。4区、古墳時代遺構調査に向けてベルコン設置等準備作業。
- 8月27日(木)
4305SD北側の掘り下げ。4309SD検出写真撮影。4区南東の4306SX(砂層)の掘り下げ後、遺構面の再精査・検出作業。
- 8月28日(金)
4区南東部、溝群の検討作業。昼頃から非常に強い雨。同様の天候が続く。
- 8月31日(月)
先週後半から短時間の強雨が断続的に続く。かつ、35℃越えの猛暑が続く。4区南東部、溝群の検出作業。4301SD(河道)と平行する溝が複数存在する。これが遺構となるか、地形の落ち込みであるか、検討を要する。
- 9月1日(火)
4区南東部、溝・落ち込み群の調査。試掘トレンチ跡の北壁を東西断面として利用して時期的前後関係等の確認を実施。4306SXの掘り下げ。
- 9月2日(水)
4区南東部、溝・落ち込み群の時期的前後関係把握。溝の一部は4段階の重複がある。4306SX

- 完掘。底面から須恵器・土師器小片と桃核1点出土。
- 9月3日(木)
猛烈な勢いの台風10号が接近中。金曜日～月曜日頃、日本列島に上陸予想のため、現場の台風養生作業を行う。4区南東部、4314SD(新)・4313SD(古)の調査。
- 9月4日(金)
接近中の台風対策作業。午前で作業終了。
- 9月7日(月)
台風10号、本日、九州北部～朝鮮半島へ。今朝まで強い雨。現場は台風による被害なし。調査区シート養生作業。4区南東部、古墳時代溝の調査。量は少ないが古墳時代須恵器が出土する。
- 9月8日(火)
4区南東部、4312SDの調査。巾1.0～1.6m、深さ約0.6mの溝。南東～北西方向に直線的に伸びる溝である。北西の4305SDと同一の溝となる。遺物は土師器片が少量のみ。古墳時代中期。
- 9月9日(水)
雨天により、現場作業なし。
- 9月10日(木)
4区、4312SD・4319SD・4317SDの掘り下げ。いずれも出土遺物は少ないが、土師器(古墳中期)を含む。4317SDは、調査区南東隅の溝群の中でも古段階の遺構であり、これらの大半が古墳中期以降の遺構となる。
- 9月11日(金)
4区、4312SD・4319SDの完掘。4309SDの調査。河道最終堆積より古い溝だが、先行して調査。深さ10cm弱の浅い溝。溝底面には掘削痕あり。
- 9月14日(月)
3区、平面・調査区断面の精査。
- 9月15日(火)
4区南東部、溝群の土層断面図作成。4301SD(河道)の調査開始。遺構北西部に先行トレンチを設定。溝底面までの深度や土層堆積状況、遺物の出土量等をもとに、調査方法を検討する。
- 9月16日(水)
4区、4301SD先行トレンチ、底面を概ね検出する。深さ約1.7～1.8m。出土遺物は古墳中期の土器。最上層及び底面付近の出土量が相対的に多い。2016年調査地点と比較すると、出土量は少ない。同地点に近づく(南東側)と多くなる可能性もあり。今後注意を要する。4301SDの長軸に沿って8mごとに南からA・B・C…と区画を設定。今後の出土遺物分け等に利用する。
- 9月17日(木)
4区、4301SD先行トレンチ北壁の土層断面記録作業。4301SD、同北壁を基準に8m間隔区画分け、基準杭を河岸沿いに打設。区画ラインは座標とは関係なく、任意の位置。4301SDは大きくI～III層に分けて認識。ただし、2016年調査地点の河道と比べて、各層の差異は認識が難しい。また、今後検討が必要である。北側E・F区のI層掘り下げ。古墳中期後半の土器とともに、少量の中期前半の土器も含まれる。
- 9月18日(金)
4区、4301SDのE・F区、上層深さ0.2～0.3

- mを掘り下げ。その面で、一時の流路となるSDを検出。これは先行トレンチ北壁断面に見るI層下半の溝状落ち込みと対応。検出写真後、掘り下げ。5世紀後半を中心とする土器が出土。量は周辺より多い。SDからは準完形の土器も複数出土。状況記録を行う。
- 9月23日(水)
4区、4301SD、D区I層の掘り下げ。準完形の土師器壺1点出土。E区I層下半の蛇行溝、完掘。
- 9月24日(木)
4区、4301SD、C区I層の掘り下げ。河道検出面から0.25～0.3mの深度で、I層下半のSDを検出。E・F区と同様の蛇行溝状。同SDをC・D区で検出写真撮影。
- 9月25日(金)
昨夜～夕方まで強い雨が続く。現場作業なし。
- 9月28日(月)
4区、4301SD、C・D区I層下半溝の完掘。A・B区I層の掘り下げ。A区南端は、調査区壁沿いにて、崩落防止のための畦を残して掘り下げを進める。A区はB～H区よりも面積が狭い。
- 9月29日(火)
4区、4301SD、A・B区I層下半SD検出後、完掘。A～G区と同SD(5世紀後半の蛇行流路)完掘写真撮影。
- 9月30日(水)
4区、4301SD、E・F区のII層を深さ約0.3mを掘り下げ。II層(少なくとも上半の灰白砂中)には、5世紀後半の土器を含む。ただし、I層より古相(5世紀中頃寄りか)である可能性もあり、今後の認識に注意を要する。II層中の遺物は平面的に各所に散らばって出土している。
- 10月1日(木)
4区、4301SD、C・D区II層上部の掘り下げ、9割終了。F区、II層上部シルト層に含まれる木片(主に小型の自然木)の検出作業。人為的に組まれたしがみ遺構ではなく、自然木の溜まりか。上流のしがみが崩れて流れてきたものである可能性もあり。
- 10月2日(金)
4区、4301SD、F区北東II層上半シルト内の木溜まり(径2cm未満の小枝が主)の検出写真撮影。しがみ遺構ではなく、流木の集積か。A・B区、II層上半の掘り下げ。A区、河道の南東端エリアでは、やや大きめの木(杭?)が頭をのぞかせている。今後の調査に注意を要する。
- 10月5日(月)
4区、4301SD、A区でしがみ遺構と考えられる木材、その上部を検出。II層上半除去段階で同遺構の検出写真を撮影。しがみ周辺は、シルト層であり、これはII層砂層より古い可能性あり。E・F区、II層中段の掘り下げ(河道上面～0.6m～0.9m付近の深さ)。
- 10月6日(火)
4区、4301SD、B～D区II層中段の掘り下げ。5世紀後半(TK208～23頃か)でもやや古手の土器が主か。II層シルト中から、不動物件(長さ約10cm)1点出土。

- 10月7日(水)
4区、4301SD、E・F区Ⅱ層下半(河道上面ー0.9m~1.3m付近)掘り下げ。同層は出土土器が比較的少ない。ただし、出土木材は、上層より全体にサイズが大きくなる傾向あり。上層のしがらみ由来する木材か。B区、Ⅱ層中段の掘り下げ。木製鎌(ナスピ形)2点出土。台風接近中のため、養生作業実施。
- 10月8日(木)
一日中、雨が降り続く。現場作業なし。
- 10月9日(金)
台風接近中、強めの雨が降り続く。少人数で雨水処理・台風養生作業を実施。
- 10月12日(月)
4区、4301SD、B~D区Ⅱ層の掘り下げ。D区、Ⅱ層下半から火焼透かしのある須恵器高環1点出土。同様の土器が2016年調査2区でも出土している。
- 10月13日(火)
4区、4301SD、A・B区Ⅱ層下半の掘り下げ。A区南東隅でしがらみ遺構の北端部において、その一部として樹皮(70×160cm大)を検出。写真撮影。
- 10月14日(水)
4区、4301SD Ⅱ層完掘・Ⅲ層(暫定の最下層と認識している層)検出状況の全体写真撮影。ただし、H区は未掘かつ、A区はしがらみ保護のため、一部残している。この河道の調査において重要となる底面付近の調査前の状況を記録する。ほぼ全体が灰白色砂である。河道兩岸では地山断面が確認できる。地山層は上層が褐色土(遺構ベース層)、下層は暗灰粘土を基本とする。河道埋土との差は明瞭。
- 10月15日(木)
4区、4301SD、G区以南を順次、Ⅲ層の掘り下げを進める。F・G区、河道底面まで掘り下げ。遺構ベース層は淡青~暗灰色粘土、遺構埋土は灰白色砂で、両者の差は明瞭。F区はG区よりも出土遺物量が多い傾向あり。とくにⅢ層下半の粗砂。農具の柄、砥石1点出土。
- 10月16日(金)
4区、D・E区、Ⅲ層の掘り下げ。河道底面検出。これまでのところ、Ⅲ層の堆積は中期前半か。下流から上流に向かうにつれ、出土遺物量が次第に増える。特に出土土器の破片が大きくなる傾向が明瞭である。A~C区も同様の傾向が続くか注意が必要。糶羽口1点出土。
- 10月19日(月)
4区、4301SD、C区Ⅲ層の掘り下げ。昼前から強い雨。昼で作業終了。
- 10月20日(火)
4区、4301SD、B・C区Ⅲ層の掘り下げ。C区は完掘。C区底面は中央部が他より15cm程度くぼむ。埋土はⅢ層と同様で、出土遺物も同様。
- 10月21日(水)
4区、4301SD、A・B区Ⅲ層の掘り下げ。A区のしがらみ遺構から北に約2~3mの地点(B区南端)にて、しがらみ構成材がバラけた流木が出土。写真記録。3区、遺構再検出作業。遺構掘り下げ準備作業。
- 10月22日(木)
4区、4301SD、B区Ⅲ層の完掘。3区、調査区南東部すき取り、遺構検出作業。3103SDの掘り下げ。5世紀中頃~後半の土器あり。3105SD上層すき取り。3105SDは4区4301SDと同一河道と考えられる。氾濫層が薄く西側へ広がり、その最終堆積(5世紀後半か)は、3103SDより新しい。3101SDと3105SDは、同一の河道と考えられるが、調査区内で大きく蛇行し東辺中央で一度調査区外へ出てしまうため、別番号を付与している。
- 10月23日(金)
昨夜からやや強い雨が続き。現場作業なし。
- 10月26日(月)
4区、来週後半の空撮に向けて周辺整備。3区、3103SD南北畦の断面記録。3105SDの掘り下げ。河道の流れの攻撃面となる北辺部は、斜面が削れて角度がきつい。5世紀後半の土器出土。調査区西壁土層断面記録作業。
- 10月27日(火)
4区、4301SD、畦以北のH区の掘り下げ。3区、3101SD・3105SDの掘り下げ。調査区壁面を保護する為、検出上面~約1mで掘り下げを一時的に止める。以後の掘り下げは空撮後に実施。3102SD・3107SD掘り下げ、断面記録。調査区北壁記録作業。
- 10月28日(水)
3区、平面図・断面図作成。4区、4301SD、H区Ⅰ層下半SDの検出、掘り下げ。板材2点、ほぼ成形の土器が捨て込まれたような状態で出土。調査区北側から、全景写真撮影に向けての清掃開始。
- 10月29日(木)
3区、調査区南壁断面・平面の記録作業。4区、4301SD、H区・Ⅰ区Ⅱ層上半の掘り下げ。空撮に向けての清掃作業。
- 10月30日(金)
3区、平面図・断面の記録作業。4区、清掃作業。
- 11月2日(月)
一日中雨が降り続く。現場作業なし。
- 11月3日(火)
祝日であるが空撮に向けての清掃作業を実施。3区・4区、清掃作業。3区平面図作成。
- 11月4日(水)
3区・4区、清掃作業。平面図作成。
- 11月5日(木)
4区、清掃作業および周辺整備。3区・4区、平面図作成。
- 11月6日(金)
3区・4区、古墳時代遺構完掘状態での全景空撮。ただし、河道については、北端部および南端部のしがらみ遺構周辺が調査途中段階での撮影である。午前、高所作業車(スカイマスター)での写真撮影。昼から空撮および測量作業。終了後、調査区壁面および木材周辺の養生作業。
- 11月9日(月)
4区、調査区東壁土層断面記録。4301SD北端のH区Ⅱ層の掘り下げ。4316SDの掘り下げ。

11月10日(火)
4区、4301SD北端部の完掘。Ⅲ層中から土器・木材、大型双孔円盤1点出土。調査区南壁土層断面写真撮影。

11月11日(水)
4区、4301SD北端の掘り下げ。F区の木材溜まり(流木)の取り上げ。調査区南壁・東壁土層断面記録作業。4301SD、A区しがらみ遺構周辺の掘り下げ。

11月12日(木)
4区、調査区南壁・西壁土層断面図記録作業。調査区南東部、溝・ピットの断面畦掘り下げ。

11月13日(金)
4区、4301SD南端しがらみ遺構の写真・図面記録作業。調査区北壁土層断面清掃作業。調査区南東部遺構群の畦掘り下げ。午後2時～4時、奈良県立橿原考古学研究所の現地検討会対応。

11月16日(月)
4区、調査区北壁土層断面記録作業。4301SD南端のしがらみ遺構の解体・木材取り上げ作業。上面の樹皮を除去すると、その20～30cm下でまた樹皮が出土。こちらは、しがらみ構成材の内部に組み込まれている。しがらみ全体の構築方法としては、堅杭を打ち込んだ後、それらの内外に組み合わせるように枝・杭・樹皮を雑多に投入することで、水中に木材や砂から成る塊を造り出している。

11月17日(火)
3区、平面図作成。4区、調査区北壁土層断面記録作業。4301SD南端、しがらみ遺構の掘り下げと記録作業。しがらみの骨組みとなつて残る堅杭を残しつつ、全体を掘り下げ。北側(下流側)では、杭上面から約1.5mの深さまで掘り下げても、杭はさらに下に続く。河底の粘土層まで突き刺していると思われる。また、同上面から約1.0mの深さでも樹皮を検出。一部の杭は、この樹皮の上から打ち込まれている。しがらみ構築の始めの段階に、盛土(砂)で小山を作り、その上に樹皮を被せて土台とした可能性が高い。なお、どの樹皮も水平に敷かれるわけではなく、立体的に波打ったり反り返るような形である。

11月18日(水)
3区、3101SDの掘り下げ。平面図記録作業。
4区、4301SD、しがらみ遺構の解体・記録作業。主にしがらみ骨組となる堅杭の確認作業。堅杭はいずれも先端を鋭利に尖らせている。これらの先端は、多くが河底の粘土ベース層に達するが、深さは最大でも25cmほど(杭全長は1.5m前後)であり、これだけでは自立が難しい。また、杭先がベース層に達せず、その上の砂層内に収まるものも存在する。河底のベース層上に一定量の砂・木皮を盛ったうえで打ち込んだものと考えられる。しがらみ東辺の杭については、河岸斜面に向かって深く(30cm以上)打ち込まれている。

11月19日(木)
3区、平面図記録作成。3101SDの調査区東辺沿いの範囲について、調査区壁面保護のために掘

り残していた部分を重機と人力で掘り下げ。土器に加え、馬歯2点出土。調査後、当該範囲は重機で埋戻しを行う。

11月20日(金)
出土遺物・発掘機材の搬出作業。調査終了に向けて周辺整理作業。3区・4区とも重機埋戻し開始。

11月24日(火)
4区、4301SD南端しがらみ西側、調査区保護用の壁側畦内に入っている木材の抜き取り。埋め戻しを除く調査区内の作業終了。3区・4区、重機埋戻し。

以後、12/7(月)まで重機埋戻し、撤収作業を実施。現地調査完了。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

橿原市は奈良盆地の南部に位置し、北は磯城郡田原本町・北葛城郡広陵町、東は桜井市、南は高市郡明日香村・同高取町、南西は御所市、西は大和高田市に接している。新堂遺跡の所在する橿原市新堂町・東坊城町は、橿原市域の西辺沿い中央付近に位置する。今回の調査地点から西に約100mの地点を北流している住吉川以西は大和高田市域である。

橿原市の南～南東部には龍門山地から派生する丘陵地が広がっており、北に向かって緩やかに下り、その北には肥沃な沖積地が広がっている。調査地はその沖積地に位置している。調査地から東南東に約2kmの地点には名勝大和三山のひとつ、欽傍山が所在する。

調査地周辺の標高は、盆地の中部に向かって、おおむね南から北に向かって緩やかに低くなる。調査地周辺における現在の水田面の標高は、約61m前後である。調査地から西に約500mの距離には葛城川が、東に約1km強の距離には曾我川が、いずれも北流している。先述の住吉川は葛城川の支流の一つである。曾我川は龍門山地西部に、葛城川は金剛山地に源流をもつ。調査地一帯は現在、奈良盆地の主要河川に数えられるこの両河川の間広がる微高地上の水田となっている。しかし、これら大小の河川の位置は時代と共に大きく変化していることが、調査地近辺の地割の乱れに見られる旧河道の痕跡や発掘調査によって明らかとなっている。新堂町の北に隣接する曲川町という町名も、そのような地理的・歴史的背景に由来する。次節で述べる各時代で確認されている遺構群も、河道との関係性の中で築かれているものが多く見られる。

調査地は中世から存続していると考えられる新堂集落（新堂環濠）の北側一帯に広がる耕作地帯で

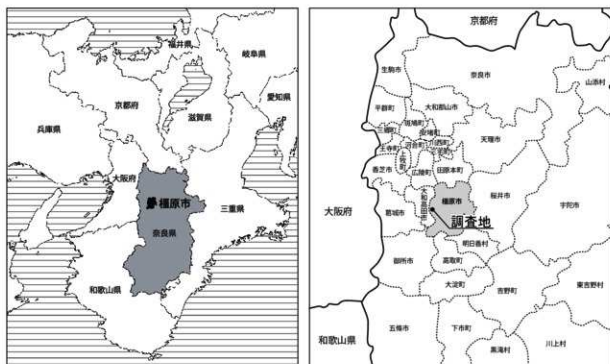


図1 調査地位置図

あり、今回の調査地も調査直前まで水田として利用されていた土地である。調査地周辺は近年、京奈和自動車道や大型の商業施設・工場の建設などの造成・開発工事が急速に進められており、かつての景観は今まさに大きく変化しつつある。

第2節 歴史的環境

橿原市の西部から南西部にかけての一带は、従来、遺跡の存在があまり確認されていない地域であった。近年、京奈和自動車道建設に伴う一連の発掘調査により、路線沿いに新たな遺跡が多数発見されており、さらに周辺への遺跡の広がりが想定される調査成果も挙げられている。得られた成果は主に縄文時代以降の各時代にわたり、奈良盆地南西の低地部における遺跡の様相が大幅に更新された。調査地周辺は近年の開発行為によって遺跡地図が次々と書き換えられつつある地域と言える。

新堂遺跡の周囲に目を向けると、北に曲川遺跡、南に東坊城遺跡が所在する(図2)。これらの遺跡は、曾我川と葛城川に挟まれた平地に立地し、南北約2.0km・東西約0.8kmの範囲で南北方向に並ぶ。特に今回の調査地は新堂遺跡と曲川遺跡の範囲が接する地点に位置し、両者の関係性も注目される。以下に、これらの遺跡の調査成果を軸に調査地近辺における各時代の様相に触れる。

調査地周辺において遺構・遺物の存在が明確になり始める時期は、縄文時代後期以降である。曲川遺跡では晩期中葉から末葉にかけての土器陪葬が約80基検出されている。これは西日本有数の規模である。その他に貯蔵穴や住居跡などの遺構も検出されている。新堂遺跡では遺構の数こそ限られるものの、土器陪葬や貯蔵穴、流路に伴う水場遺構などがあり、後期から晩期にかけての遺物も複数の地点で出土している。一方、東坊城遺跡では縄文時代後期後半から晩期の遺物が出土する河川や、晩期の土坑が検出されている。遺物については後期前半に遡る土器も含まれる。京奈和自動車道路線に沿ってさらに南に目を向けると、川西根成柿遺跡や観音寺本馬遺跡では後期以降の遺構が検出されている。観音寺本馬遺跡では人工的に管理されたと想定される晩期のクリ林も検出されている。また、この周辺の遺跡からは前期および中期に遡る遺物も出土している。

弥生時代には曾我川流域および葛城川流域においては、多くの遺跡の存在が知られている。京奈和自動車道沿いでも前期の大規模水田や環濠集落、中期の方形周溝墓群などが検出されている。その中においては、新堂遺跡の一带は比較的弥生時代の遺構・遺物が疎な地域であると言える。ただし、竪穴建物や土坑などの弥生時代の遺構は少量ながら存在するため、完全な空白というわけではなく、遺物も散発的に出土する。また、曲川遺跡の北部や橿原市北西部に位置する土橋遺跡においては、中期や終末期の周溝墓群も検出されている。

弥生時代末頃から古墳時代初頭になると、新堂遺跡および曲川遺跡の周辺では遺構・遺物が増加する。新堂遺跡では、この時期の水田や竪穴建物、土坑、溝などが検出されており、遺構からの出土遺物量も多くなる。河川及びそれに繋がる溝(水路)に設置された井堰も存在し、積極的な土地開発に乗り出していることが窺える。遺構は地点こそ限定的であるが、古墳時代前期を通じて分布する。

曲川遺跡では古墳時代前期後半から中期後半にかけての時期に曲川古墳群が形成される(2001年度、橿原市教育委員会調査。現イオンモール橿原本体第1期工事に伴う調査)。曲川古墳群は墳丘が削平されたいわゆる埋没古墳で、一辺10～18mの方墳が合計18基検出されている。造墓活動の盛

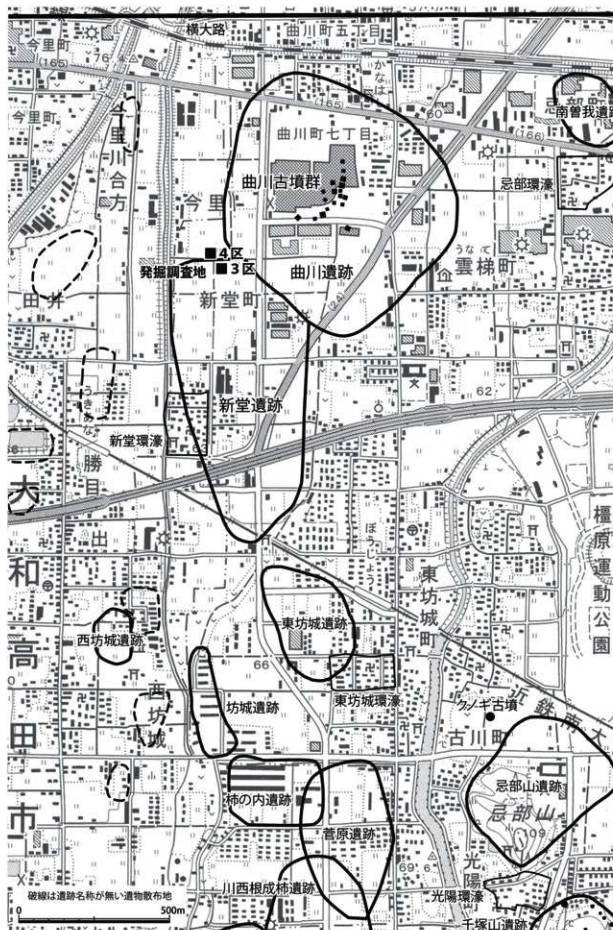


図2 調査地周辺遺跡地図 (S = 1/12,500. 遺跡範囲は 2022 年度当初の内容)

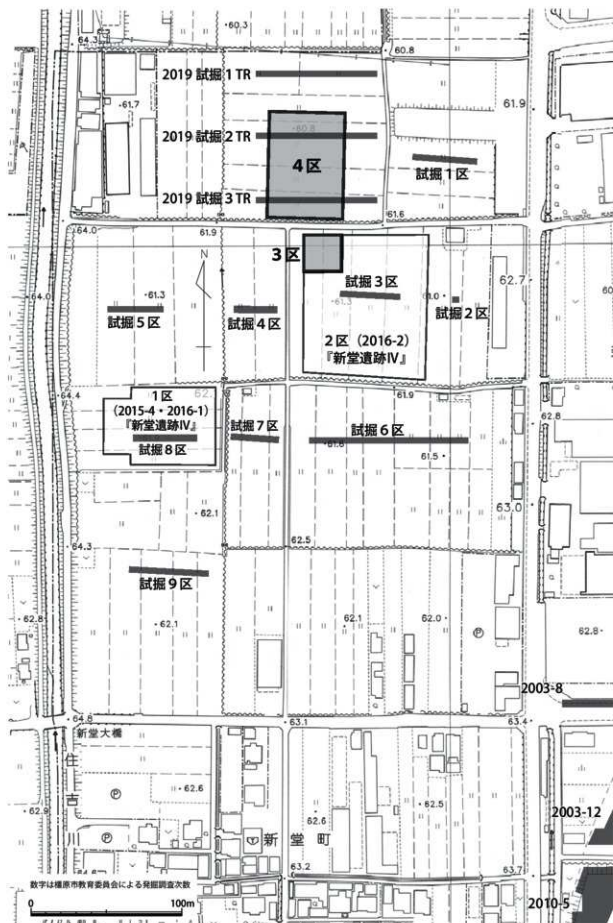


図3 調査地周辺の地形と発掘調査地点 (S = 1/2,500)

期は中期前半～中頃にあると考えられる。曲川古墳群は今回の調査地から北東約400mの位置と非常に近接しており、かつ出土遺構・遺物の時期も重なることから、両者には密接な関係が想定される。

古墳時代中期は、この地域における活動が非常に活発になる時期である。東坊城遺跡では平成3(1991)年度に実施した店舗建設に伴う発掘調査において中期の大溝から土師器、初期須恵器、韓式系土器に加え、鉄滓・籾羽口・砥石といった生産関連遺物や鑄造鉄斧が出土し、この地域が注目される嚆矢となった。その後の開発に伴う一連の調査によって新堂遺跡と曲川遺跡からも陶質土器・韓式系土器を含む多量の土器や金属器生産関連遺物、祭祀具などが多数出土し、渡来系遺物を多く含む中期の集落遺跡が、この一帯に展開していることが明らかとなっている。中期の遺構は土坑や河川が主であり、居住域を示すような明確な建物跡の存在は確認されていない。その一方で遺構からの遺物出土量は非常に多く、近隣に集落の居住域が存在する可能性は高いと考えられる。橿原市中央部の四条遺跡周辺や、飛鳥地域の遺跡などととも、古墳時代の奈良盆地南部の集落における外来要素の受容過程を知ることで重要な地域と言える。新堂遺跡の近年の調査成果を見ると、遺跡南東部での調査(『新堂遺跡』『新堂遺跡Ⅱ』)において古墳時代の河道および河岸沿いの土坑などから中期後半～後期前半を中心とする多量の遺物が出土している。さらに、今回の調査地点に隣接する2区の調査(『新堂遺跡Ⅳ』)では、河道から中期初頭に遡る多量の遺物が出土している。これらの遺物の中には多量の初期須恵器や韓式系土器、馬歯などの特徴的な遺物も多く含まれ、注目されている。河道内には制水目的と考えられる大規模なしがらみ遺構も構築されている。

曾我川の下流域に目を向けると、古墳時代中期後半から後期前半にかけての大規模な玉作り工房遺跡である曾我遺跡の存在が注目される。曾我川の上流、調査地から南南東に約2kmの距離に位置する新沢千塚古墳群も、この時期に造墓活動の最盛期を迎える。より広大な視点に立っても遺跡の形成が非常に活発な時期と言える。

古墳時代後期後半頃から古代にかけての時期には、新堂遺跡周辺では遺構の存在が希薄になる。その後、再び遺構が多く確認されるようになるのは平安時代末、12世紀頃である。

新堂遺跡および曲川遺跡では京奈和自動車道建設による複数の発掘調査で12～13世紀の遺構が検出されている。遺構から出土する遺物の量も多い時期である。新堂遺跡では南東部に遺構・遺物が多く、区画溝を伴う屋敷地や井戸、土坑といった遺構の存在や耕作地としての利用状況が明らかにされている。出土遺物としては多量の瓦器や土師器の他、輸入磁器の存在などが知られている。新堂遺跡の南端では13世紀頃に埋没したと考えられる河道(橿教委2006-2次調査『新堂遺跡Ⅲ』)が検出されている。検出地点周辺での川幅は最大で約60mに及び、屋敷地や耕作地としての利用も、この河道との関係の中での変遷が窺える。この河道跡は条里地割の乱れ、また自然堤防として現地形でも広範囲で確認することができる。また、新堂遺跡北東部および曲川遺跡においても河道沿いで12世紀代と考えられる建物群や井戸、土坑などの遺構が検出されている。中には井戸出土の鬼面墨書土器といった特徴的な遺物も出土している(橿教委2010-3次調査)。

14世紀以降の時期は、曲川遺跡において室町時代の建物跡がわずかに検出されている程度で、他は耕作地としての利用が主となっていったようである。

なお、『大和国条里復原図』によると調査区3区は葛下郡路西二十六条二里・字五反田、同4区は葛下郡路西二十六条二里・字西曾我坪にあたる。

第三章 調査の成果

第1節 調査の方法

調査区の位置と形状

調査区は2ヶ所に設定している。調査区の名称は、同一事業に基づいて先に調査を実施した1区・2区（『新堂遺跡Ⅳ』）を引き継ぐ形で3区・4区としている（図3）。

3区は平面形が正方形で、規模は東西長25m・南北長25m・面積625㎡である。2区の北西隣に位置し、2区と3区を併せると平面形が方形となる。

4区は平面形が南北方向にやや長い方形で、規模は東西長50m・南北長70m・面積3,500㎡である。3区の北側に位置し、3区東辺と4区東辺は概ね南北に揃う。調査時には3区と4区の間幅約4mの東西道路が通っている。

調査地一帯は、調査開始時点まで長らく水田として利用されてきた土地である。3区は南北方向に長い水田2枚分の北端部、4区は東西方向に長い水田4枚分にまたがる形である。

調査の手順

調査地一帯の現況水田地は全体に水はけが悪く、特に4区は周辺の雨水が集まって流入してくるような状況であったため、作業環境を整えるために調査前に調査区の周囲も含む形で重機によって耕土表面を厚さ10cm程度除去している。また、調査区外の周囲にも浅い排水溝を巡らせている。

上層遺構面直上まで重機（バックホウ）による掘削を行い、以降の掘削・記録作業は基本的に人力で行っている。これら調査で除去した排土は、3区は調査区の南～東隣に、4区は調査区の北～東隣に、それぞれ仮置きした。いずれも同一の事業地内である。

調査区内には近現代の農業用暗渠をはじめとする遺構面に達する攪乱が部分的に存在しており、判別できる範囲において当初の重機掘削時に除去を行っている。また、4区の範囲内には南・北2ヶ所に令和元（2019）年実施の試掘調査トレンチを含んでおり、その埋め戻し土も重機で除去している。試掘調査時の掘削底は、発掘調査時の遺構検出面よりも最大で約0.15m深くなっている。調査区の各壁面沿いには、人力で排水溝を掘削している。

3区と4区は概ね作業段階を揃えつつ、同時並行で調査を進めている。

遺構名

それぞれの遺構名は遺構番号（4桁からなる数字）＋遺構記号（その種別を示す2字のアルファベット）。内容は文化庁発行の『発掘調査の手引き』に従う）の形で記録・報告している。遺構番号は、3区の遺構は頭に3を、4区の遺構は4を付けており、それぞれ3001・4001から順に番号を付与している。遺構番号は遺構種を問わずし番号としており、今回の調査において番号の重複は無い形を採っている。調査作業の都合上、遺構番号は主として各遺構を認識した順に付与している。遺構の検出時において古墳時代以前の遺構である可能性が高いと考えられる遺構については、3区では3101以降、4区では4301以降の番号を付与している。

遺構名は基本的に調査時のものをそのまま使用して報告を行っている。

写真撮影

調査写真の撮影は各遺構面の検出・完掘状況の他、調査区及び遺構の土層断面や遺物の出土状況など、調査の過程で記録が必要な段階で行っている。

近年の写真に係る情勢の変化を受け、橿原市教育員会でも平成28(2016)年度以降、発掘調査現場で撮影する写真について従来のフィルムを使用する方式から、デジタルカメラを使用する方式に転換している。撮影用デジタルカメラはNikon D810とPENTAX 645Zを併用している。

航空写真撮影(空撮)および同測量は、安西工業株式会社と株式会社アコードが実施している。

続いて第2～4節で3区、第5～7節で4区の調査成果についてまとめる。各調査区・遺構・遺物についての取り扱い方針や具体的な調査方法はそれぞれの項目で触れる。

第2節 3区 基本層序と遺構面

3区の基本層序は以下のとおりであり、様相は調査区全体で共通する。各基本層序の上面レベルは概ね水平であるが、遺構面にあたるⅢ層上面についてはわずかに北側が低い傾向にある。遺構面の標高は60.2～60.4mである。東隣に位置する2区の基本層序と概ね対応しているが、遺構ベース層であるⅢ層は、2区では少量ながら縄文時代後期～弥生時代の遺物が含まれていたが3区では出土しておらず、この点が最も大きな差異である。ただし2区については調査面積が広いいため基本層序も3区と比べて地点による差異が大きい。

図4～6に3区の調査区北・西・南壁面の土層断面図を記している。東壁については遺構面下のほぼ全体が古墳時代河道(3101・3105SD)の縦断面であり、また調査区保護のために図化をしていない。なお、基本層序は『令和2年度 橿原市文化財調査年報』での概要報告時から変更を行っているので注意されたい。

3区 基本層序 (図4～6)

I層:水田耕作土(現代。上面高は標高約61.2m。厚さ約0.4m)

II層:浅黄色～灰黄色粘質土・にぶい黄橙色粘質土・砂質土(中世以降の耕作層。上面高は標高約60.8m。厚さ約0.4～0.6m)

III層:褐色灰色土・粘質土(上面が遺構面。上面高は標高約60.2～60.4m。厚さ約0.3～0.4m)

IV層:灰黄褐色粘質土・褐色粘土(地山。上面高は標高約59.8～59.9m。厚さ約0.4m以上)

I層(図4～6の1～3層)は上面が現代の水田面である。上面高は標高約61.2mである。厚さは約0.4mである。いわゆる床土や近現代の暗渠等もここに含めている。

II層(図4～6の4～24層)は中世以降の耕作層である。上層遺構の耕作溝の埋土もここに含まれる。

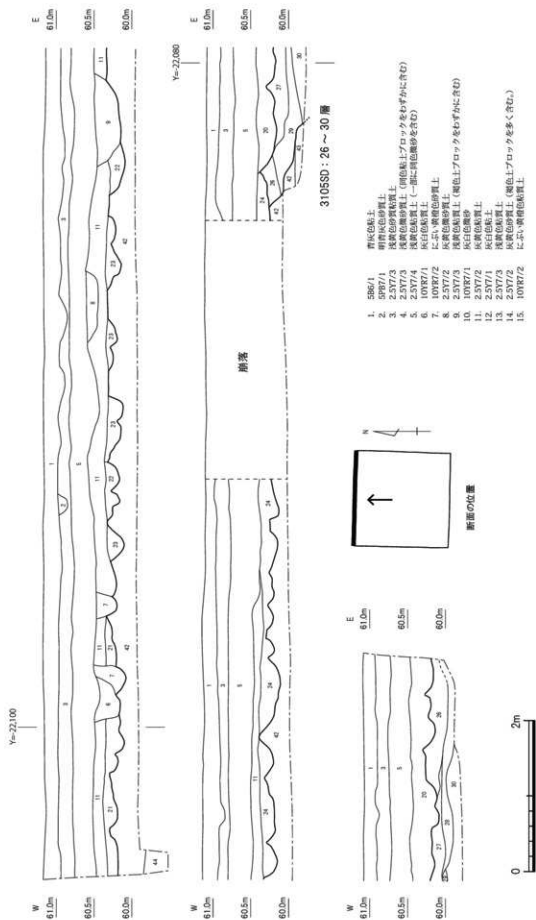


図4 3区 調査区北端土層断面図 (S = 1/50)

基本層序I層: 1~3層、基本層序II層: 4~24層、3105SD: 25層、3105SD: 26~30層、3103SD: 31~34層、古墳中層以前の氈蓋層: 35・36層、3106SX: 37~39層、基本層序III層: 40~42層、基本層序IV層: 43・44層

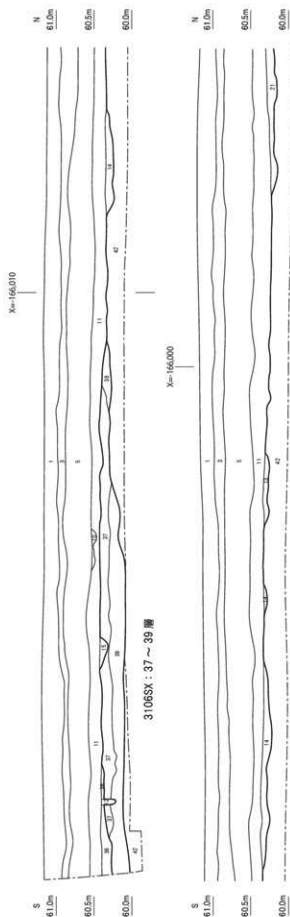
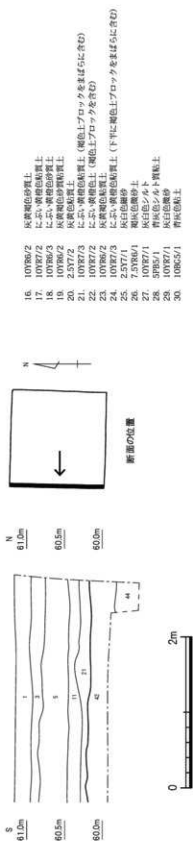


図5 3区 調査区西壁土層断面図 (S = 1/50)



基本層序I層：1～3層、基本層序II層：4～24層、3105SD：25層、3105SD：26～30層、3103SD：31～34層、古墳中期以前の氈蓋層：35・36層、
 3106SX：37～39層、基本層序III層：40～42層、基本層序IV層：43～44層

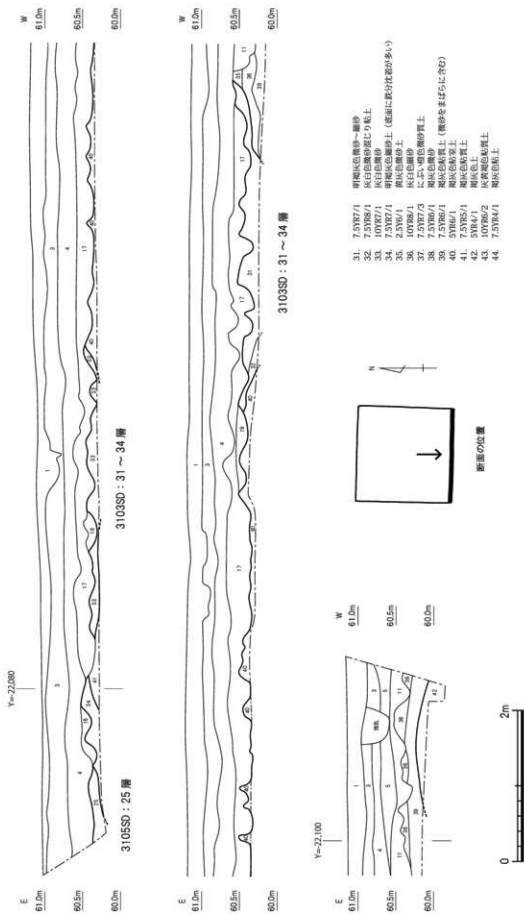


図6 3区 調査区南壁土層断面図 (S = 1/50)

基本層序I層 : 1~3層、基本層序II層 : 4~24層、3105SD : 25層、3105SD : 26~30層、3103SD : 31~34層、古墳中期以前の乱基層 : 35~36層、
3106SX : 37~39層、基本層序III層 : 40~42層、基本層序IV層 : 43~44層

Ⅱ層、主にその下半からは中世の瓦器や土師器が少量ながら出土している。ただし全体の遺物量としては中世の遺物より、下層に由来する古墳時代遺物のほうが多い。

Ⅲ層(図4～6の40～42層)は上面が上層遺構(中世)および下層遺構(古墳時代)の遺構面である。褐灰色土の全体に比較的安定した地盤である。2区の調査では一部の地点でⅢ層中から弥生時代以前の遺物が出土しているが、今回の調査では遺物は全く出土していない。

Ⅳ層(図4～6の43・44層)は縄文時代以前に堆積したと考えられる地山層である。灰黄褐色粘質土・褐灰色粘土からなる安定した地盤である。2区の調査における地山層は安定した地盤と河川堆積層とが地点によって分かれており、3区はその後者と同様の状況である。

第3節 3区 遺構

遺構は大きく2時期に分けられ、平安時代後期～鎌倉時代の遺構と古墳時代の遺構が存在する。調査時には便宜上、前者を上層遺構、後者を下層遺構として括って調査・記録の作業を行っている。これらの遺構の検出面はⅢ層上面である。古墳時代の遺構のうち時期が分かるものは中期が大部分を占める。

平安時代後期～鎌倉時代の遺構は東隣に位置する2区の上層遺構、古墳時代の遺構は2区の中層遺構に対応する遺構群である。

以下に各時代の遺構について上層から順に述べる。

平安時代後期～鎌倉時代の遺構(図7・8)

この時期の遺構には、耕作溝群がある。

耕作溝群は、耕作活動の累積によって形成されたと考えられる遺構群で、いわゆる素掘り溝の集まりである。出土遺物から、耕作溝群の形成時期は12世紀以降であると考えられる。それぞれの溝の規模は、幅約0.2～0.3m、深さ最大約0.25mである。南北方向の耕作溝が調査区全体に密に存在している(図8)。東西方向の耕作溝も調査区壁面でごく少量確認できるが、深さ約0.05m未満と非常に浅い。これらの状況は2区と同様である。確認できる範囲内においては東西溝のほうが新しい。

基本層序Ⅱ層中には部分的に薄い微砂層が堆積する状況が確認でき、調査地一帯が近隣河川の氾濫を受けた後に再度耕地化された様子を確認できる。耕作溝の中には、この再耕地化後に掘られた溝も含まれる。

耕作溝からは12～13世紀の瓦器と土師器が出土しているが量は限られ、量的には下層に位置する遺構に由来する古墳時代中期の土器が多くを占める。

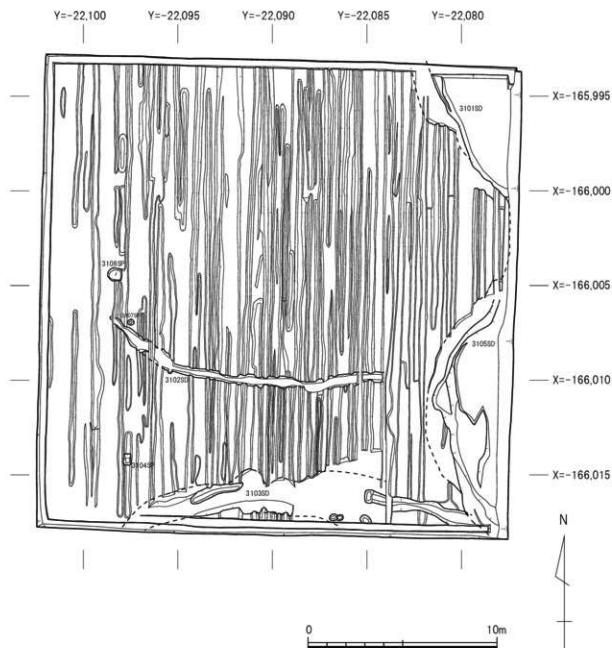


図7 3区 発掘平面図 (S = 1/200)

古墳時代の遺構 (図7・9・10)

古墳時代の遺構には、河道、溝、落ち込み、ピットがある。時期が明確な遺構は、いずれも古墳時代中期である。

調査区東縁に沿いに位置する3101SDおよび3105SDは河道である。2区で確認している大規模な河道20989SDと同一の河道であり、その西岸部分にあたる(両者の位置関係は図50)。河道の西岸部分は今回の調査区内で大きく蛇行しており、調査区東辺中央部付近では調査区外(東側)に位置する。便宜上、ここを境に北側を3101SD、南側を3105SDに分けている。河道は北流しており、北にある3101SDが下流側となる。3101SDと3105SDは調査区内ではどちらも河道の西岸斜面部分にあたり、河道の底面には達していない。深さは、3101SDが最大0.7m、3105SDが最大1.3mである。なお、20989SDの深さは最大で2.5mである。河の流れの攻撃面に当たる3105SD北半部は溝状の

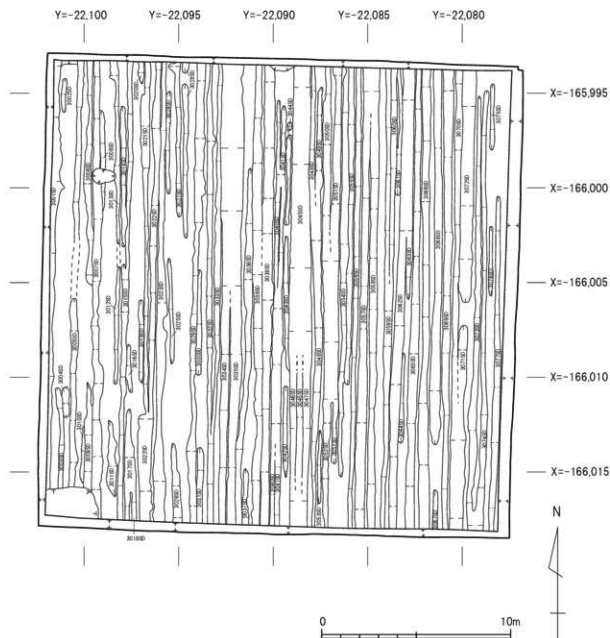


図8 3区 上層遺構平面図 (S=1/200)

遺構斜面が大きく抉れている。

3101SDおよび3105SDからは中期初頭～中期後半の土器が多数出土しており、3区の調査で出土した遺物の大多数を占める。20989SDの調査では古墳時代中期初頭および中期後半にそれぞれ土砂の堆積が進み、中期のうちにほぼ全体が埋没したことが明らかとなっている。3101SDおよび3105SDの埋土上層からも中期後半の土器が出土しており、今回の調査地点である河道西岸部も中期後半に埋没したことが確認できる。埋土下層からは中期前半の遺物が多く出土している。調査区南東部の一帯には3105SDからの氾濫層と考えられる厚さ数cm未満の微砂～砂質土層が広がっている。この堆積時期は河道埋没よりも古い、中期のいずれかの時期であると考えられる。

3102SDは調査区中央やや南に位置する溝である。検出長約15.2m、幅約0.4～0.8m、深さ約0.1～0.2mである。東西方向に伸び、西側は北側へと湾曲する。溝の東端部は耕作溝群によって削平さ

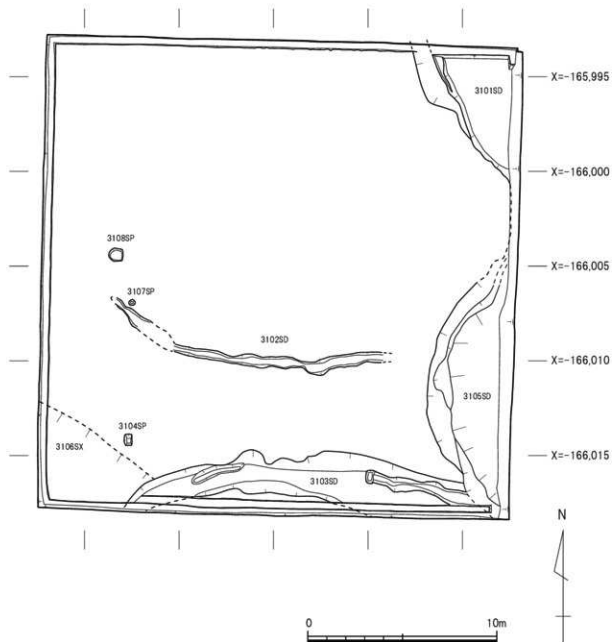


図9 3区 下層遺構平面図 (S=1/200)

れており、3105SDに接続していたかどうかは不明である。出土遺物は、ごく少量の中期の土師器と砥石の可能性が考えられる石材1点がある。

3103SDは調査区南辺沿いに位置する溝である。平面形は東西方向に長く緩やかに弧状を描く溝である。検出東西長19.5m、幅約1.5～3.5m、深さ最大約0.3mである。東端は3105SDに接続する。断面形は台形を基本とするが不整形で、底面の一部が溝状にさらに約0.05mほど深くなる地点も存在する。溝の底面の高さは東側(河道側)の方が低い。溝の西端は調査区外(南)へと続いており、2区の20987SDに繋がると考えられる。その場合、溝全体の平面形は「C」字形になる。出土遺物には、土師器と須恵器の他、燃えさし1点がある。出土量は河道3101SD・3105SDに次いで多い。遺物の時期はいずれも中期後半で、河道と異なり中期前半に遡る遺物は含まれない。河道の埋没時期に近い遺構であるが、3103SDのほうが3105SDの最終堆積よりも先に埋没していることが調査区壁面で確認できる。

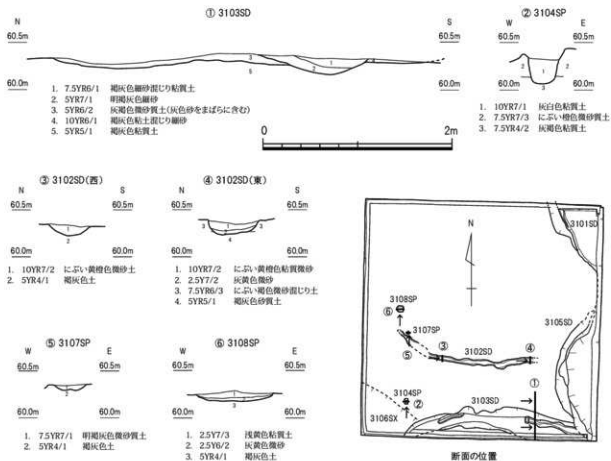


図10 3区 遺構断面図 (S = 1/40)

3104SP、3107SP、3108SPは調査区西半に位置する小規模なピットである。3104SPは平面形が一边0.3~0.5mの長方形で、深さは0.4mを残す。3107SPは平面形が直径0.4mの円形で、深さは0.05mを残す。3108SPは平面形が直径0.9~1.0mの円形で、深さは0.1mを残す。いずれも耕作溝よりも古い時代の遺構であるが、3104SPに土師器の細片が含まれる以外は出土遺物が無く詳細時期は不明である。埋土の共通性から古墳時代遺構としている。

3106SXは調査区南西隅に位置する落ち込みである。深さ最大約0.3mで、南西に向かって緩やかに低くなる。遺構の時期は3103SDよりも古く、出土した土師器の細片がから古墳時代前期~中期前半以前のいずれかの時期であると考えられる。埋土は他の古墳時代遺構とは異なっており、遺構ベース層であるⅢ層に近い土質である。

第4節 3区 出土遺物

3区の調査で出土した遺物には、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器・製塩土器・土製品・瓦器・陶磁器・鉄滓・石器・石製品・木材・動物骨がある。出土遺物の量は遺物コンテナ約20箱である。

古墳時代、とくに中期の遺物が量・種類ともに豊富である。古墳時代中期の河道や溝からは縄文時代～古墳時代前期の遺物も少量ながら出土している。平安時代後期以降の耕作溝群およびそれ以降の堆積層からは、中世以降の土器が出土している量は限られる。

今回報告を行う遺物は、概ね個々の遺物の全体像の分かる遺物および出土遺構・層序の時期や性格をよく表わすと考えられる遺物である。以下に、遺構ごとに出土遺物について報告する。報告する遺構の順は、第3節の順に倣う。

平安時代後期～鎌倉時代の遺構（図11）

耕作溝群（図11）

図8に示した耕作溝群から出土した主要な遺物を図11に示している。

耕作溝群からの出土遺物には瓦器、土師器、須恵器、弥生土器がある。耕作溝群の形成期と考えられる12～13世紀の土器の他、下層遺構に由来する古墳時代以前の遺物が存在する。後者の遺物は古墳時代河道が存在する調査区東側に比較的多い傾向にあるが、その他の地点からも出土している。

1は瓦器碗である。大和型の瓦器碗である。復元口径12.0cmを測る。口縁部外面にわずかにミガキ痕が残る。瓦器はこの他にも少数出土しているが、いずれも細片で全体像が復元できるものは無い。

2は土師器高環の坏部である。復元口径12.1cm、器高4.7cmを測る。上半部がわずかに外に開く形状である。口縁端部を摘み上げて内面には面を作り出す。

3は土師器甕である。口径13.8cmを測る。表面は磨滅が激しいが、口縁部と体部外面に強い横方向のナデ調整を施している。

4は須恵器坏身である。復元口径12.0cm、残存高5.2cmを測る。口縁端部には鈍い凹線が巡る。体部外面の回転ヘラケズリは弱い。

5は須恵器無蓋高環である。同一個体と考えられる坏部と脚部の破片が近接した地点で出土しており、併せて図化している。坏部は内外面ともナデ調整で仕上げ、外面下半にヘラケズリ痕が残る。脚

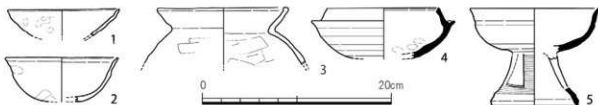


図11 3区 耕作溝群出土遺物（S=1/4）

部には台形の透かしを三方向に穿つと考えられる。

古墳時代の遺構 (図 12~14)

古墳時代の遺構には河道、溝、落ち込み、ピットがある。出土遺物の大多数は河道 3101SD および 3105SD から出土している。3101SD と 3105SD は同一の河道で、前者がその下流側にあたる。河道以外の遺構からの出土遺物は非常に少ないが、その中では 3103SD からの出土遺物が相対的に多い。他の遺構からは図化が難しい細片が出土しているのみである。

3101SD (図 12)

3101SD からは土師器、須恵器、韓式系土器、製塩土器、鉄滓、種子、馬歯、木材、燃えさし、石器が出土している。時期は古墳時代中期が主で、中期初頭から中期末にかけての各段階の土器がある。

6 は土師器高環の坏部である。挿入式の脚部は抜け落ちて欠失している。口縁部径 13.6 cm、坏部高 5.0 cm を測る。坏部と脚部の接合部に粘土を薄く貼り足していることが断面で確認できる。坏部外面には底部から放射状にハケ調整を密に施す。外面に淡い黒斑がある。

7 は土師器壺の体部である。底部は平底で中央部が窪む。器壁の厚さ 0.6~1.0 cm と全体に厚手で重量感がある。外面には器壁の剥落部分が複数ある。

8 は土師器直口壺である。口縁部はわずかに外反する。体部は丸底で肩部が張り出す形状である。外面および口縁部内面上半に横方向のミガキを施す。体部内面下半には工具の静止痕が存在する。

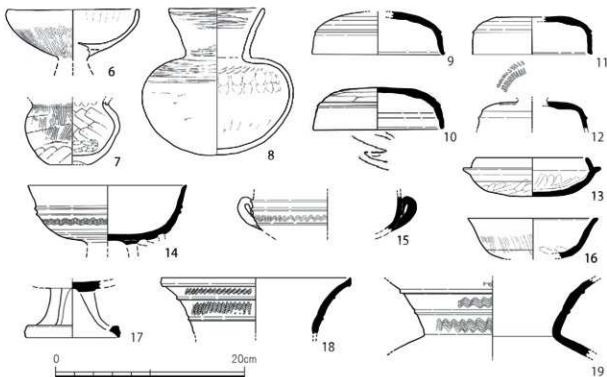


図 12 3区 3101SD 出土遺物 (S = 1/4)

9～11は須恵器蓋である。9は口径13.7cm、器高4.4cmを測る。外面肩部の稜は明瞭である。胎土は炭化粒を多く含む。10は口径13.9cm、器高4.6cmを測る。頂部が平坦な形状である。頂部は回転ヘラケズリの後に、面取り状にケズリを施す。内面には細いヘラ記号が存在する。11は復元口径12.6cm、器高4.0cmを測る。頂部が平坦な形状である。外面には降着灰が付着する。

12は須恵器有蓋高環の蓋である。頂部にはつまみの痕跡がある。外面に櫛状工具先端の刺突文を二条、綾杉状に巡らせる。

13は須恵器蓋環の身である。口径12.0cm、器高4.0cmを測る。底部外面は静止ケズリを乱雑に施す。底部内面は強めのナデ調整を底部中央から掻き上げるように施す。

14は須恵器無蓋高環の環部である。口径16.7cmを測る。外面下半に波状文を施す。方形もしくは台形の透かしを四方向に穿つ。環部の底面に近い位置に把手が抜け落ちた痕跡が一ヶ所存在する。環部内面には自然釉が全体に付着する。

15は須恵器高環の環部もしくはカップ形環である。外面に施された波状文の上から把手を貼り付けている。小片であり、確認できる把手の数は一ヶ所である。内外面とも自然釉が付着している。

16は須恵器無蓋高環の環部である。外面下半は縦方向のハケ調整の後、ナデ調整で仕上げている。底面には、脚部との接合のために付けたと考えられる刻み目が存在する。

17は須恵器高環の脚部である。方形の透かしを三方向に穿つ。内外面とも回転ナデ調整で仕上げる。環部底面には自然釉と降着物が厚く付着する。

18・19は須恵器壺の口縁部である。18は大きく外反する形状である。外面には上下二段に波状文を緻密に施す。19は外面に三段の波状文を施す。内面は全体を丁寧なナデ調整で仕上げる。

3105SD (図13)

3105SDからは土師器、須恵器、韓式系土器、製塩土器、種子、動物骨が出土している。3101SDの河道上流部にあたり、出土遺物の様相は3101SDと同様である。

20は土師器高環の環部である。大型高環である。復元口径20.6cm、底部径12.2cmを測る。底部中央には接合時に脚部中央に挿入される突起が残る。ナデ調整で丁寧に仕上げるが外面底部には大きめの指頭圧痕が多く残る。

21は土師器高環の脚部である。上端部は環部から剥落し、中央部が窪んでいる。内外面ともナデ調整で仕上げるが、内面には絞り痕がわずかに残る。

22は土師器甕である。口径22.1cmを測る。長胴気味の甕であると考えられる。外面肩部以下の範囲に薄く煤が付着する。外面と内面口縁部に間隔が広いハケ調整を施す。

23は土師器甕の体部である。器壁0.2cm程度の部分が多く全体に薄作りである。直径0.4～0.9cmを測る楕円形の孔が一ヶ所、焼成後に穿たれている。外面には黒斑がある。

24は須恵器蓋環の蓋である。復元口径13.0cm、器高3.9cmを測る。回転ヘラケズリ、ナデ調整ともに丁寧である。焼成はやや不良である。

25は須恵器蓋環の身である。口径10.7cm、器高4.6cmを測る。河岸西岸斜面直上から出土している。

26は須恵器甕である。外面体部の波状文は粗く、列点文に近い形状に仕上がっている。内面口縁部に自然釉が厚く付着する。

27は須恵器甕の口縁部である。復元口径27.6cmを測る。外面口縁部には「又」の字を横倒しにし

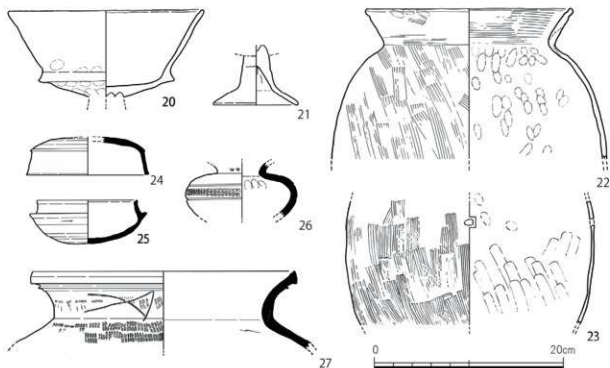


図13 3区 3105SD 出土遺物 (S = 1/4)

た形状のヘラ記号が刻まれている。口縁端部直下には上下二段の稜を作り出しており、上段は鋭く下段は鈍い。

3103SD (図14)

3103SDからは土師器、須恵器、製塩土器、燃えさが出土している。出土遺物の時期は古墳時代中期後半である。

28は須恵器蓋環の身である。復元口径14.1cm、器高4.8cmを測る。ヘラケズリはやや粗い。

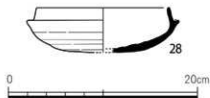


図14 3区 3103SD 出土遺物 (S = 1/4)

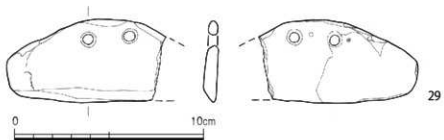


図 15 3区 表採遺物 (S=1/2)

3区 表採遺物 (図 15)

29 は 3区調査開始時に現代水田上面で採取した石包丁である。結晶片岩製である。直径 0.5 cm の孔を二ヶ所に穿つ。刃部は片刃である。

第5節 4区 基本層序と遺構面

4区の基本層序は以下のとおりである。基本層序は3区と基本的に対応する。各基本層序の上面レベルは耕作層であるⅠ層およびⅡ層については概ね水平であるが、遺構面であるⅢ層以下は周辺地形と同様に、南から北に向かって緩やかに低くなる。

図16～21に4区の調査区各壁面の土層断面図を記している。ただし調査区北壁東半部をはじめとして調査中の長雨の影響などにより、調査区壁面が崩落して断面記録が欠落している地点が複数存在する。なお、基本層序は遺物整理作業の進行に伴う時期認識の変更により『令和2年度 榎原市文化財調査年報』での概要報告時から変更を行っている。

4区 基本層序（図16～21）

Ⅰ層：水田耕作土（現代。上面高は標高約60.7～60.8m）

Ⅱ層：灰黄色～灰黄色粘質土・砂質土、にぶい黄橙色粘質土（鎌倉時代以降の耕作層。上面高は標高約60.3～60.6m。厚さ約0.2～0.5m）

Ⅲ層：灰褐色土・褐灰色土・粘質土、褐灰色砂質土・細砂、橙色粘質土、青灰色粘土（上面が遺構ベース面。上面高は標高約59.8～60.4m。厚さ約0.2～0.4m）

Ⅳ層：褐灰色土、褐灰色細砂、青灰色粘土、灰色～暗灰色粘土（地山。上面高は標高約59.7～60.1m。厚さ約1.8m以上）

Ⅰ層（図16～21の1～3層）は上面が現代の水田面である。上面高は標高約60.7～60.8mである。いわゆる床土や近現代の暗渠等もここに含めている。

Ⅱ層（図16～21の4～104層）は鎌倉時代以降の耕作層である。耕作溝群の埋土もここに含まれる。Ⅱ層からは中世の瓦器や土師器が少量ながら出土している。ただし全体の遺物量としては中世の遺物よりも下層に由来する古墳時代遺物のほうが多く、古墳時代遺構が多く存在する調査区南東部から北西部にかけての地点からの遺物出土量が多い。

Ⅲ層（図16～21の148～150、155～167、172～176、178～181層）の上面が中世および古墳時代の遺構ベース面である。Ⅲ層は大部分が遺物を含まない灰褐色～褐灰色土の安定した土層となる。その他に、調査区西辺沿いの一部地点に砂質土～砂・粘土が堆積している。これらは古墳時代前期以前の河川堆積層であると考えられるが、遺物が出土していないため、詳細な堆積時期は不明である。

Ⅳ層（図16～21の151～154、168～171、177、182層）は地山層である。南東に位置する2区の調査では遺構ベース層の下に縄文時代の河川堆積層と考えられる砂層が広範囲で検出されているが、4区では同様の河川堆積層は存在せず、青灰色～灰色粘土が広範囲に厚く堆積している状況を確認している。これらの状況は調査区壁面での検討に加えて、古墳時代河道4301SDをはじめとする遺構調査の際にも確認している。

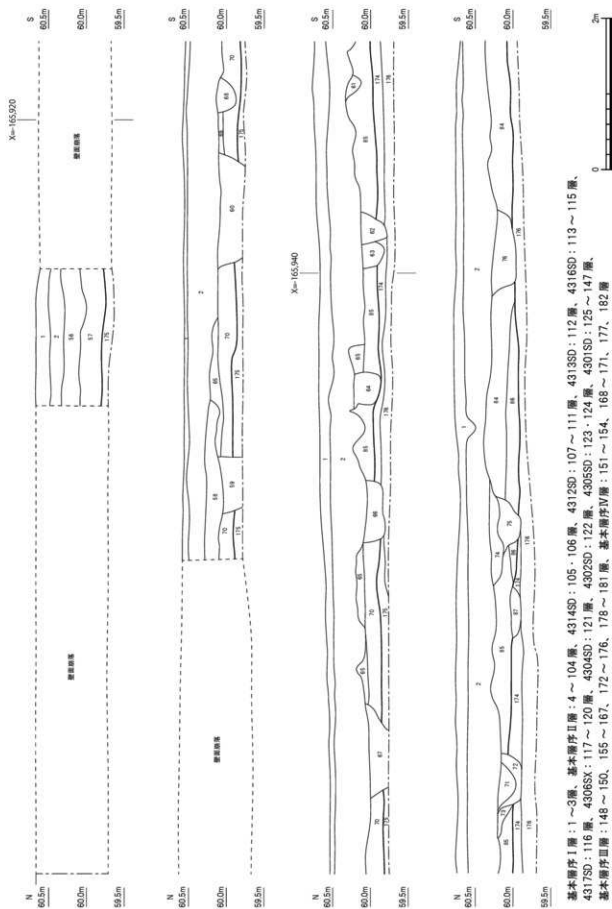


图 16 4区 调查区东壁土層断面图① (S = 1/50)

基本層序I層: 1~3層、基本層序II層: 4~104層、4314SD: 105~106層、4312SD: 107~111層、4313SD: 112層、4316SD: 113~115層、4317SD: 116層、4306SX: 117~120層、4304SD: 121層、4302SD: 122層、4305SD: 123~124層、4301SD: 125~147層、基本層序III層: 148~150、155~167、172~176、178~181層、基本層序IV層: 151~154、168~171、177、182層

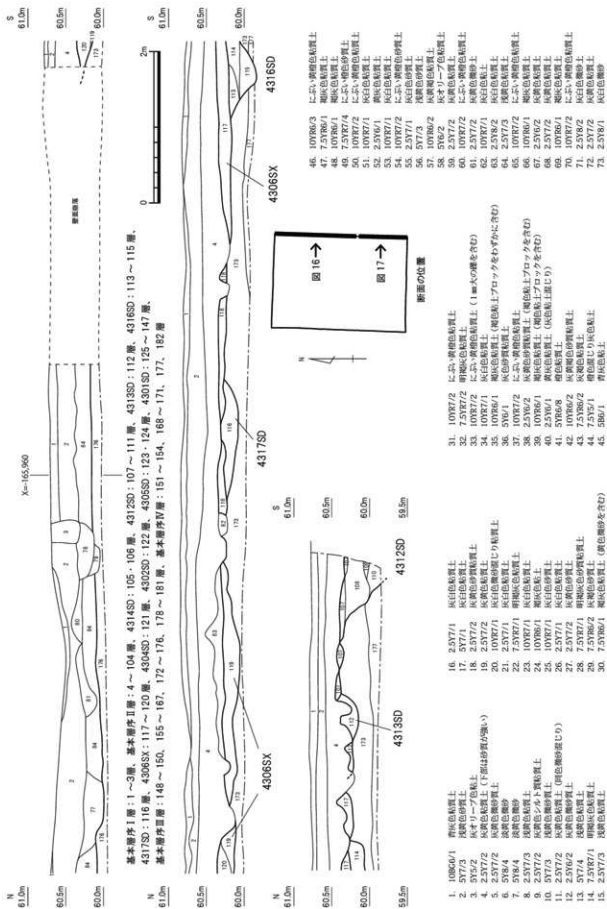


図 17 4区 調査区東壁土層断面図② (S = 1/50)

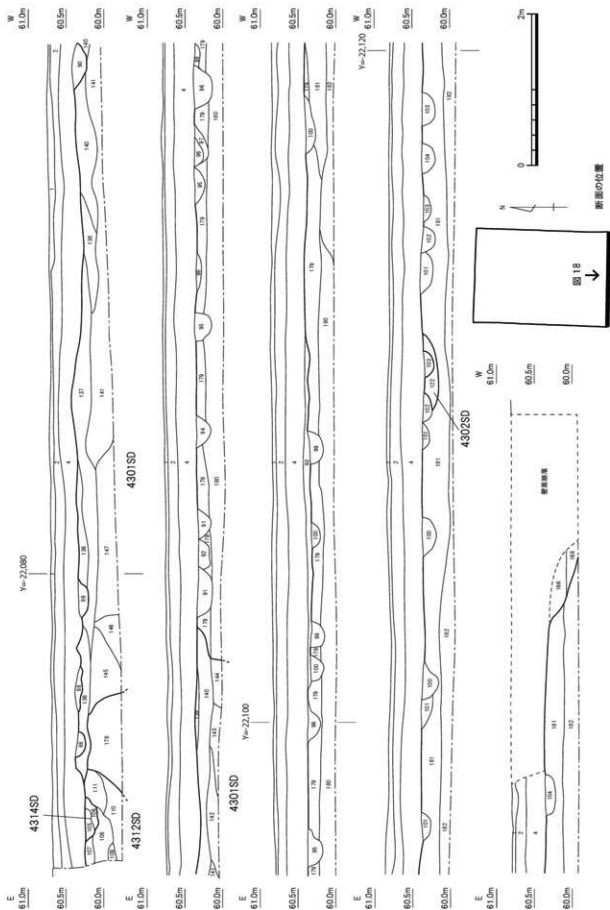


図 18 4区 調査区南壁土層断面図 (S = 1/50)

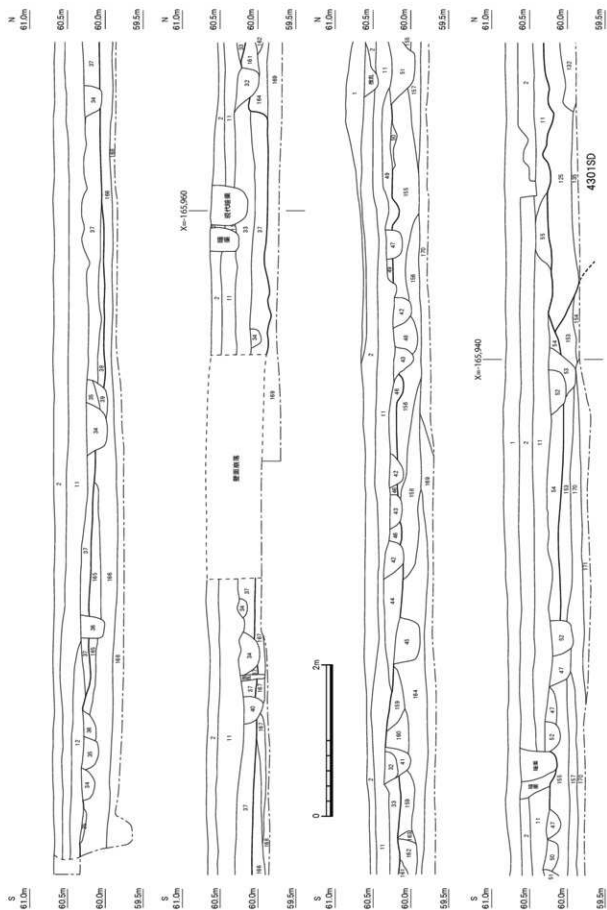


图 19 4区 调查区西墙土層断面图① (S = 1/50)

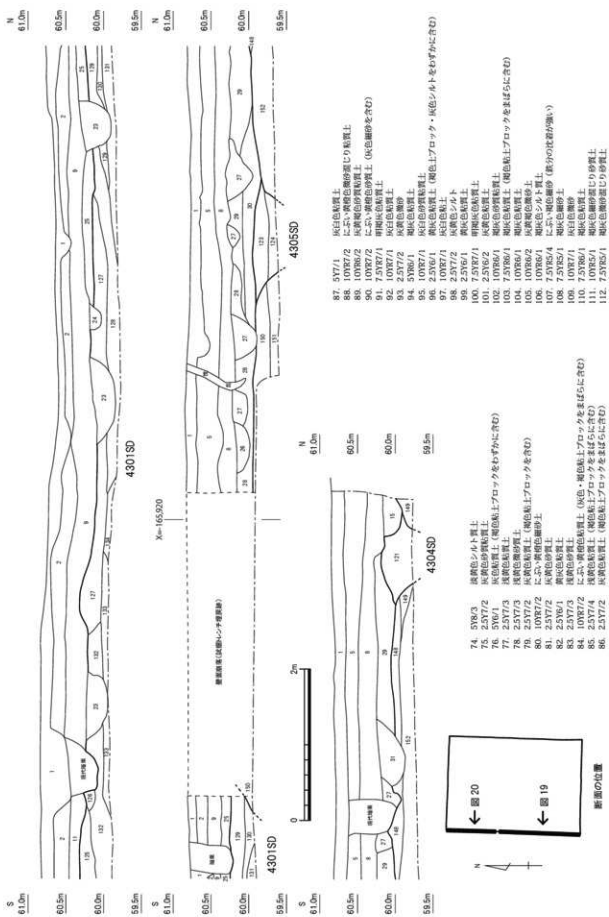
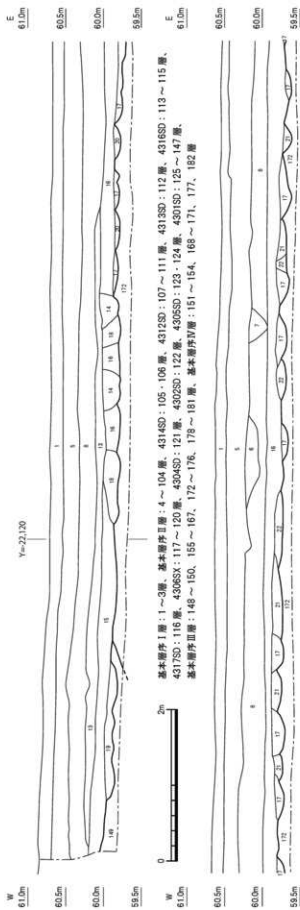
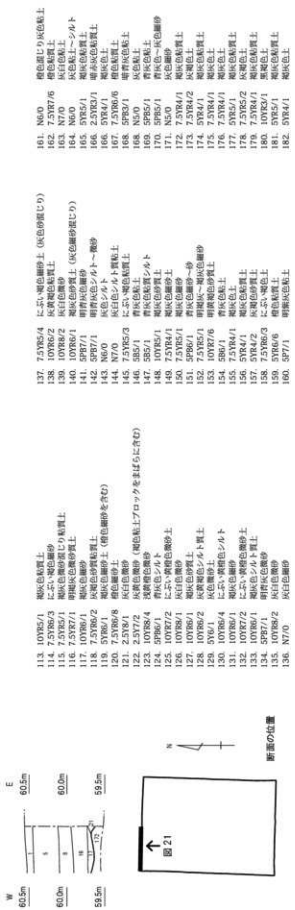


図20 4区 調査区西壁土層断面図② (S = 1/50)



基本層序I層: 1~3層, 基本層序厚層: 4~104層, 4314SD: 105~106層, 4312SD: 107~111層, 4313SD: 112層, 4316SD: 113~115層,
 4317SD: 116層, 4306SX: 117~120層, 4302SD: 121層, 4305SD: 123~124層, 4301SD: 125~147層,
 基本層序II層: 148~150, 155~167, 172~176, 178~181層, 基本層序IV層: 151~154, 168~171, 177, 182層



137. 75965/4 主に、褐色細砂土 (灰色砂質じり)
 138. 75967/6 灰黄色粘質土
 139. 10788/2 灰白色細砂
 140. 10786/1 灰黄色砂質土 (灰色細砂質じり)
 141. 5987/1 明青色シルト
 142. 5985/1 明青色シルト
 143. 86/0 灰色シルト
 144. 87/0 灰色シルト
 145. 5987/3 灰色粘質土
 146. 5987/1 灰色粘質土
 147. 355/1 灰黄色シルト
 148. 10785/1 灰黄色砂質土
 149. 75984/1 灰黄色粘質土
 150. 75985/1 灰黄色砂質土
 151. 3986/1 灰黄色砂質土
 152. 3987/1 灰黄色砂質土
 153. 10787/6 明黄色砂質土
 154. 586/1 灰黄色土
 155. 75984/1 灰黄色土
 156. 5984/1 灰黄色粘質土
 157. 5984/1 灰黄色粘質土
 158. 75986/3 主に、褐色土
 159. 75986/6 褐色粘質土
 160. 327/1 明黄色粘質土

161. 86/0 褐色じり灰色粘土
 162. 5987/5 灰黄色土
 163. 87/0 灰黄色土
 164. 86/0 灰黄色土
 165. 5985/1 明黄色粘質土
 166. 25982/1 明黄色粘質土
 167. 75986/6 褐色粘質土
 168. 5984/1 灰黄色土
 169. 86/0 灰黄色土
 170. 5985/1 灰黄色土
 171. 85/0 灰黄色土
 172. 75984/1 灰黄色粘質土
 173. 75984/2 灰黄色土
 174. 75984/1 灰黄色土
 175. 75984/1 灰黄色土
 176. 75984/1 灰黄色土
 177. 5985/1 明黄色粘質土
 178. 75985/2 灰黄色土
 180. 10782/1 灰黄色土
 181. 75986/6 褐色粘質土
 182. 5984/1 灰黄色土

図24 4区 調査区北壁土層断面図 (S = 1/50)

第6節 4区 遺構

遺構は大きく2時期に分けられ、平安時代後期～鎌倉時代の遺構と古墳時代の遺構が存在する。調査時には便宜上、前者を上層遺構、後者を下層遺構として括って調査・記録の作業を行っている。これらの遺構の検出面はⅢ層上面である。古墳時代の遺構のうち時期が分かるものは、いずれも中期である。各時期の遺構群は3区と4区とで対応関係にある。

以下に各時代の遺構について上層から順に述べる。

平安時代後期～鎌倉時代の遺構 (図22・23)

平安時代～鎌倉時代の遺構には、耕作溝群と土坑がある。

耕作溝群は、耕作活動の累積によって形成されたと考えられる遺構群で、いわゆる素掘り溝の集まりである。耕作溝は南北方向と東西方向の一群が存在し、基本的に南北方向の溝が古い(図22)。南北方向の溝は調査区全域に密に存在する。南北方向の中でも古い段階の耕作溝から12世紀の土器が出土しており、耕作溝は平安時代後期以降に掘削されたと考えられる。南北方向の耕作溝の中には調査区南端部付近で途切れる溝が多く存在する。3区と4区との間に存在する東西道路が小字境であり、中世から続くいわゆる条里地割との関連がうかがえる。東西方向の溝も調査区全域に広がって存在しているが、密度は南北方向より低い。また、他の溝よりも深い東西方向の溝が約3.6m間隔で並ぶ状況が全域で確認できる。他の一般的な耕作溝が深さ約0.3m以下であるのに対し、これらの東西溝は深さ約0.4～0.5mと深く、溝の断面形も側辺が垂直に近いU字形を呈する。同様の東西溝群は調査区1区でも確認している。耕作溝からの出土遺物には、12～13世紀の瓦器・土師器や弥生時代～古墳時代の土器・石器がある。遺物量としては中世の遺物はかなり少なく、下層の古墳時代遺構に由来する土器が多数を占める。そのため、古墳時代遺構が存在する調査区南西側からの出土量が多く、調査区北東側からの出土量が少ない傾向にある。

調査区南部には土取り穴と考えられる土坑が2基存在する。

4001SKは調査区南東部に位置する。平面形は東西方向に長い不整形で、東西長約4.3m、南北長約1.6～2.4m、深さ約0.7～1.0mである。土坑の東半部は平面形が方形に近い一方、西半部は全体に広がる形状である。これは西半部の下層に河道が存在しており地盤が軟弱であるため、本来東西に長い方形に掘削したものが崩れた結果であると考えられる。4002SKは調査区西辺沿いに位置する。平面形は東西に長い方形で、東西長約2.8～3.0m、南北長約1.9m、深さ約0.6～0.8mである。断面形はU字形を呈する。埋土の様相から、掘削後に短期間ですぐ埋め戻されたと考えられる。4001SKと4002SKはいずれも南北方向の耕作溝よりも新しく、東西方向の耕作溝よりも古い遺構であり、12～13世紀の遺構であると考えられる。出土遺物はその時期の瓦器と土師器の細片がごく少量あるのみである。これらと同様の土坑は2区の調査においても8基確認している。

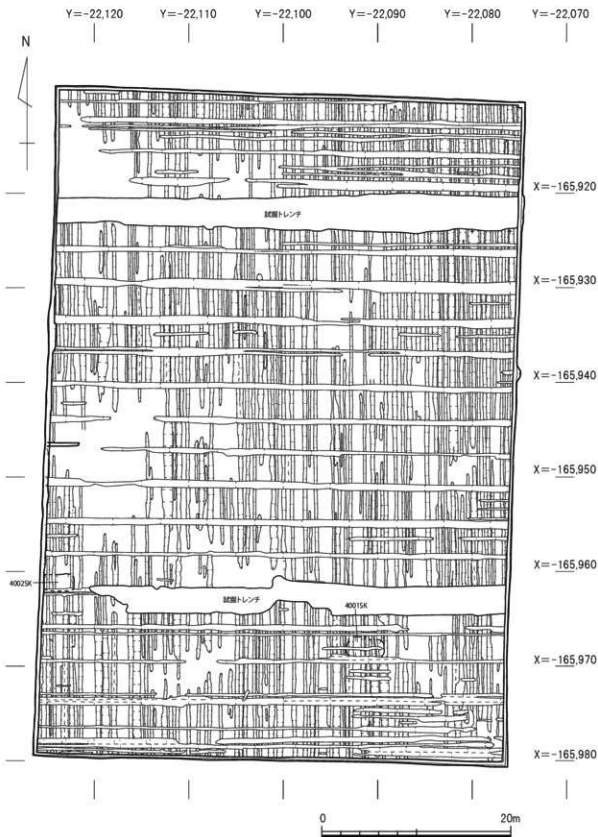


図 22 4区 上層遺構平面図 (S = 1/400)

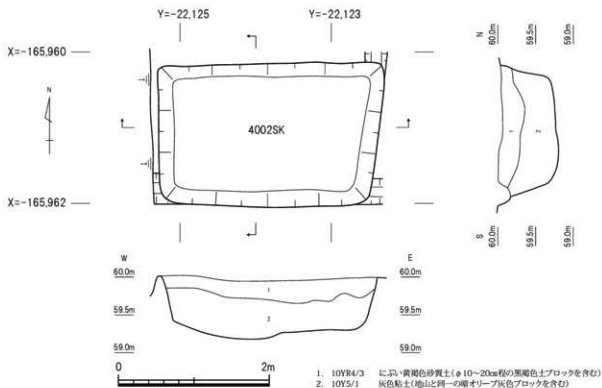
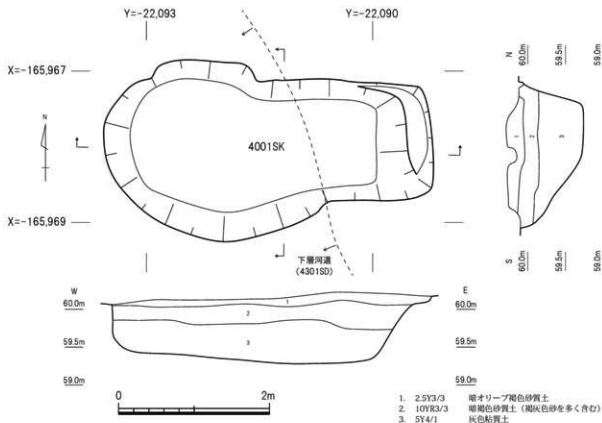


図 23 4区 上層遺構平面・断面図 (S = 1/50)

古墳時代の遺構 (図 24～29)

古墳時代の遺構には、河道、溝、土坑、落ち込みがある。遺構、遺物ともに今回の発掘調査における主要な成果に位置付けられる一群である。時期が明確な遺構は、いずれも中期である。

古墳時代の遺構で中心となるのは、調査区南東隅から北西部にかけて直線的に流れる河道 4301SD である。この河道の東岸に沿って複数の溝が分布する。一方で河道より西側は溝 1 条と土坑 1 基がわずかに存在するのみである。また、河道から北東に離れた一帯 (調査区北東部) には遺構が存在しない空白地帯となっている。上層遺構も含めて遺物が出土する地点も古墳時代遺構の周辺が主である。

4301SD は古墳時代中期の河道である。南東—北西方向にわずかに蛇行しながら、直線的に流れる。2 区の 20989SD および 3 区の 3101SD・3105SD と同一の河道である (位置関係は図 49・50)。調査を実施した範囲内では最も下部にあたり、南東から北西方向に流れる。2・3 区においては河道は大きく蛇行しているが、4 区ではほぼ直線に流れを変える。4301SD の規模は検出長約 67.0 m、幅約 6.5～10.2 m、深さ約 1.6～2.1 m である。河道底面のレベルは全体で概ね平坦であるがごくわずかに下流側が低い。ただし、後述する上流部に存在するしがらみ遺構の周辺では水流が乱れるためか、河道の底面がこれより抉れている地点が存在する。

4301SD の調査は、遺構の検出後、まず遺構内を長軸に沿って 8 m 間隔で北西から順に A 区から H 区までの区画分けをしている。遺構の掘り下げは B 区の北半部に設定した先行トレンチから着手し、河道底面までの深度や基本的な層序の確認を行い、以後は後述する層序順に調査を進めている。先行トレンチでは A 区と B 区の境界ラインを北壁として河道横断面の土層断面を記録している (図 29 最上段)。

4301SD の埋土は、大きく 1～3 層に分かれる。なお、調査時には I～III 層の表記を使用しているが、調査区基本層序との混同を避けるため、ここでは新たにアラビア数字での表記に置き換えることとする。数字の対応関係に変更は無い。出土遺物から 1～3 層の堆積時期は、それぞれ 1 層が中期末頃、2 層が中期中頃～後半、3 層が中期前半であると考えられる。

1 層は遺構検出面から最大でも約 0.6 m までの深さに堆積するシルト～砂層である。1 層の底部 (2 層上面) では幅約 2.0～3.0 m、深さ約 0.3～0.5 m の溝状の蛇行流路が、河道の全体で検出される (図版 16)。中期中頃には河道の大部分が埋没しつつも以前より小規模な流路として存在していたことが確認できる。この 1 層底面の蛇行流路からは中期中頃の遺物が周辺の堆積層よりも多く出土しており、この時期に河道周辺において比較的活動が行われていたことがうかがえる。

2 層は河道の堆積層の大半を占める灰白色砂層で、部分的に青灰色シルト層も含まれる。2 層中には部分的に流木の溜まりが存在する (図 24 の 4301SD 北半部など。図版 16)。これらは自然木の他、一部に加工木もあり、上流に構築されたしがらみ遺構から流れてきた木材も含まれると考えられる。1・3 層と比べると出土遺物の密度は低いが、中期中頃～後半の遺物に加えて 3 層に由来すると考えられる中期前半以前に遡る時期の遺物も出土する。

3 層は河道の底面に堆積する厚さ約 0.3～0.7 m の灰色細砂である。基本的に河道上流側 (南西側) ほど厚く堆積する。ただし地点によっては 2 層との差異は必ずしも明瞭ではない。中期初頭を含む中期前半の遺物が出土する。出土遺物の量は 1 層では上流側ほど多い傾向が明瞭である一方、2・3 層では河道全体でまんべんなく出土し、時期による差が存在する。ただし、中期前半の遺物につい

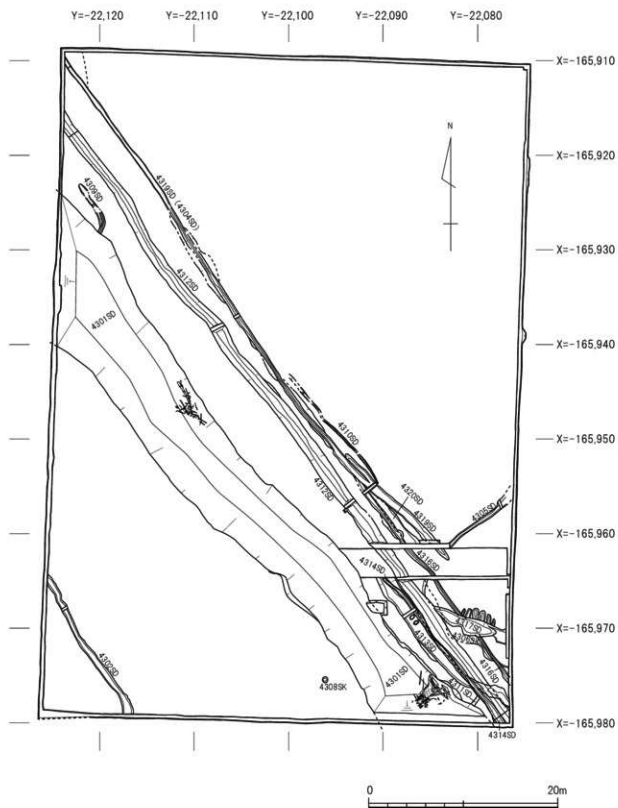


图 24 4区 下層遺構平面図 (S = 1/400)

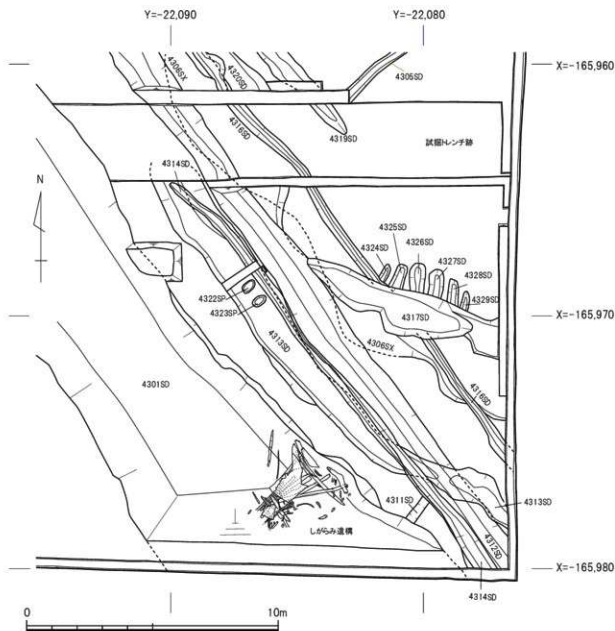


図 25 4区 調査区南東部下層遺構平面図 (S = 1/150)

でも2区と比較すると量は相対的に少ない。上流にあたる2区とは異なり、河道下半の地山層は調査区全体で粘土層であり、主として砂層から成る4301SD埋土との差異は明瞭である。

4301SDの最上流部、南東端の地点では木材を組み合わせて構築されたしがみ遺構を確認している(図26)。これは2区の20989SDに水制目的で構築されたと考えられる大規模なしがみ遺構と一連の遺構であると考えられる。今回確認した地点よりも下流の地点では、しがみ遺構の痕跡も存在しておらず、これが北端部(最下流)に位置するしがみ遺構ということになる。2区のしがみ遺構と異なる点は、今回確認できたしがみ遺構は少なくとも木組部分は構築時の状態を概ね保っている点である。

今回確認したしがみ遺構の構造は、河道底面上に川砂若若干の盛土をした後に部分的に樹皮を重ね、その上から縦杭を流下方向に直交する平面配列で打ち込んで土台となる枠組とし、その間にさらに横木・盛土・樹皮を複雑に盛り重ねていく構造である。詳細な構造・構築手順については第四章で

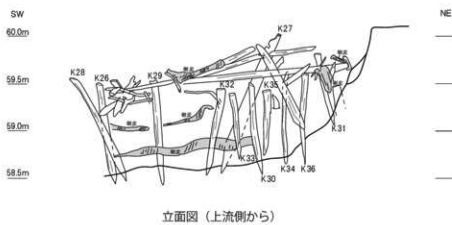
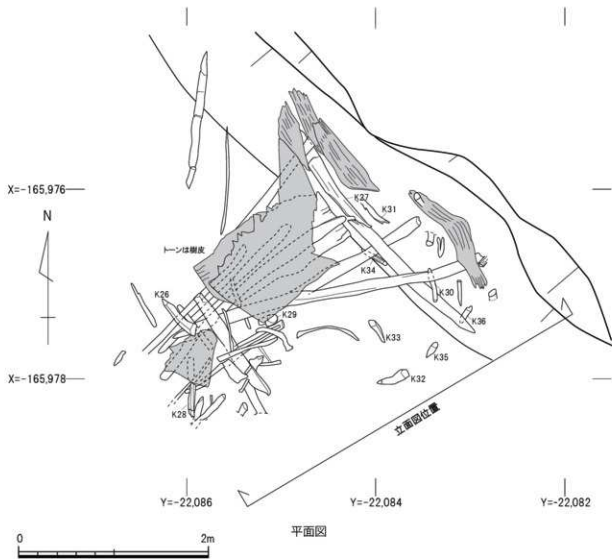


図26 4区 4301SD しがらみ遺構 平面・立面図 (S = 1/40)

まとめている。これら木材と盛土で構成された非透過性の構造体が河道中において、水制の役割を果たしていたと考えられる。今回のしがらみ遺構の高さは最大約 1.3 m である。構成木材の上端は河道の検出面から約 0.3m の深さに位置しており、河道東岸部を埋め立てるような形で構築されていると言える。なお、しがらみ遺構は今回の検出範囲からさらに南側へ続くことを確認しているが、隣接する現況道路を保護できる範囲に調査を留めている。

しがらみ遺構の時期は周辺および内部からの出土遺物と周辺の堆積状況から、3 層と同じく中期前半以前であると考えられ、2 区のしがらみ遺構との関係から中期初頭に遡る可能性も高い。4301SD の出土遺物には土師器、須恵器、韓式系土器、瓦質土器、縄文土器、弥生土器、製塩土器、埴輪、輪羽口、鉄滓、木製品、種子、石製品等がある。

河道 4301SD の東側には複数の溝が存在する（図 24・25）。これらの中には 4301SD と並行する南東—北西方向の直線的な溝が多く含まれる。特に調査区南東隅の一角では重複して掘削された溝が存在しており、溝の掘り直しを行ったと考えられる。これらの溝からの出土遺物の量は、河道 4301SD と比べて非常に少ないが、時期が分かるものはいずれも古墳時代中期後半である。また、調査区南東部に存在する 4306SX（詳細は後述）はこれらの溝よりも新しい遺構であり、その時期も古墳時代中期末頃であり、溝の時期はいずれも中期の範囲に収まると考えられる。

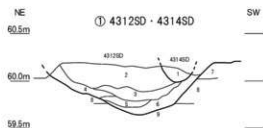
4312SD は、これらの溝の中で規模が最も大きく、かつ深い溝である。幅約 1.1～1.4m、深さ約 0.5～0.7m を残す。調査区外にまで遺構が続き、検出長は約 72.5m である。断面形は三角形を呈する。4301SD の東岸とは約 0.8～5.2m の距離をあけて並行する。調査区南東隅のさらに外側では河道 4301SD と接続している可能性が高い。調査区南東隅では、4312SD の埋没後に 4313SD が掘削され、その 4313SD の埋没後に 4314SD が掘削されていることを確認している。4313SD と 4314SD は、南東側では 4312SD と重複するが北西側では河道 4301SD により近い位置に掘削されている。4313SD と 4314SD は深さが最大約 0.3m と 4312SD より浅い。検出長は調査区南東隅から約 18m である。

4313SD 底面ではピット 2 基（4322SP・4323SP）を検出している。ピットは溝の長軸に沿って約 0.7 m 間隔で並んでおり、4313SD に伴う簡素な構造物の土台となる柱穴である可能性が考えられる。4322SP からは中期の土師器片が出土している。

4311SD は 4301SD と 4312SD とを繋ぐ位置にある小規模な溝であり、両溝と直交する。規模は幅約 0.2～0.4m、深さ約 0.2m、長さ約 1.1 m を残す。溝の断面形は U 字形である。4312SD よりも先に埋没している。

4316SD は南東—北西方向の溝である。規模は幅約 0.3～0.6m、深さ約 0.2～0.3m、長さ 29.2m を残す。溝の断面形は U 字形で、両側面が垂直気味に立ち上がる。4316SD は 4317SD よりも古い溝である。4316SD の北端は調査区中央付近で 4319SD に合流するが、両溝が同時期に機能した時期があるかは不明である。ただし、最終的な埋没は 4319SD のほうが後であることは土層断面で確認できる（図 27）。

4319SD も同様に 4312SD と並行する。4319SD の南東端は 4313SD との合流部から南東に約 13 m の地点に位置する。北西端は調査区北西隅のさらに外に存在する。4319SD の規模は幅約 0.7～1.4 m、深さ約 0.2～0.4m、長さ約 66.8m を残す。断面形は台形で、遺構の南東側のほうが上面・底面幅ともに広い傾向にある。4319SD からはごく少量ながら古墳時代中期中頃の土器が出土しており、



1. 10YR4/1 褐色微砂～細砂
2. 10YR7/1 灰白色微砂土 (鉄分沈着により非常に固い)
3. 5Y6/1 灰色シルト質粘土
4. 10YR5/1 褐色微砂まじり粘質土
5. 2.5Y7/1 灰白色微砂
6. 10YR6/1 褐色微砂まじりシルト
7. 7.5YR4/2 灰褐色土
8. 10YR6/1 褐色粘質土
9. 5P8/1 青灰色粘土

4314SD : 1層
4312SD : 2～6層
地山 : 7～9層

② 4311SD



1. 10YR5/2 灰黄褐色微砂土 (灰色微砂まじり)
2. 10YR6/1 褐色微砂土
3. 7.5YR5/3 に近い褐色土

③ 4323SP



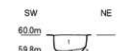
1. 5P8/5/1 青灰色粘土 (褐色微砂を含む)
2. 5P8/4/1 暗青灰色粘土
3. 5Y5/1 灰色粘質土

④ 4322SP

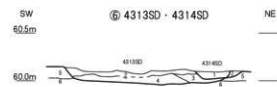


1. 7.5YR7/2 明褐色微砂～微砂
2. 5P8/5/1 青灰色粘土
3. 5Y5/1 灰色粘質土

⑤ 4316SD



1. 7.5YR5/1 褐色微砂質土 (灰色砂を含む)
2. 7.5YR4/1 褐色シルト
3. 5YR4/1 褐色土



1. 7.5YR7/1 明褐色微砂まじり細砂土
2. 7.5YR6/3 に近い褐色微砂 (鉄分沈着により非常に固い)
3. 5YR5/1 褐色微砂まじり砂質土
4. 7.5YR6/1 褐色粘土
5. 7.5YR4/2 灰褐色土
6. 10YR5/1 褐色粘質土

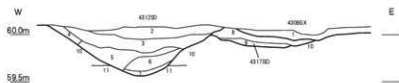
4314SD : 1層
4313SD : 2～4層
地山 : 5～6層

⑦ 4305SD



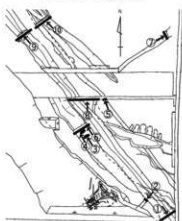
1. 10YR7/2 に近い黄褐色微砂土 (褐色粘土ブロックをまばらに含む)
2. 10YR7/3 に近い黄褐色シルト質土
3. 7.5YR4/1 褐色土

⑧ 4312SD・4306SX



1. 7.5YR6/3 に近い褐色砂土 (灰色微砂を含む)
2. 10YR6/1 褐色微砂土
3. 2.5Y6/1 黄灰色シルト質粘土
4. 10YR5/1 褐色粘土 (灰色微砂を含む)
5. 10YR7/1 灰白色砂
6. 10YR6/1 褐色微砂～シルト
7. 5Y5/1 灰色シルト質粘土
8. 2.5Y6/1 黄灰色微砂まじりシルト
9. N6/0 灰色微砂まじり粘土
10. 10YR6/1 褐色粘質土
11. 5P8/5/1 青灰色粘質土

4306SX : 1層
4312SD : 2～7層
4317SD : 8～9層
地山 : 10～11層



断面の位置



1. 10YR7/2 に近い黄褐色微砂土
2. 10YR7/1 灰白色シルト
3. 10YR6/1 褐色微砂～シルト
4. 2.5Y6/1 黄灰色微砂 (褐色粘土ブロックを含む)
5. 2.5Y7/1 灰白色粘質微砂
6. 5Y6/1 灰色粘土
7. 5YR5/1 褐色土
8. 5YR4/1 褐色微砂質土
9. 7.5YR6/1 褐色微砂土
10. 5Y6/1 灰色粘土

4312SD : 1～6層
地山 : 7～10層



1. 7.5YR6/4 に近い褐色微砂
2. 7.5YR7/1 明褐色微砂
3. 7.5YR7/1 明褐色粘質土
4. 10YR6/1 褐色微砂質土
5. 10YR7/1 灰白色シルト粘質土

4319SD : 1～4層
4316SD : 5層



図 27 4区 下層遺構断面図① (S = 1/40)

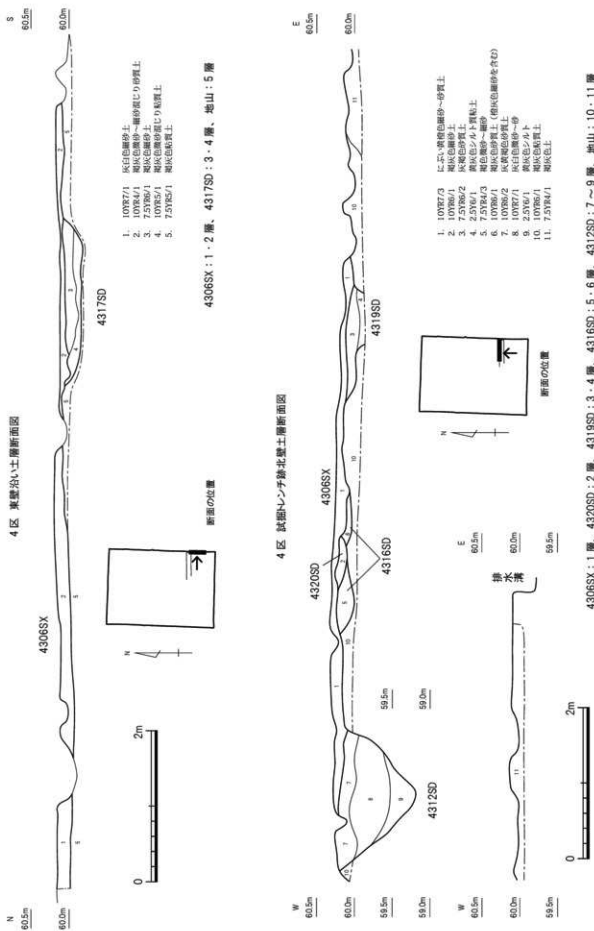


図 28 4区 下層道構断面図② (S = 1/50)

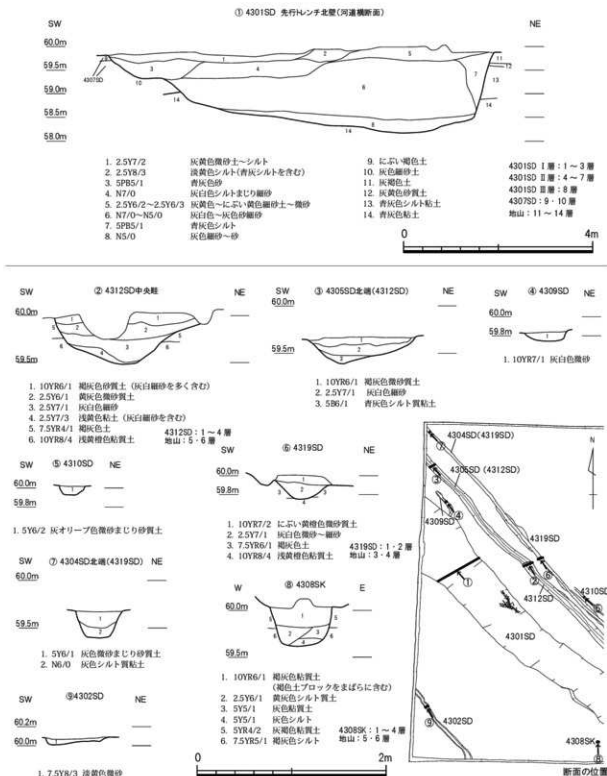


図29 4区 下層遺構断面図③ (S = 1/40, 1/80)

溝群の中では相対的に古い遺構である可能性がある。

4317SDは溝の東半部が東南東～西北西方向、西半部が南北方向に伸びる。規模は幅約0.6～1.4m、深さ約0.1～0.5m、長さ約11.2mを残す。ごく少量ながら中期の土器が出土している。4317SD東半部の北側には、4317SDに接続する溝6条(4324～4329SD)が存在する。いずれも幅約0.2～0.4m、

深さ約0.2 mの溝で、4317SDと直交方向に掘られている。4317SDの深さはこの一帯が最も深くなっている。

4306SXは調査区南東部一帯に存在する、微砂～細砂を多く含む褐色色砂質土の堆積である。河道4301SDの最終堆積段階に近い時期の氾濫層であると考えられ、厚さ最大約0.2 mの堆積が先述の調査区南東隅の溝群上を覆っている。厚さは河道4301SDから離れた調査区東壁側のほうが厚い傾向にある。古墳時代中期後半～末頃の土器が少量出土している。

4305SDは南西～北東方向の溝である。規模は幅約0.4～0.8 m、深さ最大約0.2 m、長さ約9.2 mを残す。断面形は三角形である。古墳時代中期の土器器が出土している。

4310SDは4319SDの東隣に位置する南東～北西方向の溝である。規模は幅約0.2 m、深さ約0.1 m、長さ約15.1 mを残す。断面形は台形である。4310SDからは遺物が出土しておらず、また中世より古い他の遺構との重複関係も無いため詳細時期は不明であるが、河道4301SDおよび先述の溝群と平行・直交する方向に掘削されていることから、これらと同じく古墳時代中期の遺構である可能性が高い。

4309SDは調査区北西部に位置する溝である。規模は幅約0.3～0.6 m、深さ約0.1 m、長さ6.3 mを残す。「へ」字形に屈曲し、南端は河道4301SDの東岸に接続する。古墳時代中期の土器が出土している。土層から4309SDの埋没は4301SDの最終堆積よりも早い時期であることが確認できる。

以上が河道4301SDおよびその東側に存在する遺構である。

河道4301SDの西側は、東側とは対照的に遺構が非常に少ない。以下にその内容を述べる。

4308SKは河道西岸から約2.5 mの地点に位置する土坑である。平面形は一辺約0.6 mの隅丸方形である。深さ約0.5 mを残し、断面形は台形である。土器の細片が出土している。

4302SDは調査区南西部に位置する南東～北西方向の溝で、わずかに蛇行する。規模は幅約0.5～0.8 m、深さ最大約0.2 m、長さ約17.0 mを残す。断面形は幅広いU字形である。埋土や形状、位置関係から、3区の3102SDと同一の溝である可能性がある。

第7節 4区 出土遺物

4区の調査で出土した遺物には、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器・製塩土器・土製品・瓦器・陶磁器・輪羽口・鉄滓・石器・石製品・木材・動物骨がある。出土遺物の量は、遺物コンテナ約130箱である。

古墳時代、とくに中期の遺物が量・種類ともに最も豊富である。古墳時代中期の河道4301SDからは縄文時代～古墳時代前期の遺物も少量ながら出土している。平安時代後期以降の耕作溝群およびそれ以降の堆積層からは中世以降の土器が出土しているが量は限られ、下層の古墳時代の遺構に由来する遺物のほうが多い。

今回報告を行う遺物は、概ね全体像の分かる遺物および出土遺構・層序の時期や性格をよく表わす遺物である。以下に、遺構ごとに出土遺物について報告する。報告する遺構の順は、基本的に第6節の順に倣う。

平安時代後期～鎌倉時代の遺構（図30）

耕作溝群（図30）

図22に示した耕作溝群から出土した主要な遺物を図30に示している。

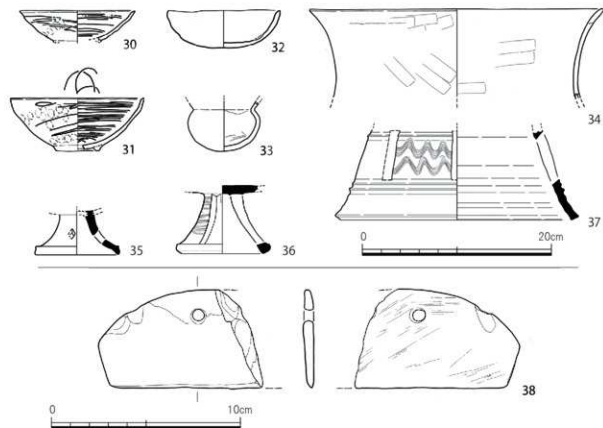


図30 4区 耕作溝出土遺物（S=1/4、1/2）

耕作溝群からの出土遺物には瓦器、土師器、須恵器、石器がある。耕作溝群の形成期と考えられる12～13世紀の土器が少数出土する他、下層遺構に由来する古墳時代以前の遺物が出土する。遺物量としては後者が多数を占める。古墳時代以前の遺物は下層に古墳時代河道が存在する地点を中心に出土する一方、中世以降の遺物は調査区全体にまばらに広がって出土する傾向にある。

30・31は瓦器埵である。いずれも大和型の埵である。30は復元口径12.0cmを測る。直線的に開く形状である。ミガキの間隔は内外面ともに広い。31は復元口径14.2cm、器高5.5cm、底径4.3cmを測る。高台の断面形は台形を呈する。見込には連結輪状暗文を施す。

32は土師器環である。口径11.8cm、器高4.1cmを測る。表面が磨滅しており調整は不明である。やや厚手の作りである。

33は土師器小形丸底甕である。表面は全体に平滑に仕上げられているが、体部内面下半に若干の工具痕が残る。

34は縄文土器深鉢の口縁部である。復元口径30.8cmを測る。胎土には直径0.1～0.3cm大の白礫を多く含む。

35・36は須恵器高環の脚部である。35は小型の脚部である。菱形の透かしを外側からの刺突によって穿つ。透かしの数は不明である。36は方形の透かしを四方向に穿つと考えられる。外面には全体に薄く自然釉が付着する。

37は須恵器器台の脚部である。復元底径25.6cmを測る。透かしは幅の狭い方形と考えられる。外面には上下の振れ幅が大きな波状文を二段に施す。

38は石包丁である。結晶片岩製である。直径0.7cmの円形孔が一ヶ所遺存している。円形孔は器面に対してやや斜め方向に穿たれている。

古墳時代の遺構（図31～48）

古墳時代の遺構には河道、溝、土坑、落ち込み、ピットがある。出土遺物の大多数は河道4301SDから出土している。4301SDは3区の3101SD・3105SDと同一の河道であり、その下流部にあたる。河道以外の遺構からの出土遺物は非常に少なく、かつ図化が難しい土器や木材、種子の細片が大部分を占める。

4301SD（図31～47）

4301SDからの出土遺物には土師器、須恵器、韓式系土器、製塩土器、輪羽口、鉄滓、馬歯、木製品、種子、燃えさし、石製品、石器がある。出土遺物の時期は古墳時代中期を中心とし、古墳時代中期初頭から中期末までの各時期の遺物がある。4301SDは今回の調査で最も多くの遺物が出土しており、今回の報告外にも特に土師器は多くの遺物が出土している。

第5節で述べたとおり、4301SDの埋土は大きく1～3層に分かれる。以下に、層序ごとに報告を行う。層序が不明瞭な遺物については図47にまとめている。

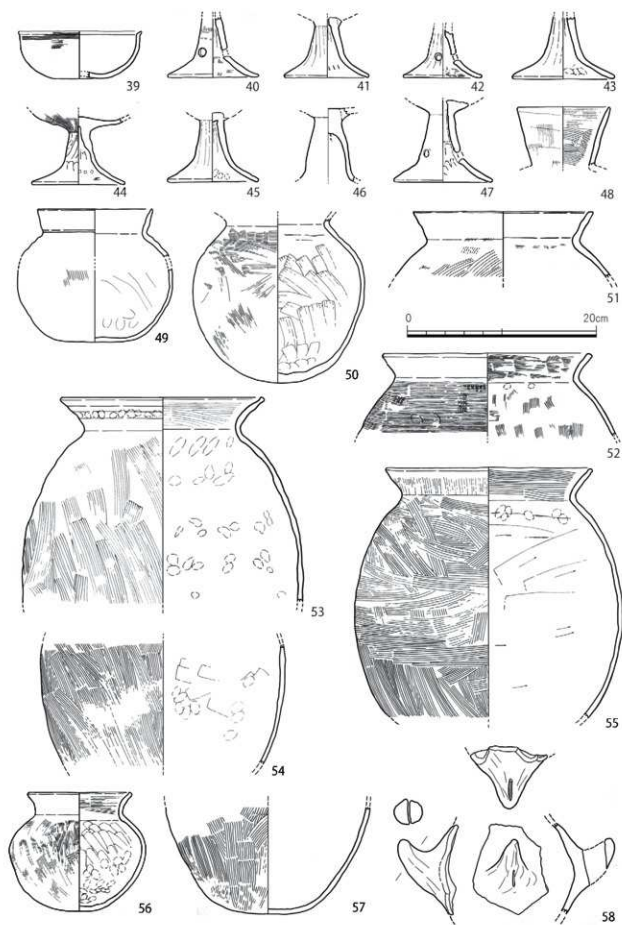


图 31 4区 4301SD 1层出土器物① (S = 1/4)

4301SD 1層 (図31・32)

39は土師器坏である。底部は平底である。復元口径13.1cm、底径5.8cm、器高4.8cmを測る。表面が磨滅しており細かな調整は不明であるが、外面上半にミガキが確認できる。外面には大きな黒斑がある。

40～47は土師器高坏の脚部である。40は円形透かしを三方向に穿つ。内面には絞り痕、板状工具の静止痕、布目痕が残る。41は脚部上端まで貫通する刺突痕がある。透かしは無い。筒部外面には面取りを施す。42は小型で裾が大きく開く形状である。円形透かしを三方向に穿つ。裾部内面にハケ調整を施す。43は筒部外面に軽く面取りを施す。内外面とも表面が劣化しており薄く煤が付着している。44は底が広い坏部が残る。外面のハケ調整とナデ調整は全体に垂直方向に対して捻れる方向に施されている。透かしは無い。外面裾部に直径1.0cm大の粘土粒が付着したまま焼成されている。45は外面に面取りを施す。透かしは無い。坏部との接合状況が断面確認できる。46は筒部が丸みを帯び、中実である。坏部底面がわずかに遺存する。脚部は内外面ともナデ調整で丁寧に仕上げている。47は脚上端部に棒状工具による刺突が存在するが、坏底部まで貫通していたかどうかは不明である。円形透かしを三方向に穿つ。外面の調整は磨滅により不明である。

48は土師器直口壺の口縁部である。球形の体部であると考えられる。口径9.7cm、口縁部高6.1cmを測る。

49は土師器甕である。同一個体であると考えられる口縁部と体部の破片を合わせて図化している。復元口径11.9cm、復元器高14.2cmを測る。底部は平底で、地面への据え付けによる擦痕がある。外面体部には煤が薄く付着する。外面は磨滅しているがわずかに細かなハケが確認できる。

50は土師器甕の体部である。わずかに上半部が膨らむ球形である。外面は肩部以下に煤が付着し、特に体部中ほどに多い。内面下半にも薄く炭化物が付着している。

51・52は土師器甕の口縁部である。51は口縁部が直線的に開く形状である。器厚が0.6cm前後とやや厚手の作りである。体部外面に間隔が広いハケ調整を施す。52は体部外面に格子タタキを施した後にハケ調整を施している。色調は他の甕より明るい淡黄灰色を呈する。体部外面には黒斑が存在する。

53は土師器長胴甕の上半部である。外面は肩部以下の全体に薄く煤が付着する。口縁部外面および体部内面には指頭圧痕が明瞭に残る。

54は土師器長胴甕の体部である。体部外面には細かなハケ調整を施す。外面には全体に煤が薄く付着する。

55は土師器甕である。ハケ調整は全体に粗く施される。外面の肩部から体部中ほどの範囲に煤が薄く付着する。

56は土師器小型甕である。口径11.0cm、器高12.5cmを測る。底部は平底気味である。口縁部は小さく内側に折り返す。底部を除く外面頸部以下の範囲に煤が付着する。内面にも炭化物がわずかに付着する。

57は土師器甕の底部である。底部は平底で外面に据え付け痕がある。外面のハケ調整は粗い。外面底部以外には煤が薄く付着する。

58は韓式系土器鍋の把手である。体部は球形と考えられる。細い線状の切込が把手の上面から下

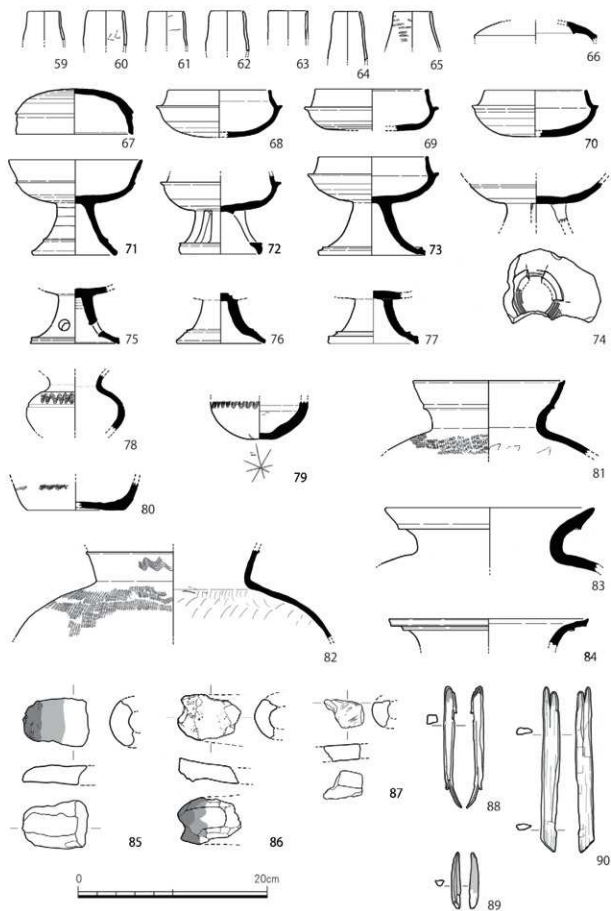


图 32 4区 4301SD 1层出土遗物② (S=1/4)

面にむけて貫通している。

59～65は製塩土器である。4301SDからは製塩土器の細片が若干出土しており、形状が分かるものは基本的に筒形もしくは裁頭円形である。塊形の可能性を含むものもわずかにある。59～64は筒形である。復元口径は3.5～4.2cmである。全体像が分かる資料は無いが、下半部がやや膨れる形状と考えられるものが多い。基本的にナデ調整で仕上げられており、外面に指紋が残る場合が多い。65は裁頭円形である。復元口径4.1cmを測る。外面にタタキを施す。今回出土した製塩土器はタタキを施すものは非常に少ない。

66は須恵器蓋であると考えられる。内面に突起状の返りがある。

67は須恵器蓋環の蓋である。復元口径12.8cm、器高4.8cmを測る。内面に広く被熱痕がある。内面には少量ながら炭も付着する。

68～70は須恵器蓋環の身である。68は復元口径10.8cm、器高5.0cmを測る。ヘラケズリがやや強い点以外は、全体に丸みを帯びた仕上がりである。69は復元口径12.0cm、器高4.5cmを測る。底部は平底で体部は薄い。口縁端部には明瞭な面をもつ。70は復元口径10.8cm、器高4.9cmを測る。底部はわずかに平底である。

71～77は須恵器高環である。71は無蓋高環である。中期前半に遡ると考えられる。4301SD出土遺物の中では珍しく、河道内で長く流水に晒され続けた痕跡が表面に多く残る。焼成がやや悪い。外面の一部が瓦質に近くなっている。72・73は有蓋高環である。72は脚部に方形透かしを三方向に穿つ。全体をナデ調整で仕上げる。73は全体に非常に強い回転ナデ調整を施しており、水引き痕が明瞭に残る。透かしは無い。74はやや大型の高環である。方形もしくは台形の透かしを三方向に穿つ。環部底面には脚部との接合面に圏線状の刻みを施している。環部には自然釉と降着灰が付着する。75～77は脚部である。75は直径1.2cmの大型の円形透かしを三方向に穿つ。焼成がやや悪く、灰白色を呈する。76は小型の脚部で透かしは無い。77は脚部に幅広の面をもたせる。裾部に作り出した稜は鋭い。

78は須恵器壺もしくは鉢の体部である。口縁部は大きく開く形状と考えられる。外面肩部に細かな波状文を施す。外面全体にごく薄く自然釉が付着する。

79は須恵器鉢の底部である。外面底部に「米」字形のヘラ記号が刻まれている。

80は須恵器壺もしくは鉢の底部である。底径10.8cmを測る。平底だが中央部がわずかに上方に窪む。外面に波状文を施す。内外面ともに自然釉が付着しており、内面への付着状況から、頸部より上方が大きく開く形状であった可能性が考えられる。

81は須恵器壺である。二重口縁である。外面体部に平行タタキを密に施す。内面は全体にナデ調整を施す。

82は須恵器壺である。体部は肩部が大きく張り出す。口縁部外面に波状文を施す。体部内面には無文の当て具を用いたような段状の痕が多数存在する。

83・84は須恵器甕の口縁部である。83は短く外反する口縁部である。器厚1.0～1.2cmと厚手の作りである。84は上部が外に大きく開く形状である。外面の稜は明瞭である。

85～87は羽輪口である。送風口側を右側として図化している。85は排気口側に被熱による発泡や変色が顕著に認められる。全体としては送風口側から排気口側に向かって径が小さくなるが、送風孔自体の径は確認できる範囲内では大きな変化は無い直口である。86も85と同様の羽輪口である。

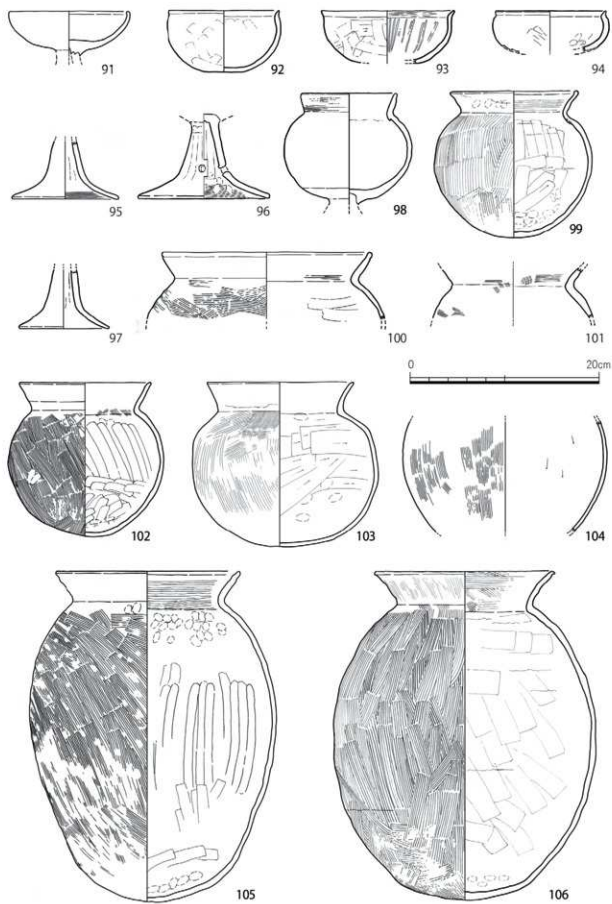


图 33 4区 4301SD 1层底面蛇行流路出土器物① (S = 1/4)

87は排気口先端部の破片である。

88～90は燃えさしである。木材の端材を利用している。4301SDからは他にも同様の燃えさしが出土しており、その一例として挙げている。長さ10～20cm程度のものが多い。88・90は代表的な例で、先端部が炭化している。89は長さ6.1cmで炭化範囲が広い。

4301SD 1層底面蛇行流路（図33～35）

4301SDの埋没過程後半における一時期の流路である。堆積層の土砂の量としては先述の1層や2層よりもかなり少ないが、遺物はそれらに匹敵する量が出土している。

91は土師器高環の環部である。差し込み式の脚部上端が挿入されたまま折れて出土している。口縁部は内湾する形状で、端部は丸く収める。内外面ともナデ調整で仕上げるが、外面下半にはひび割れがやや目立つ。

92～94は土師器環である。92は深めの環である。底部はやや狭い平底である。口径11.6cm、器高6.5cmを測る。口縁端部は小さく外につまみ上げて、内側に面を作り出す。93は復元径14.0cm、残存高5.4cmを測る。口縁端部は外に折り返す。内面には底部から放射状のミガキを施す。94は復元口径11.6cmを測る。全体に内湾する形状で、口縁端部を外側に小さく折り返す。使用時に被熱したためか全体に黒色化している。

95～97は土師器高環の脚部である。95は内面裾部にハケ調整を施す。裾部の一部に内外面にまたがる黒斑が存在する。96は脚柱部下端の位置に円形透かしを三方向に穿つ。環部底面が遺存しており、中央に下からの細い刺突痕が存在する。内面はハケ調整や指頭圧痕が明瞭に残る。97は内面にわずかに絞り痕が残る他はナデ調整で丁寧に仕上げている。

98は脚付壺である。上端が細い差し込み式の脚部が剥落した状態で出土している。内外面とも被熱し表面は全体にかなり劣化している。同様の状態の特徴的な脚付壺が2区の河道からも複数出土している（『新堂遺跡Ⅳ』遺物番号897・1051・1052・1053）。

99～104は土師器甕である。99は球形の体部で、外面に縦方向のハケ調整を施す。外面の口縁部を含む全体にまばらながら煤が薄く付着する。100は復元口径22.0cmを測るやや大型の甕である。口縁端部は内外面に小さく肥厚させる。101はやや厚手の作りである。内外面にハケ調整を施す。102は球形の体部に直線的に開く口縁部をもつ。外面体部に施されたハケ調整は非常に細かい。煤は付着していない。103は体部がほぼ遺存しており、やや横長の形状であることが確認できる。外面の肩部以下に煤が薄く付着し、底部内面に炭化物痕跡が存在する。104は体部の中ほどである。体部外面下半に煤が付着する。

105・106は土師器長胴甕である。105は口径19.6cm、器高34.8cmを測る。外面には肩部から中段にかけて煤が薄く付着する。体部下半は全体に凹凸が目立つ。106は口径18.8cm、器高34.5cmを測る。105よりもやや下膨れの形状である。外面は底部を除く肩部以下に煤が付着するが、上半部は薄い。

107～110は土師器甕である。107は同一個体と考えられる上下の破片を合わせて図化している。外面にまばらに煤が薄く付着し、口縁部にも存在する。108は体部片で、長胴甕の可能性はある。外面全体に煤が付着する。内面には大型の指頭圧痕が複数存在する。109は体部である。煤は付着していない。外面に黒斑が存在する。110は体部下半である。外面に煤が付着する。

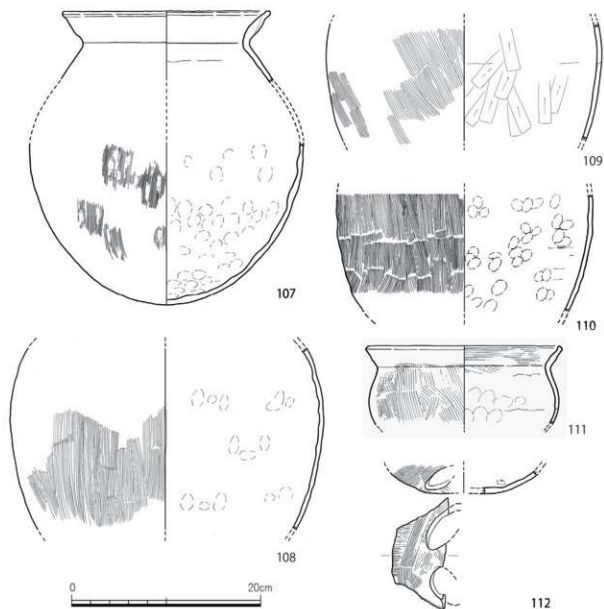


図34 4区 4301SD 1層底面蛇行流路出土遺物② (S=1/4)

111は土師器鉢である。外面肩部以下と口縁部に分かれて煤が付着する。

112は韓式系土器甕の底部である。底部の平坦面は狭く、明確な稜は無い。楕円形の蒸気孔を穿つ。

113・114は須恵器蓋環の蓋である。113は復元口径13.0 cm、器高4.1 cmである。肩部の稜は鋭い。

114は口径12.4 cm、器高4.7 cmである。ヘラケズリ、ナデ調整ともに滑らかに仕上げる。

115は須恵器有蓋高環の蓋である。口径11.4 cm、残存高5.0 cmを測る。頂部につまみが付く。

116は須恵器蓋環の身である。口径11.0 cm、器高5.6 cmである。

117～120は須恵器高環である。117は有蓋高環である。脚部に台形透かしを三方向に穿つ。口縁端部が外側に小さく折り返し、端面には凹線を巡らせる。118は脚部である。円形透かしを三方向に穿つ。透かしの下端は脚部下半に巡らせた稜と部分的に重なる。119はやや小型の脚部である。全体にナデ調整を施す。120は無蓋高環の環部である。外面に把手を貼り付ける。破片のため把手の数は不明である。底部外面には脚部に透かしを穿つ際に着いたと考えられる傷が存在する。透かしの形状と数量は不明である。内面環部底面には自然釉が厚く付着する。

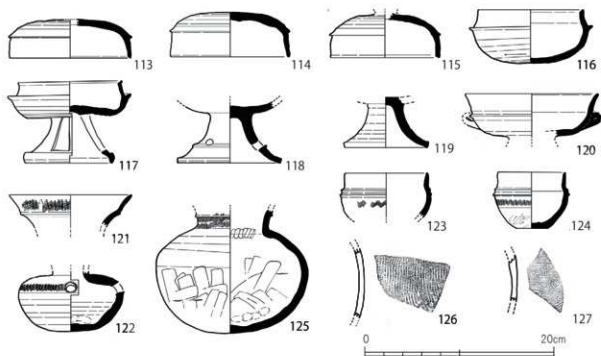


図35 4区 4301SD 1層底面蛇行流路出土遺物③ (S = 1/4)

121は須恵器壺もしくは甕の口縁部である。口縁部外面に波状文を施す。

122は須恵器甕の体部である。外面上半部と内面底部中央に自然軸と降着灰が付着する。

123・124は須恵器碗(カップ形)である。123は復元口径8.6cmを測る。124は平底である。口径7.2cm、器高5.8cmである。把手の有無は不明である。内面底部に自然軸が付着する。

125は須恵器壺である。球形の体部に直線的に立ち上がる口縁部である。口縁部下半に波状文を施す。外面体部下半にはヘラナデ調整を施している。

126・127は瓦質焼成の甕の体部片である。126は外面に平行タタキを施し、その上から沈線を巡らせる。内面はナデ調整である。127は外面に平行タタキを施す。内面は工具痕の可能性のある鈍い段が存在する。

4301SD 2層(図36~41)

128・129は土師器環である。128は口径13.3cm、器高5.5cmである。平底気味である。口縁端部は外側につまみ上げて内側に面を作り出す。表面の磨滅により調整は不明である。129は上半部が内湾する。復元口径16.0cmを測る。

130~132は土師器高環である。130は碗形高環である。内面環部に底部中央から放射状に太いミガキを施す。脚部上端に棒状工具による刺突が存在する。131は環部が直線的に開く形状である。脚柱部に軽い面取りを施す。外面環部と内面脚部に黒斑が存在する。132は碗形高環である。表面は全体に磨滅しており細かな調整は不明である。内面環部に被熱痕がある。

133~144は土師器高環の脚部である。個別に触れないものは透かしが存在しない。133はやや大型の脚部である。外面上半に環部との接合時に施したと考えられるハケ調整がある。134は脚柱部上半が中実である。表面が磨滅しているが外面にミガキが確認できる。135は上端部に環部底面が残るが、環部と脚部の接続方式の詳細は確認できない。136は円形透かしを三方向に穿つ。内面に

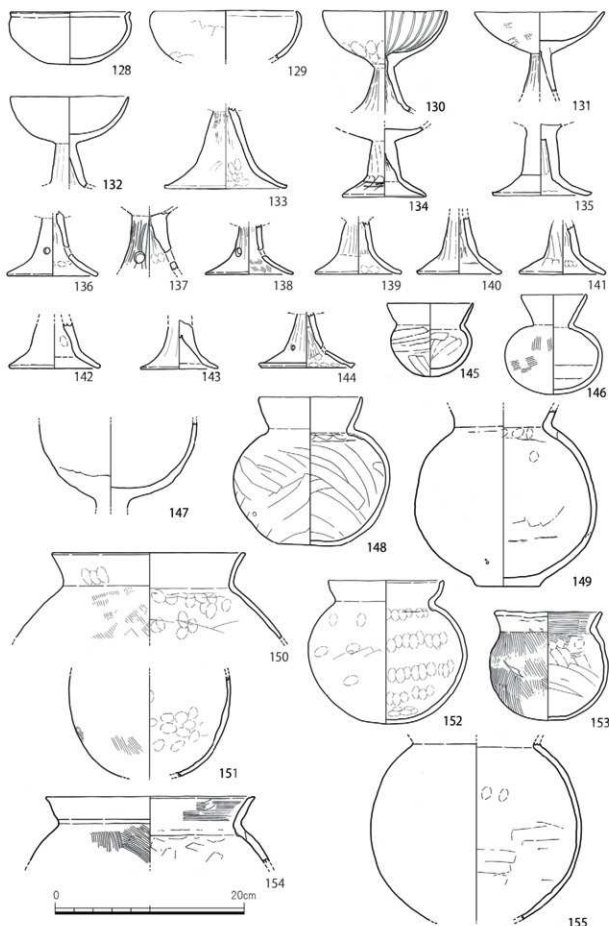


图 36 4区 4301SD 2层出土遗物① (S=1/4)

指頭圧痕が明瞭に残る。137は弥生土器である可能性がある。円形透かしを三方向に穿つ。脚部上端部から環部底面にかけて貫通するひび割れが存在する。138は円形透かしを三方向に穿つ。内外面にハケ調整を施す。139は環部底面との接合面で剥落している。140は脚柱部に幅が広い面取りを施す。内面には絞り痕が明瞭に残る。141は磨滅により細かな調整は不明であるが、ケズリと指頭圧痕の存在が確認できる。142は厚手の作りで、脚裾部は短く開く形状である。脚柱部内面にはケズリを施す。143は脚柱部が中実である。外面は弧を描く形状であるが、内面はケズリによって直線的である。144は細い円形透かしを二方向に穿つ。透かしの位置関係は対面から若干ずれる。

145は土師器小形丸底壺である。外面体部をヘラケズリで平滑に仕上げている。

146は土師器直口壺である。外面体部にハケ調整を施す。

147は土師器脚付壺である。内外面ともに被熱によって表面が大幅に劣化している。98と同種の土器であると考えられる。98よりも147のほうが一回り大きい。

148は土師器壺である。底面に明確な稜こそ無いが平底である。外面に大きな黒斑が存在する。

149は土師器平底壺である。球形の体部の底に粘土を薄く貼り足して台を作り出している。底面近くの位置に直径0.1～0.2cm大の穿孔が二つ並んで存在する。外面体部下半に薄く被熱痕がある。

150～155は土師器甕である。150は甕の上半部で口縁部は外反する形状である。外面肩部に煤が付着する。151は体部下半である。外面に薄く煤が付着し、内面にもわずかに煮炊痕がある。152は球形の体部に内湾して立ち上がる口縁部をもつ。外面全体に煤が付着し、内面には炭化物が遺存する。153は小型の甕である。底部付近に円形に一ヶ所、体部に線状に二ヶ所、それぞれ外面から穿孔を行っている。154は口縁部であり、長胴甕である可能性もある。内面に粘土紐痕が存在する。155は体部片である。色調が淡橙灰色を呈し、胎土も0.2cm大の礫を多く含むなど他の甕と異なる特徴があり、外来土器である可能性がある。

156～160は土師器長胴甕ないし長胴傾向甕である。156は口径20.8cm、残存高32.4cmを測る。口縁の一部に歪みがある。外面体部下半に煤が薄く付着する。157は体部上半である。内外面とも凸凹が目立ち、内面には粘土紐痕が残る。158は体部の肩部が張り出す形状である。外面に細かなハケ調整を施す。外面に黒斑がある。159は体部中ほどに一辺約2.0～3.9cm大の不整形な穿孔を施す。外面の穿孔以下の範囲に煤が薄く付着する。160は全体が磨滅しており細かな調整が不明であるが、わずかに指頭圧痕が確認できる。外面に煤が付着しているが、この範囲も不明瞭である。

161・162は韓式系土器甕の体部である。161は把手が体部との接合面で剥落している。内面にはケズリ痕が明瞭に残る。162は大きく上方に反り上がる形状の把手がある。内面には把手が取り付け高さの位置にひび割れがある。外面には細かなハケ調整を施す。

163は甕の底部片である。円形もしくは楕円形の蒸気孔が配されている。

164は韓式系土器甕である。同一個体と考えられる上下の破片を合わせて図化している。平底の底部に円形の蒸気孔が七つ穿たれていたと考えられる。中央の蒸気孔は他よりもやや大きい。内外面全体をナデ調整で仕上げている。底部付近にケズリと体部に指頭圧痕が部分的に残る。

165は韓式系土器甕の口縁部であると考えられる。外面に格子タタキを施す。内面はナデ調整で仕上げる。

166は甕もしくは鍋の把手である。外面側から体部に挿入され内面側がやや膨らんでいる。

167は韓式系土器鍋の口縁部であると考えられる。内外面ともハケ調整を施す。

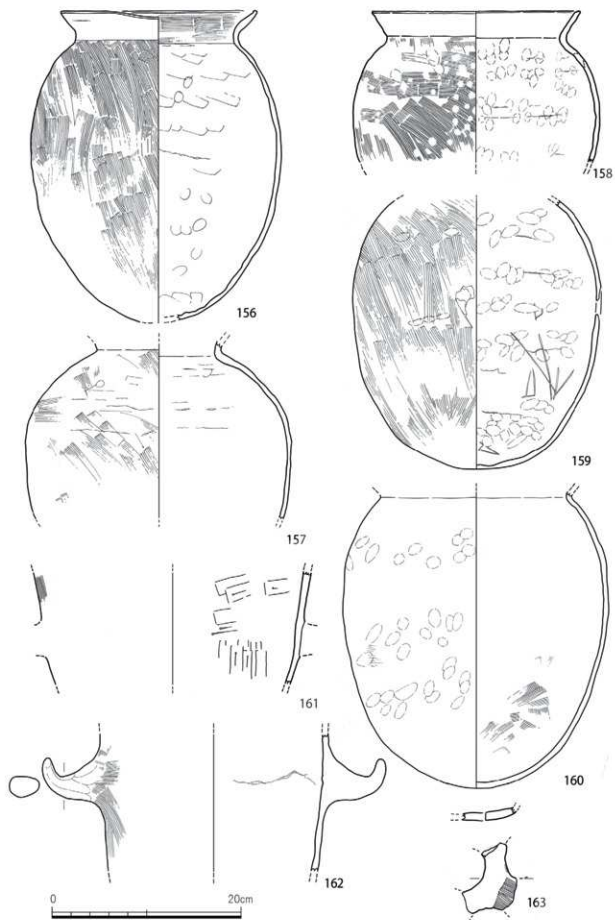


图 37 4区 4301SD 2层出土遗物② (S=1/4)

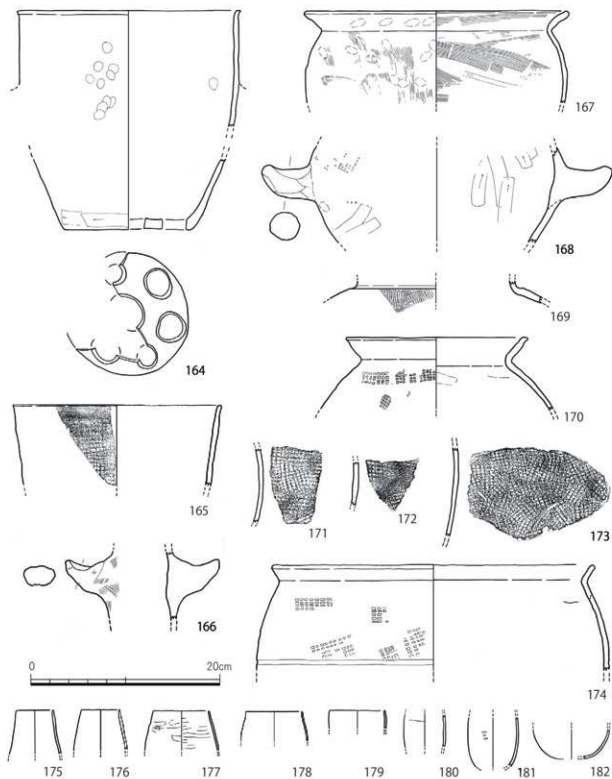


図38 4区 4301SD 2層出土遺物③ (S = 1/4)

168は韓式系土器鍋の体部である。把手と体部の接合部が断面確認できる。全体に磨滅しており細かな調整は不明であるが、外面体部に格子タタキが確認できる。内面にはケズリを施す。

169は瓦質土器甕の頸部である。外面体部に平行タタキを施す。口縁部はナデ調整を施す。

170～173は韓式系土器甕である。170は甕の上半部である。外面体部に格子タタキを施す。内面はナデ調整を施す。171～173は甕の体部で、いずれも外面に格子タタキを施す。

174は韓式系土器鉢もしくは鍋である。復元口径34.0cmを測る大型である。外面体部に格子タタキを施す。体部中段に横方向の沈線を巡らせる。

175～182は製塩土器である。175～178は鼓頭卵形である。177のみ内面にハケ目と外面に布目が確認できる。179～181は筒形であるが鼓頭卵形との差異は必ずしも明瞭ではない。182は碗形である。内外面ともナデ調整を施す。

183～186は須恵器蓋環の蓋である。183は復元口径12.8cm、器高3.8cmを測る。頂部全体に自然軸が付着する。184は復元口径11.4cm、器高4.0cmを測る。全体に厚手である。185は復元口径12.0cm、器高3.7cmを測る。頂部の平坦面が広い形状である。186は復元口径13.4cm、器高4.0cmを測る。焼成がやや甘く、内面は橙褐色を呈する。

187～189は須恵器蓋である。頂部につまみが付く有蓋高環の蓋であると考えられる。187は復元口径12.8cm、残存高4.8cmを測る。肩部の稜の下に凹線を巡らせる。188は復元口径13.0cm、残存高4.9cmを測る。裾部が開く形状である。189は復元口径12.4cm、残存高4.5cmを測る。外面頂部にハケ状工具による櫛描文様を描く。櫛描文様は内・外二重の同心円文帯と、その間に直交方向に配される線から成る。同様の文様の須恵器蓋は、2区の河道の調査でも約30点が出土しており、新堂遺跡集落における特徴的な遺物として挙げられる。今回の調査では189・274～276・312がこれにあたる。

190～192は須恵器蓋環の身である。190は口径9.6cm、器高9.6cmを測る。胎土に直径0.1cm未満の炭化粒を多数含む。この河道からは古墳時代中期を通じて遺物が出土するが、その中では遺物量が少ない段階の土器である。191は口径10.0cm、器高4.3cmを測る。外面底部中央に粘土組痕が明瞭に残る。192は復元口径11.8cm、器高4.6cmを測る。焼成がやや不良である。

193～199は須恵器高環である。193は有蓋高環の環部で、外面に波状文を施す。外面底部に脚部に透かしを穿つ際の傷跡がある。透かしの形状は不明である。

194は有蓋高環であるが、蓋を外した状態で焼成したことが確認できる。脚部に火焰形透かしを二方向に穿つ。火焰形透かしは大韓民国慶尚南道咸安郡周辺の土器の特徴とされる。194は咸安産の土器を模倣して作られた須恵器であると考えられる。同様の高環が2区の調査でも出土している(『新堂遺跡Ⅳ』遺物番号94)。

195は環部が碗形に近い形状である。外面底部には脚部に方形透かしを穿った際の傷跡が存在する。内面底部には炭化物が付着している。

196は小型の無蓋高環である。外面底部には脚部に方形透かしを穿った際の傷跡が存在する。内面には自然軸が付着する。

197は無蓋高環である。その形状から蓋である可能性も考えられるが、内面の焼成状況から高環としている。

198・199は脚部である。198は透かしは無く、焼成がやや不良である。199は直径0.5cmの小型の円形透かしを穿つ。数量は不明である。

200～202は須恵器把手付碗である。200は把手が根元を残して剥落している。形状から、脚が存在していた可能性も考えられる。201は平底碗である。把手の上端は根元が残るが、下端は体部に挿入した部分が丸々抜け落ちている。口縁端部に細かな欠けが多く存在し、意図的に打ち欠いた可能性もある。202は把手の付け根の周辺に粘土を貼り足している。内外面とも自然軸が付着する。

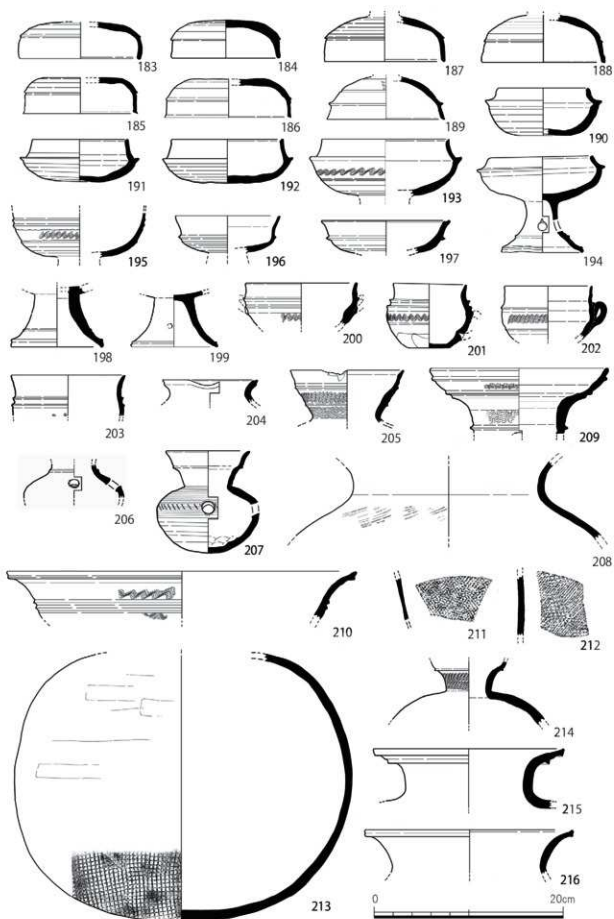


图 39 4区 4301SD 2层出土遗物④ (S=1/4)

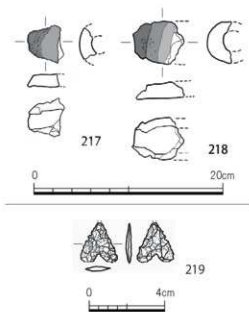


図40 4区、4301SD 2層出土遺物⑤ (S=1/4、1/2) 209・210は須恵器器台である。209は受部底が無い形状である。受部内面には自然釉が付着する。透かしが存在するが、形状は不明である。210は口縁部である。外面に波状文を施す。

211・212は瓦質焼成の甕の体部である。211は外面に細かな格子タタキを、内面にナデ調整を施す。212は外面に格子タタキと縄目タタキを、内面にナデ調整を施す。

213は須恵器甕もしくは壺の体部である。直径25.2cm、残存高28.0cmを測る。やや横長の球形体部である。外面底部付近に格子タタキを施し、他は全体をナデ調整で非常に平滑に仕上げる。直径約20cm大の平坦な面が存在するが、口縁部との位置関係から底部ではなく側面部にあたることを確認できる。

214は須恵器壺もしくは甕である。大型の球形体部に細頸の口縁部がつく。外面に自然釉が付着する。

215・216は須恵器甕の口縁部である。215は復元口径20.0cmを測る。外面口縁部下に垂下して稜を巡らせる。216は復元口径22.2cmを測る。全体をナデ調整で仕上げる。

217・218は輪羽口である。217は先端に鉄小片が融着する。218は先端部で直径4.3cm、送風孔径1.7cmを測る。

219はサマカイト製の石鏃である。凹基式の無茎鏃である。残存長2.1cm、幅2.0cm、厚さ0.2cm、重量0.9gを測る。

220～223は木製品である。今回の調査で出土した木製品は報告時点では保存処理は行っていない。220は曲柄平鍔である。刃部先端の断面は軽く尖る形状である。加工痕は全体の磨滅によりわずかに残るのみである。板目材である。

221は不明木製品である。先切り金づちを想起させる形状であるが、柄に相当する突起部分は先に続かない。

222は棒状木製品である。表面は全体に滑らかに加工されている。先端から約1.5～3.0cmの範囲が他よりも細くくびれている。

223は端部を加工した板材である。田下駄の横木である可能性がある。残存長63.1cm、幅4.3～4.6

203は須恵器壺もしくは鉢である。外面に波状文がわずかに残る。

204は須恵器壺の口縁部である。口縁の一部が注口状に弯曲している。

205は須恵器壺もしくは甕の口縁部である。内外面ともに部分的に漆が付着している。口縁の一部が欠けており、その欠け面上にも漆が付着している。漆を用いる作業用壺であったと考えられる。

206・207は須恵器甕の体部である。206は細頸の甕で、頸部に小さな段をもつ。207は外面体部に櫛状工具先端の刺突文を巡らせる。

208は須恵器壺もしくは甕の頸部である。体部外面にタタキを施し、他はナデ調整で仕上げる。

209・210は須恵器器台である。209は受部底が無い

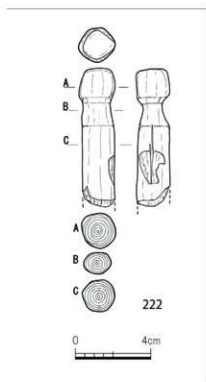
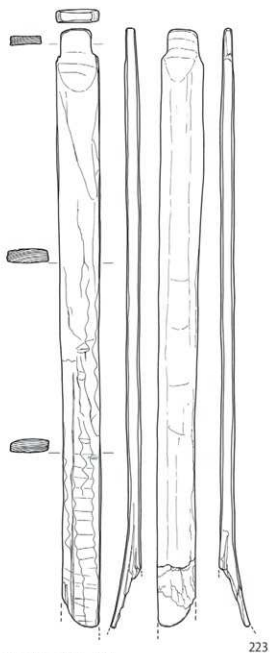
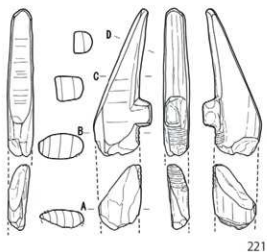
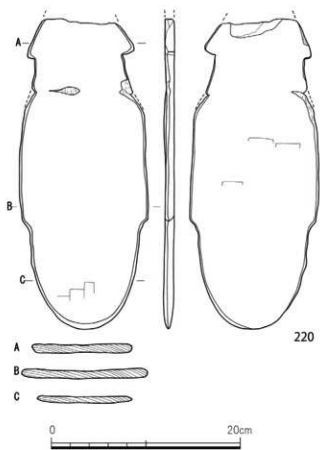


图 41 4区 4301SD 2层出土遗物⑥ (S=1/4, 1/2)

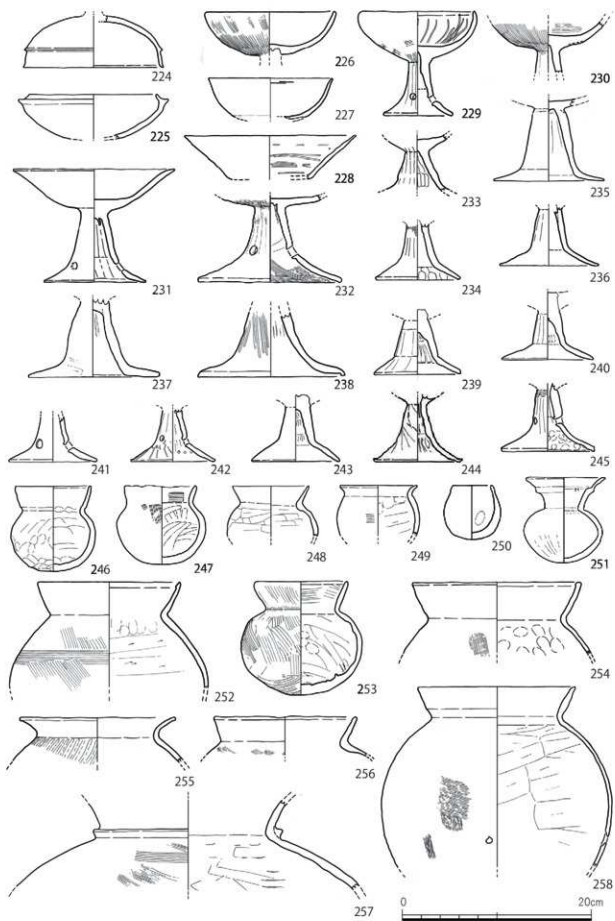


图 42 4区 4301SD 3层出土遗物① (S=1/4)

cm、厚さ 1.5 cmを測る。同様の木製品が 2 区でも出土している（『新堂遺跡Ⅳ』遺物番号 1296）。全長は 223 のほうが長い。

4301SD 3層（図 42～45）

224 は土師器蓋である。同じ河道から多数出土している中期初頭の須恵器蓋と同じ形状の蓋である。全体が黒色を呈し、須恵器の焼き損じではなく土師器の範疇で捉えられる。

225 は土師器環もしくは高環の環部である。224 と同様に同時期の須恵器に見られる形状であるが、焼成は土師器である。外面下半にケズリを丁寧にし、他はナデ調整で仕上げる点は須恵器と同様である。

226～245 は土師器高環である。226 は塊形の環部である。外面に底部中央から放射状に長くハケ調整を施す。内面全体に薄く煤が付着する。227 は底部外面に脚部との剥離痕が広く存在する。228 は直線的に大きく開く形状の環部である。内面に横方向のミガキを施す。229 は塊形高環である。内面環部に縦方向の太いミガキを施す。脚部には円形透かしを三方向に施す。230 は頸部である。外面にはハケ調整を放射状に施す。231 は環部がやや外反する形状である。円形透かしを三方向に施す。環部と脚部の接合面に下から円板を充填している。232 は裾が大きく開く脚部である。円形透かしを三方向に穿つ。233 は太く短い脚柱部に面取りを施す。

234～245 は脚部である。234 は上端部に環部との接合後に施したハケ調整が存在する。235 は環部底面下に突起状の粘土粒が残る。236 は内面脚柱部をケズリで平滑に仕上げる。237 は裾部が低く大きく開く形状で、接地面が広い。238 は裾端部を下方に折り返して、外側に面を作り出す。裾部外面に黒斑が存在する。239 は内面に絞り痕が明瞭に残る。240 は低い脚部に比して、環底部が厚い。内面上端はひび割れている。241 は円形透かしを三方向に穿つ。内面裾部には透かしを穿った際に生じた粘土塊がそのまま付着している。242 は円形透かしを三方向に穿つ。内面裾部に小型の刺突痕が並ぶ。243 は上端部に刺突状の凹みが存在する。244 は内面に三段に分かれて絞り痕が存在する。245 は円形透かしを二方向に穿つ。外面には細かな面取りを施し、脚部上端から環部にかけてハケ調整を施す。

246～248 は土師器小形丸底甕である。246 は体部を内外面とも指で強く削り取っており痕跡が明瞭に残る。247 は直立気味の短い口縁をもつ。口縁端部は波打つ形状である。248 は体部にケズリをやや粗く施す。

249 は土師器小型甕である。外面体部にハケ調整を施す。

250 は手づくね成形の小型甕である。下半部が厚い。全体にナデ調整を施す。

251 は土師器二重口縁甕である。磨滅により外面の細かな調整は不明であるが、全体に平滑に仕上げている。

252・253 は土師器甕である。252 は体部外面に間隔が広いハケ調整を施す。253 は外面にハケ調整を乱雑に施す。内面には粗いケズリを施す。

254～256 は土師器甕の口縁部である。254 は被熱によるものか内面に比べて外面が大幅に劣化している。255 は口縁部が外反し、体部にタタキを施す。古墳時代前期の土器であり、表面の状態からも長く流水に晒され続けていたことがうかがえる。256 は短く直線的に立ち上がる口縁部である。

257 は土師器の大型甕である。頸部に粘土を貼り付ける。内面に粘土紐痕がある。

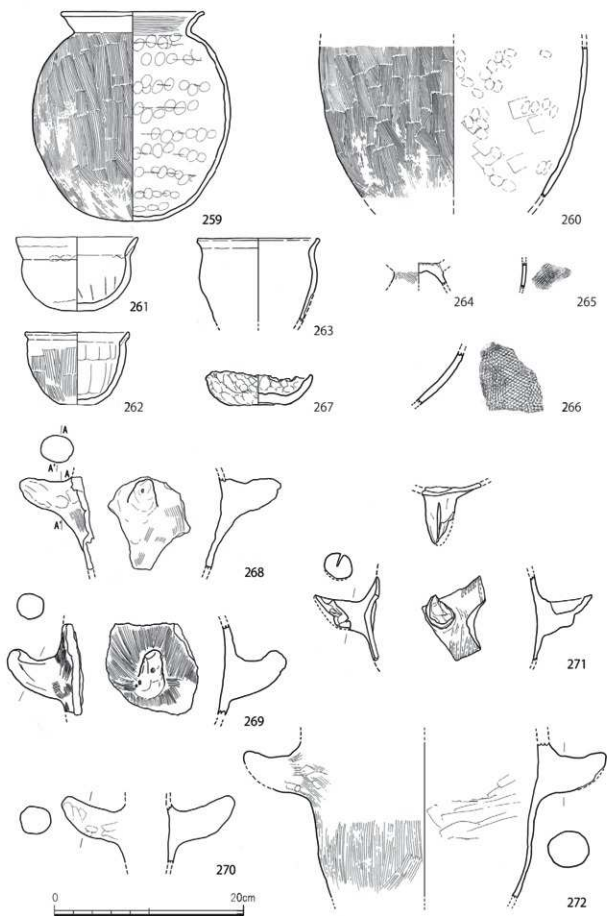


图 43 4区 4301SD 3层出土遗物② (S=1/4)

258・259は土師器甕である。258は体部下半に内側から列り抜いた直径0.5cmの孔が存在する。259は外縁体部に縦方向のハケ調整を施す。外面全体に煤が付着し、下半部に特に多い。

260は土師器甕の体部下半である。外面に煤が付着する。

261～263は土師器鉢である。261はわずかに平底状である。細かな調整は不明であるが、内面には工具の静止痕が存在する。262は平底鉢である。外面には薄く煤が付着し、内外面ともに被熱痕がある。263は全体にナデ調整を施すが、器面に鈍い凹凸が残る。

264は土師器台付甕の台部である。東海系の土器である。外面にハケ調整を施す。

265は瓦質焼成の甕である。外面に細い平行タタキを施し、その上から横方向の沈線を巡らせる。

266は韓式系土器甕の体部である。外面に斜格子タタキを施す。

267は手づくね土器の鉢である。全体に指頭圧痕が明瞭に残る。

268・269は韓式系土器鍋の把手である。268は把手の下面には支え棒痕が存在する。269は把手先端部の下面に支え棒痕がある。把手根元寄りの位置にも二ヶ所、先端部のもよりも小型の窪みがある。把手の貼り付け後にハケ調整を施した後、ナデ調整で仕上げている。

270は韓式系土器甕もしくは鍋の把手である。やや反り上がりながら横方向に長く伸びる把手である。

271は韓式系土器鍋の把手である。把手には上面から浅い切り込みがある。把手外側に粘土を貼り足して作られており、その部分が剥落している。外面体部にタタキを施す。

272は韓式系土器甕である。被熱によるのか表面が全体に劣化している。

273～276は須恵器有蓋高環の蓋である。273は中央が窪むつまみが付く。全体をナデ調整で仕上げる。無文である。274～276は上面に189と同様の櫛描文様が描かれた蓋である。274は同心円文の上に十字文がはみ出して描かれている。275は外側の同心円文のさらに外側に、十字文とずらした位置に文様が描かれている点特徴的である。内面には自然釉が厚く付着する。276は内外の同心円文の間に櫛状工具先端の刺突文を細く巡らせている。275と同様、内面に自然釉が付着する。

277は須恵器高環の坏部である。形状から蓋である可能性もあるが、降着灰の付着状況から高環としている。外面底部には格子タタキを施した後、カキ目を施す。

278は須恵器器台もしくは高環の小型品である。坏部には把手が付く。脚部には方形の透かしを穿つが、小型ゆえ上手く切り抜けていない。

279～281は須恵器高環の脚部である。279は円形透かしを二方向もしくは三方向に穿つ。裾部に歪みがあり、やや座りが悪い。降着物の状況から、上下倒置して焼成した可能性がある。280は菱形の透かしを三方向に穿つ。焼成が悪く灰白色を呈する。281は透かしの有無は不明である。やや焼成が悪い。

282は須恵器器台の脚部である。方形透かしを穿つ。外面に波状文を二条巡らす。

283は須恵器器台の坏部である。外面に二段重ねた波状文を施す他、内面にも波状文を施す。

284は須恵器坏である。把手の有無や底の形状は不明である。外面に波状文を施すが、視認が難しい仕上がりとなっている。内面には自然釉と降着物が多く付着している。

285は須恵器甕もしくは壺の底部である。明瞭な稜をもつ平底である。

286は須恵器壺もしくは鉢の口縁部である。口縁端部に浅い沈線を巡らせる。波状文は細かいがやや乱れがある。

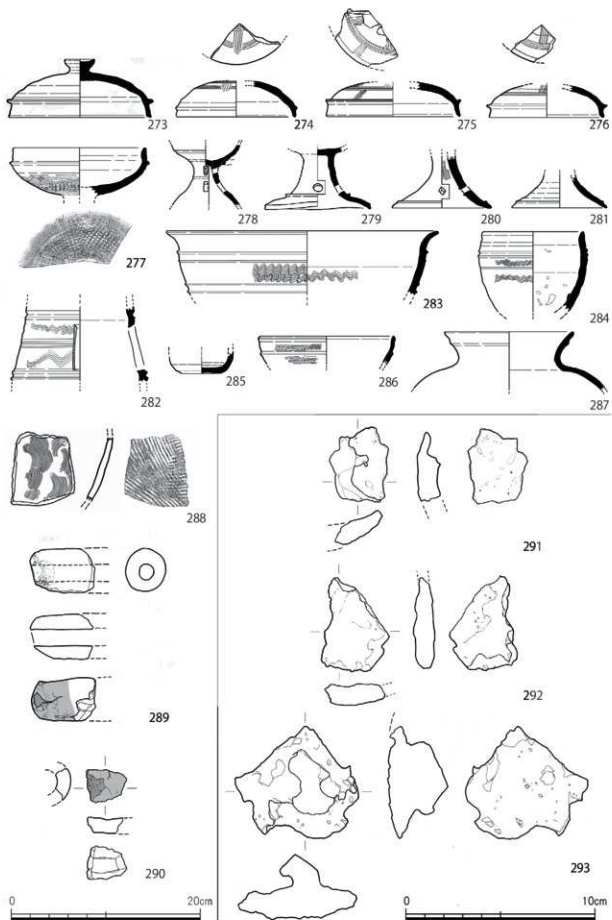


图 44 4区 4301SD 3层出土遗物③ (S = 1/4, 1/2)

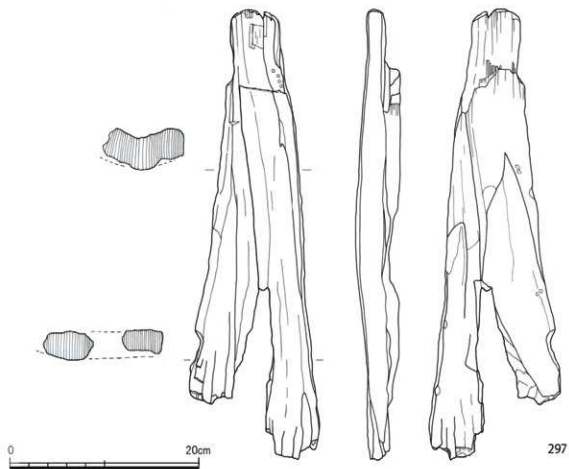
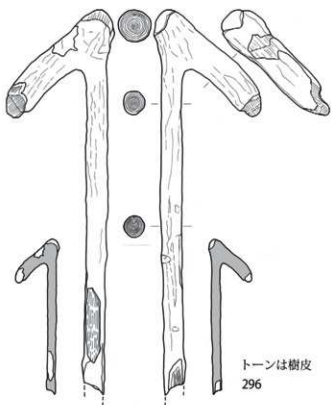


図 45 4区 4301SD 3層出土遺物④ (S = 1/4, 1/2)

287は須恵器壺の口縁部である。外縁体部の調整は自然釉の付着により不明である。他は回転ナデ調整を施す。

288は韓式系土器甕の体部である。外面には平行タタキを交差させて格子目状に施す。内面には非常に細く浅い青海波文がある。

289・290は鞆羽口である。289は排気口側が全体に遺存する。先端部の直径4.0cm、送風孔径1.5cmを測る。先端には鉄分が少量附着している。290は排気口先端に近い位置の破片である。289と概ね同様の形状であったと考えられる。

291～293は鉄滓である。291は弯曲する滓の一部である。重量14.2gを測る。292はわずかに弯曲する。重量14.1gを測る。293は薄い塊形に塊が附着している。重量48.9gを測る。内側は全体に暗灰色、外側は灰白色を呈する。

294は双孔円盤である。結晶片岩製である。直径3.7～3.8cm、厚さ0.2～0.3cm、重量10.9gを測る。孔間の距離は2.0cmである。表面には整形時の擦痕がある。

295は砥石である。長さ4.1cm、幅2.3cm、厚さ0.3～0.5cm、重量8.1gを測る。上部に直径0.3cmの円形孔がある。持ち運び用の紐を通していた可能性等が考えられる。上部を除いた側面にはいずれも使用痕がある。

296は木製の柄である。枝の二股部を利用した芯持ち材である。取り付け部の根元と先端部以外には樹皮が残る。

297は二股状の不明木製品である。平面形は又鎌に似るが、厚さ2.5～3.5cmと分厚い。

4301SD しがらみ遺構 (図46)

298はしがらみ遺構直近の砂層から、299・300はしがらみ遺構内から出土した遺物である。報告分以外でしがらみ遺構内からの出土遺物は少なく、土師器が主である。その他に韓式系土器、須恵器、製塩土器の小片がある。

298は土師器高坏の坏部である。底部に径が大きい脚部上端の剥離痕がある。内面坏部底面には棒状工具による敲打痕が多数存在する。

299は韓式系土器甕の体部である。外面に格子タタキ、内面にナデ調整を施す。

300は韓式系土器もしくは土師器の甕である。長胴気味で平底の体部である。体部外面はタタキを施した後、細かなハケ調整を全体に密に施す。体部中段には並行タタキの痕が多く残る。外面口縁部はタタキの後、ナデ調整を施す。内面もハケ調整を全体に密に施す。外面肩部以下の範囲にごく薄く煤が付着する。

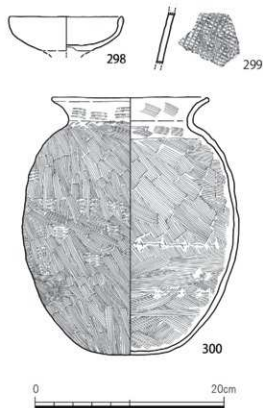


図46 4区 4301SD しがらみ遺構出土遺物 (S = 1/4)

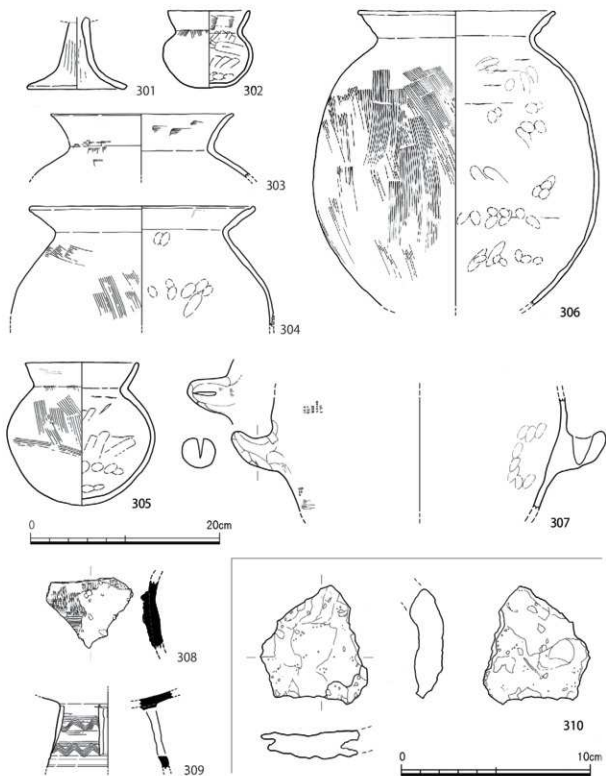


図47 4区 4301SD一括出土遺物 (S = 1/4, 1/2)

4301SD一括 (図47)

4301SD出土遺物のうち、出土層位が明確ではない資料である。

301は土師器高環の環部である。外面脚柱部に面取りを施す。

302は土師器小形丸底壺である。外面は全体に磨滅しているが頸部のハケ調整が確認できる。

303は土師器壺である。口縁部は大きく外反する。外面はハケ調整の後、ナデ調整を施す。

304～306は土師器甕である。304は外面体部にハケ調整を施す。肩部以下に煤がごく薄く付着する。305は全体にやや厚手の作りで重量感がある。外面に黒斑が存在する。306は長胴甕である。外面体部に細かなハケ調整を施す。肩部以下に煤が付着する。

307は韓式系土器鍋である。把手には、平面形が線状で断面三角形の切り込みがある。外面体部に格子タタキを施し、把手の周囲は広くナデ調整を施す。内面には把手取り付け時の指頭圧痕が多数ある。

308は須恵器甕の体部である。外面には焼成時に砂礫が多数融着している。砂礫は焼き台替わりである可能性があり、底部の破片だと考えられる。

309は須恵器器台の頸部である。最上段は方形透かしを四方向に穿つ。坏部底面には自然軸が付着する。

310は鉄滓である。塊形滓の一部であると考えられる。重量38.0gを測る。

4305SD・4319SD(図48)

4区には河道東岸部を中心に古墳時代中期と考えられる溝が複数存在する。これらの溝からの出土遺物の量は河道と比べて非常に少ない。以下に、図化できる資料を報告する。

311は4305SDから出土した土師器小形丸底壺である。表面は全体に磨滅している。

312は4319SDから出土した須恵器高坏の蓋である。復元口径12.2cmを測り、周辺で出土している同様の蓋の中では小型である。頂部の同心円状文は一重のみである。

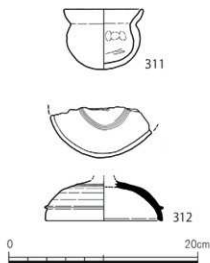


図48 4区 古墳時代SD出土遺物(S=1/4)

第IV章 総括

第1節 調査成果のまとめ

ここでは今回発掘調査を実施した3区・4区の成果についてまとめる。同一の開発事業に基づき先行して発掘調査を実施している1区・2区の調査成果（『新堂遺跡IV』で報告済）についても、適宜、併せてまとめを行う。1～4区的位置関係については図49に示す。

今回の調査では、時期が明確なものとしては古墳時代中期と平安時代後期～鎌倉時代の遺構が存在することを確認している。出土遺物は、古墳時代中期のものが大多数を占め、これより古い縄文時代から古墳時代前期の遺物も少量ながら出土している。

今回の調査成果で中心となるのは古墳時代中期の遺構・遺物である。1区・2区の調査では数量は限定的ながら縄文時代中期～晩期や古墳時代前期の遺構も存在していたが、3区・4区では古墳時代前期以前に遡る遺構は存在していない。

古墳時代中期の遺構では、河道が中心である。今回の調査で確認した3区の3101SD・3105SDと4区の4301SDは、2区の20989SDと同一の河道であり、その下流部にあたる（図49）。この河道は2区中央部で大きく屈曲し、2区北西部・3区・4区では北西方向へ直線的に流下する。流下方向が大きく変化する屈曲部においては川幅が最大20mを越えるが、直線的に流れる地点では幅約10m弱となる。屈曲部のやや下流にあたる2区北西部および3区南東隅の地点には、河道内に水制目的で構築されたと考えられるしがらみ遺構が存在している。しがらみ遺構については次節でまとめる。

河道からは古墳時代中期の遺物が大量に出土している。中でも多量の初期須恵器をはじめとする中期初頭の遺物が多数出土していることが特徴である。この中期初頭の遺物は3区・4区でも出土しており、4区では河道上流部（調査区南東側）ほどこの時期の遺物が多い傾向が明白である。中期初頭の遺物は、平面的には河道屈曲部からしがらみ遺構の周辺に分布の中心があると言える。河道の出土遺物は中期後半のものも多く、3・4区からもまんべんなく出土している。河道は中期末頃にはほぼ埋没していることが2～4区を通じて確認できる。

古墳時代中期の河道の周辺では、河道から東～北側を中心に同時期の遺構が存在する。これら遺構群は大きく三つに分けられる。

1つ目は4区東側の溝群であり、河道と平行もしくは直交する。溝の中には2区-4区間の地点で河道と接続していると考えられる溝も含まれ、河道からの導水路や区画溝であった可能性が考えられる。これらの溝より北東側（4区北東部）については遺構・遺物とも希薄である。

2つ目は、2区北東部の土坑・井戸・ピット群である。大型の建物は見られないが、河岸の作業空間のような場所であった可能性が考えられる。河岸の遺構群としては遺物の出土量が最も多い一帯である。詳細は『新堂遺跡IV』を参照されたい。

3つ目は、2区北東隅の溝群である。全体像が不明で出土遺物も非常に少ないことから位置付けが難しいが、初めに挙げた4区の溝群と一連の区画溝である可能性も考えられる。なお、これら河道東～北側の遺構群は、河道と比較して出土遺物の量が非常に少ない。特に溝からは土器の細片がごく少量出土するのみである。溝へのゴミの投棄はほぼ行われず、水流が保たれていたと言える。

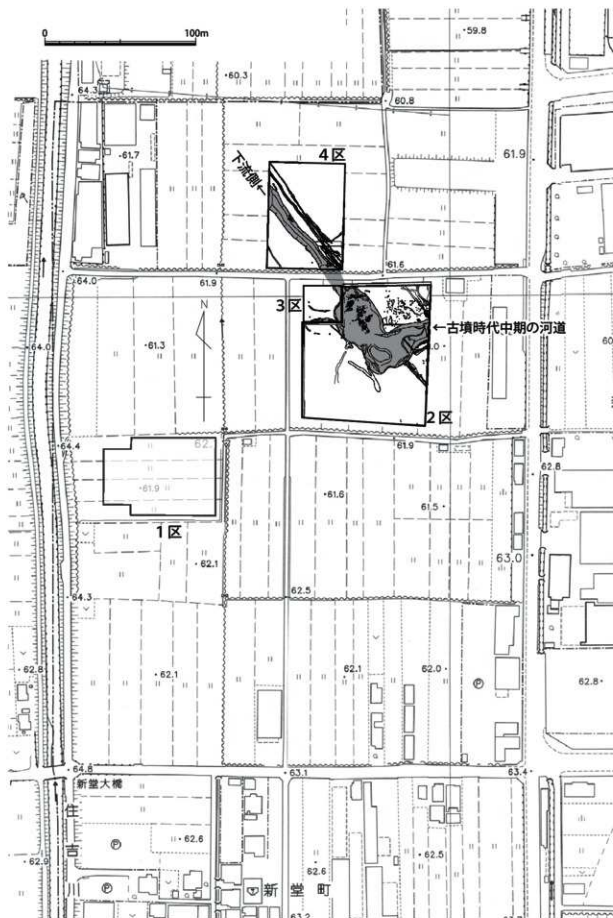


図49 新堂遺跡（標教委2015-4・2016-1・2016-2・2020-2次）発掘調査地位位置図（S=1/2,500）

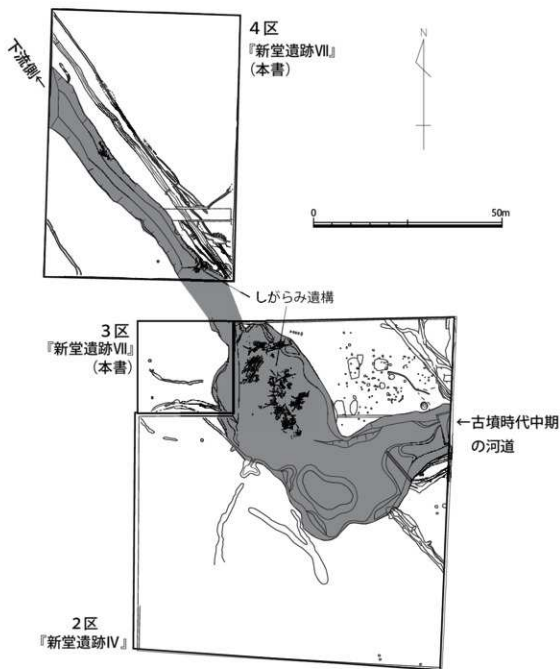


図50 2～4区 古墳時代遺構平面図 (S=1/1,000)

河道から西～南側については、対岸と比較して相対的に目立った遺構は少ない。少数の溝と土坑が存在する程度であり、出土遺物の量も対岸の遺構からの出土量よりもさらに少ない。その中においては今回の調査で確認した3区の3103SDは遺物も一定量出土しており、西岸の主要遺構として位置付けられる。なお、河道内において西～南岸沿いからも多くの遺物が出土している点は、3区と4区でも2区と同様であり、遺構こそ希薄であるものの河道周辺を広く利用していた可能性はある。

古墳時代中期末頃に河道が埋没した後は、周辺の土地利用の痕跡はなくなる。その後は、少なくとも平安時代後期には3区・4区ともに耕作地としての利用が開始されていることが確認できる。以降、現代に至るまで基本的に耕作地としての利用が継続したと考えられる。この間、近隣河川の氾濫を幾

度か受け、その都度再耕地化を行うというサイクルを繰り返している。この活動は1区で特に顕著に確認できる。4区では比較的大型の耕作溝が一定間隔で整然と並ぶ大規模な耕作活動痕跡を確認しているが、南西に約150m離れた1区においても同様の耕作痕跡を確認している。その一方で4区の南隣に位置する2区・3区には存在せず、地域一帯における耕作活動の変遷を考える上で興味深い遺構と言える。

第2節 古墳時代河道のしがらみ遺構

4区の調査では古墳時代中期の河道4301SD内でしがらみ遺構の存在を確認している。2区で確認しているしがらみ遺構と一連の構造物である。4区では河道の南東部にのみ存在しており、2区の調査成果と併せて、河道内においてしがらみ遺構が構築された範囲を把握できたと言える(図50)。河道は2区の中央部で大きく屈曲しており、しがらみ遺構は屈曲部より下流側(北西側)の東岸沿いに構築されている。しがらみ遺構が構築されている範囲は、長さ約55m、幅約6~15mに及ぶ。河道幅との関係を見ると、しがらみ遺構から下流側は河幅が狭くなり流れも直線的になっており水流が安定していることがうかがえる。

しがらみ遺構は、その存在によって河道内の流水を弱め護岸や川筋の安定を図る目的で構築されたと考えられる。水流の制御を行う河川構造物の中でも、河岸から流れの中心に向けて突出する方向に設けられる形式の構造物、いわゆる「水制」にあたる。

今回の調査の新たな成果として、しがらみ遺構の構築時の姿と構築方法が判明したことが挙げられる。4区のしがらみ遺構は構築時の状態を概ね残しており、その調査で明らかにできた構築手順を図51にまとめている。

以前の調査では木材を主体として遺構を認識していたが、これらの木材を骨組みとしてさらに土砂を積み重ねることで非透過性の塊を河道中に造り出していたことが判明した。上流部にあたる2区では構築時の状態から倒壊が進んでいた一方、水流が弱まっている下流側の4区では当初の姿を保つ結果になったと考えられる。ただし、しがらみ構築材の一部である土砂と他の河道埋土との差異は必ずしも明瞭ではなく、2区の調査時にも本来はしがらみ遺構の一部であった土砂を木材検出のために除去してしまった可能性は十分にある。なお、しがらみ遺構は流水の影響を受けて構築時の状態から倒壊が進んだ状態でも河道中にある塊として存在している限り、ある程度以上の機能を果たし続けていたと考えられる。また、流水が緩やかになることで周辺に新たな土砂も堆積し、水制としての機能を補強していたと考えられる。

しがらみ遺構は古墳時代中期初頭に構築され、しばらくは補修等の管理が行われていた可能性が考えられる。しがらみ遺構によって保護されていたと考えられる河道の東岸部一帯には、この時期の土坑や井戸、溝等の遺構が存在しており、当時の土地利用の一端がうかがえる。河道は古墳時代中期のうちに埋没が進み、中期後半の時点でしがらみ遺構の木材部分が全体がほぼ土砂に埋まり、最終的に古墳時代中期末頃に河道が埋没するが、この間の河の流れは基本的にしがらみ遺構の影響下にあったと考えられる。

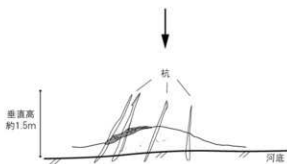
←北西
(下流側)

立面イメージ

南東→
(上流側)



- ① 河底付近に自然堆積した砂やシルトを土手状に盛り上げる。
土手の下流側には樹皮を敷く。



- ② 骨組みとなる竪杭を打ち込む。
杭は先に敷かれた樹皮を貫通している。
杭の先端は河底の粘土層に10~30cm程度食い込む。



- ③ さらに砂・木材・樹皮を積み重ねる。
上半部の木材は竪杭と交差するような形で乱雑に置かれる。
樹皮は上流側にも敷かれるが数は下流側に多い。
河道内に砂・木材・樹皮で構成される非透過性の塊が構築され、
水制の機能を果たすようになる。

図51は模式図である。

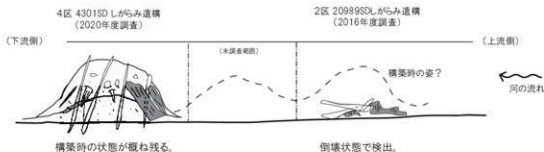


図 51 しがらみ道橋の構築方法と構造

報 告 書 抄 録

ふりがな	しんどういせき7 一おがたしょうぎょうしせつめんせつにともなうはくつちようさほうこくしょー							
書名	新堂遺跡Ⅶ 一大型商業施設建設に伴う発掘調査報告書一							
シリーズ名	橿原市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第19冊							
編著者名	橿原市役所 魅力創造部 文化財保存活用課 石坂泰士・上井佐妃							
編集機関	橿原市役所 魅力創造部 文化財保存活用課							
所在地	〒634-0826 奈良県橿原市川西町 858-1 TEL 0744-22-4001 FAX 0744-26-1114							
発行年月日	西暦 2023年(令和5年)3月30日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しんどう 新堂遺跡	ならけん 奈良県 かしはらし 橿原市 しんどうちよう 新堂町	29205	14C545A	34° 30' 13"	135° 45' 34"	2020/6/1 ～ 2020/12/7	4,125 ㎡	大型 店舗 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
新堂遺跡	集落	古墳時代中期 平安時代後期 ～鎌倉時代		河道(しがらみ遺構) 溝・土坑・落ち込み 土坑・耕作溝群		縄文土器・弥生土器 土師器・韓式系土器 須恵器・製塩土器 石製品・木製品 土師器・瓦器		橿教委 2020-2 次調査 3区 4区
要約	<p>今回の調査は、橿原市教育委員会編 2020『新堂遺跡Ⅳ』で報告を行った新堂遺跡1区・2区と同一事業に基づく発掘調査である。今回調査を実施した3区・4区は2区の北西に隣接する地点に位置する。</p> <p>遺構は古墳時代中期と平安時代後期～鎌倉時代の遺構が存在する。出土遺物には縄文時代後期～古墳時代前期のものも含まれる。</p> <p>古墳時代中期が今回の調査成果の中心である。出土遺物も大多数がこの時期である。古墳時代中期の遺構には河道、溝、土坑、落ち込みがある。河道は2区で確認した古墳時代中期河道の下流部にあたり南東一北西方向にほぼ直線的に流れる。4区南東側では河道内でしがらみ遺構を検出している。これも2区のしがらみ遺構と一連の「水制」構造物であり、その最下流部にあたる。しがらみ遺構の構築時の姿と構築方法が明らかになった点は今回の新たな成果である。河道からは土師器、須恵器、韓式系土器、木製品等、2区と同様の特徴的な遺物が出土している。中期初頭の遺物は河道上流側に集中する一方、中期後半の遺物は河道全体に分散して出土する。河道の他には河道東岸沿いを中心に溝が複数存在している。河道以外からの出土遺物は少量である。</p> <p>平安時代後期～鎌倉時代初頭には調査地一帯は耕作地となり、以後、近現代に至るまでその在り方が継続する。</p>							



調査地全景 航空写真（南西から）



調査地全景 航空写真（南東から）

図版 2



調査地全景 航空写真（南から）



調査地全景 航空写真（南南西から）



3区 平安時代後期～鎌倉時代遺構検出状況（東から）



3区 平安時代後期～鎌倉時代遺構検出状況（南東から）

図版 4



4区南東部 平安時代～鎌倉時代遺構検出状況(東から)



4区北西部 平安時代～鎌倉時代遺構検出状況(北から)



4区南西部 平安時代～鎌倉時代遺構検出状況(南西から)



4区北西部 平安時代～鎌倉時代遺構検出状況(西から)



4区北部 平安時代後期～鎌倉時代遺構検出状況(北東から)



4区 4001SK 検出状況（南から）



4区 4002SK 検出状況（南から）



4区 4001SK 土層断面（南西から）



4区 4002SK 土層断面（南西から）



4区 4001SK 完掘状況（南から）



4区 4002SK 完掘状況（南から）



3区 3104SP 土層断面（南から）



3区 3102SD 東端部土層断面（西から）

図版 6



3区 古墳時代遺構検出状況（南東から）



3区 古墳時代遺構検出状況（南西から）



4区 古墳時代遺構検出状況（南西から）



4区 古墳時代遺構検出状況（西から）



4区 古墳時代遺構検出状況（北西から）



4区 古墳時代遺構検出状況（南東から）



4区 古墳時代遺構検出状況（南東から）



4区 古墳時代遺構検出状況（北から）



3区・4区 古墳時代遺構検出状況 航空写真（北西から）



3区・4区 古墳時代遺構検出状況 航空写真（北東から）



3区・4区 古墳時代遺構検出状況 航空写真（東から）



3区・4区 古墳時代遺構検出状況 航空写真（南から）



4区 4301SD 検出状況（北西から）



4区南東部 SD 群検出状況（南東から）



4区 4309SD・4312SD・4319SD 検出状況（北西から）



4区 4312SD・4306SX 土層断面（南から）



4区 4319SD・4321SD・4306SX 土層断面（南東から）



4区 4314SD 検出状況（南東から）



4区 4309SD 検出状況（南から。手前は 4301SD）

図版 14



4区 4317SD (左)・4316SD (右) 検出状況 (南西から)



4区 4310SD 検出状況 (南東から)



4区 4312SD 南端部土層断面 (北西から)



4区 4312SD 中央部土層断面 (南東から)



4区 4322SP・4323SP 検出状況 (西から)



4区 4302SD 完掘状況 (南西から)



4区 4311SD 土層断面 (北東から)



4区 4305SD 東端部土層断面 (南西から)



4区 4316SD・4319SD 土層断面 (南東から)



4区 4308SK 土層断面 (南から)



3区 調査区西壁土層断面 (南東から)



3区 調査区北壁土層断面 (南西から)



4区 調査区東壁南端部土層断面 (南西から)



4区 調査区南壁東半部土層断面 (北東から)



4区 調査区南壁西半部土層断面 (北東から)



4区 調査区北壁土層断面 (南西から)

図版 16



4区 4301SD 先行トレンチ北壁土層断面（南東から）



4区 4301SD 北半部1層底面蛇行流路検出状況（南東から）



4区 4301SD 南半部1層底面蛇行流路検出状況（南東から）



4区 4301SD 1層底面蛇行流路完掘状況（南東から）



4区 4301SD 1層底面蛇行流路遺物出土状況（南東から）



4区 4301SD 北半部流木出土状況（南から）



4区 4301SD 2層遺物出土状況（東から）



4区 4301SD 2層遺物出土状況（南から）



4区 4301SD 3層検出状況（南東から）



4区 4301SD しがらみ遺構上端部検出状況（北西から）



4区 4301SD 2層遺物出土状況（南東から）



4区 4301SD 2層遺物出土状況（南から）



4区 4301SD しがらみ遺構上半部背面検出状況（北西から）



4区 4301SD しがらみ遺構検出状況（南から）



4区 4301SD しがらみ遺構検出状況（南西から）



4区 4301SD しがらみ遺構検出状況（北東から）



4区 4301SD しがらみ遺構検出状況（東から）

図版 20



4区 4301SD しがらみ遺構上半部検出状況（南西から）



4区 4301SD しがらみ遺構周辺土層断面（北から）



4区 4301SD しがらみ遺構下半部背面検出状況（西から）



4区 4301SD しがらみ遺構竪杭検出（西から）



4区 4301SD しがらみ遺構竪杭・樹皮検出状況（東から）



4区 4301SD しがらみ遺構河岸竪杭検出状況（南から）



4区 4301SD しがらみ遺構竪杭先端土層断面（北西から）



4区 4301SD しがらみ遺構竪杭先端土層断面（西から）



4区 4301SD 完掘状況（北西から）



4区 4301SD 完掘状況（南西から。北西端は調査途中）



4区 古墳時代遺構完掘状況（北東から）



4区 古墳時代遺構完掘状況（北から）



4区 古墳時代遺構完掘状況（南東から）



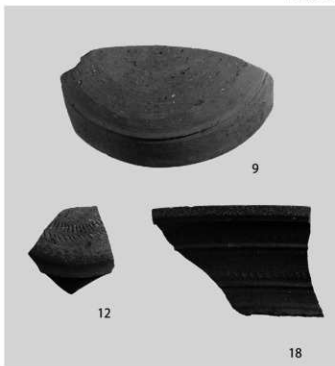
4区南東部 古墳時代遺構完掘状況（北東から）



3区 古墳時代遺構完掘状況（南西から）

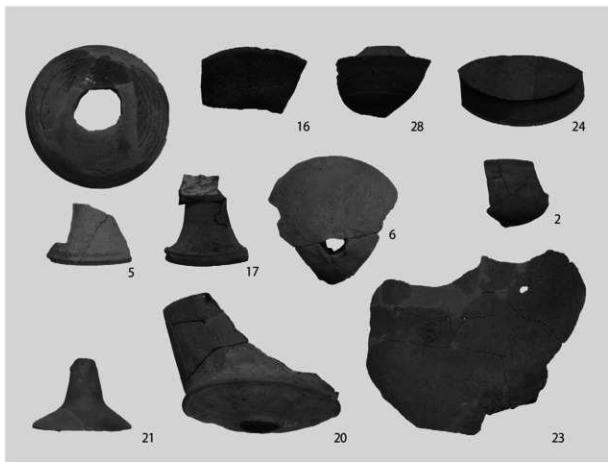


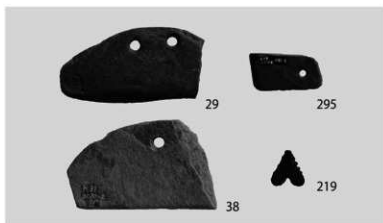
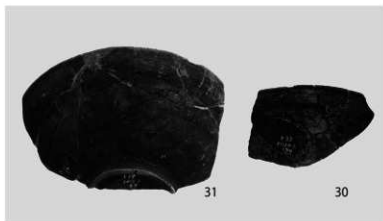
3区・4区 古墳時代遺構完掘状況（南東から）



図版 26

3区
耕作溝群
3101S.D.
3105S.D.
3103S.D出土遺物





3区
表採遺物、
4区
耕作溝群、
4301SD出土遺物

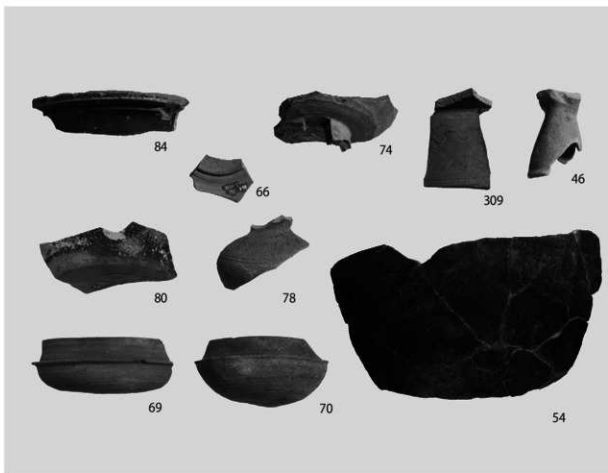
图版 28

4区
4301SD出土遺物





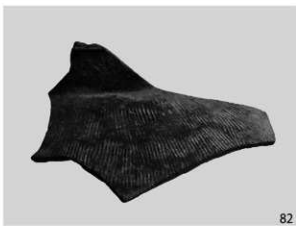
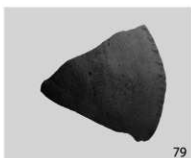
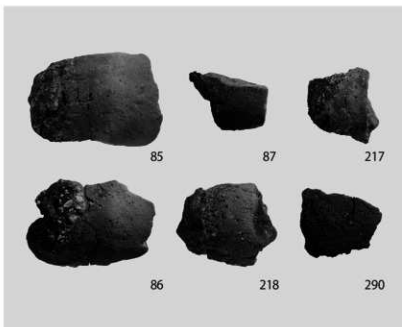
53

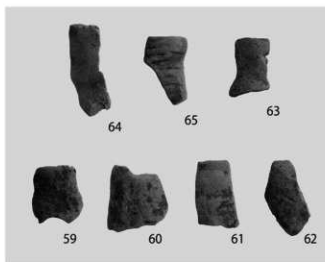
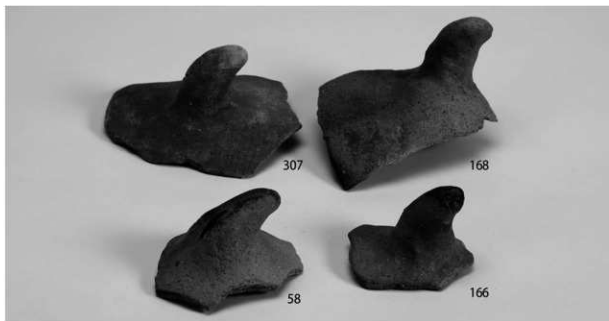


54

図版 30

4区
4301SD出土遺物

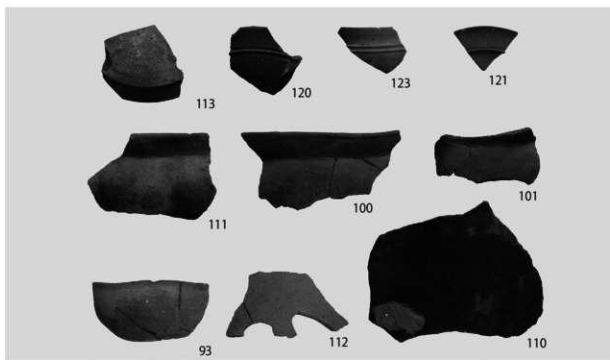




图版 32

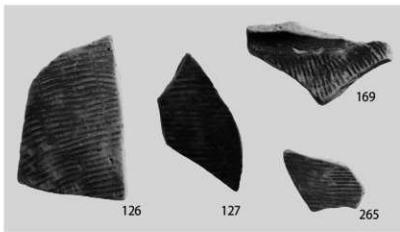
4区
4301SD出土遗物





图版 34

4区
4301SD出土遗物





图版 36

4区
4301SD出土遺物

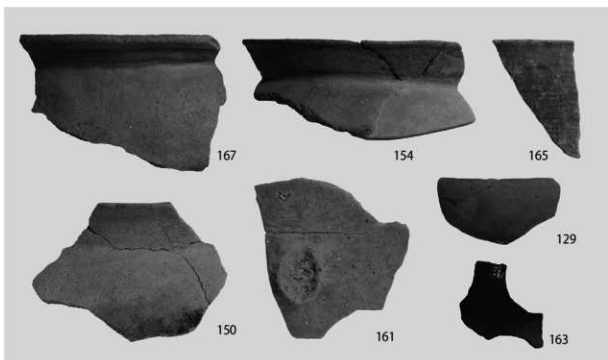




159



160



149

154

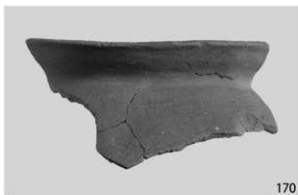
165

150

161

129

163



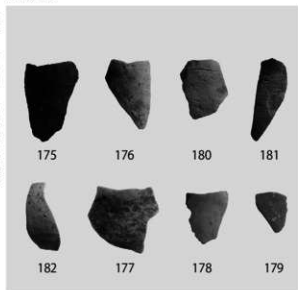
170

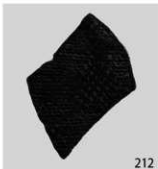
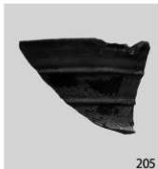
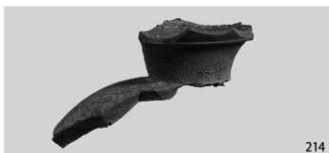


174

图版 38

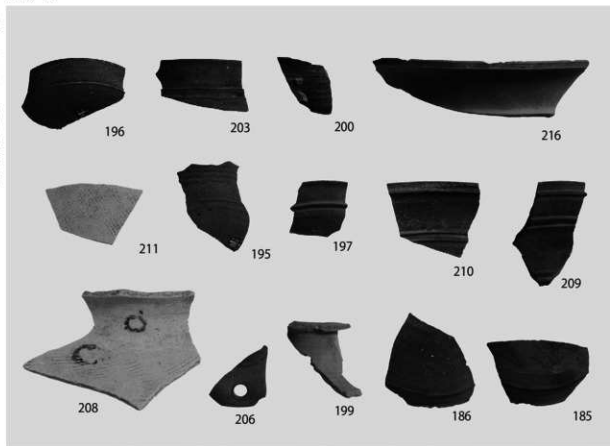
4区
4301SD
出土遺物





图版 40

4区
4301SD出土遺物





224



225



229



231



232



238



246



247



249



250



256



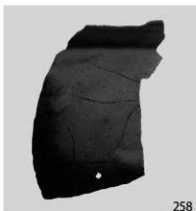
257



251



253



258

図版 42

4区
4301SD出土遺物





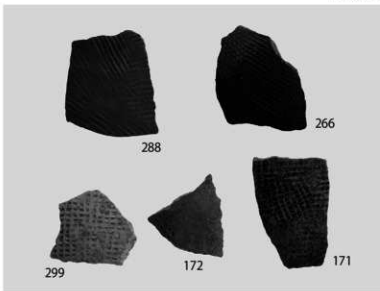
269



271



272



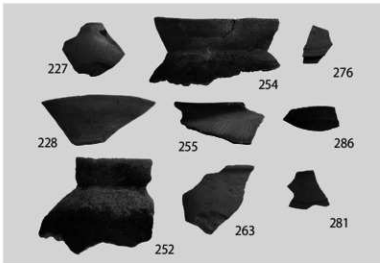
288

266

299

172

171



227

254

276

228

255

286

252

263

281



273



274



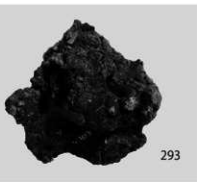
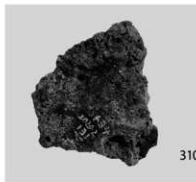
275



277

图版 44

4区
4301SD出土遺物





4区
4301S.D.
4305S.D.
4319S.D
出土遺物

图版 46

3区
3101SD、
4区
4301SD
出土馬齒



橿原市埋蔵文化財調査報告 第19冊

新堂遺跡Ⅶ

—大型商業施設建設に伴う発掘調査報告書—

発行年月日 令和5（2023）年3月30日

編集・発行 奈良県橿原市役所

印刷 株式会社 サカタ企画印刷

奈良県磯城郡田原本町松本131-1